

事件の全貌を
この1冊に凝縮！

全員が
20代だった！

連合赤軍事件 を読む年表

年表にしてはじめて見えてきた
事件へと至るプロセス
社会情況との密接な連関
元連合赤軍兵士・植垣康博による
詳細な「解説」を付す

椎野礼仁
著

Offside オフサイドブックス.....22
books

彩流社

椎野礼仁編

連合赤軍事件 を読む年表

事件の全貌を
この1冊に凝縮！

【写真提供・共同通信社】

年表にしたら、見えないと

あさま山莊の銃撃戦とその後に続いた連合赤軍事件のニュースが世間を震撼させたから早くも30年たつ。30年と言ふと、36歳の人は、連合赤軍事件のリアルタイムの記憶はないということになる。にもかかわらず、連合赤軍事件はいまなお少くない人々の題目を集めている。

なぜか。それはこの事件が「世纪の今日」だからだろう。

連合赤軍事件、とりわけ同志殺害の事実は、左翼運動に致命的といつていい打撃を与えた。事件以降、「左翼」は大衆的な民心力を失った。「左翼」はいまや死語となりつつある。

とも、その原因は「連赤」だけにあるわけではなく、30年前だとはいえ、この日本で実行されたということは「重大」、「疑問產生」、「社会的公論」のような事態に至ったのか?

この「なぜ」は30年の間、繰り返し問われ続けられたものだが、決して陳腐化しないのも、「組織と個人」「社会の変革とは何か」といった問題を考える際、必ずつきまとなのだ。

「何を大袈裟な」と思われるときは、第3章の「総括」の場面を見よ。

人はこの本を手にとらないはず。

さて、事件の全貌像をつかむのなら、著者による証言を参考にすると、永田洋子「十六の墓標」(上・下)、事件の歴史とした記述

墓標では、一人の人間が発展していく様を筆談と微筆談をも

植垣康博「兵士たちの連合赤軍」(上・下)、各章ごとに青春小説といふ

は受けないだろう。

ただ、それらは膨大な分量があるのと、人間関係、事実関係が入り組んでいて、思わずメモをとり整理したくなる、「十六の墓標」いう発想から生まれたのが本書だ。

この読む年表は、関係者の著述、当時の記録などをもとに、時系列に沿って「事実

している。矛盾は矛盾のまま、混沌と混沌のままにしてある。それが現実の肌触りだ

からだ。

年表によつて改めて、初めて「氣がよく」と多い「赤軍派と革命左派」「當時は「京浜共闘」という名で報道され、これは当初より別個の山岳ベースを持つてて、その流れしていること。また、ベーリースの連合赤軍としての活動は、指導部(中央委員)は会議、指導部はまき作りをそんそんとくり返していることなどは、その典型例だろう。

また、なにより、ひとひどく独立していると思える事象が、互いに結びついている原因

再生したりして、結びついていくことが年表からみえてくる。

日本赤軍のリーダー重信房子は言う。「自分たちの「リッダ闘争」(イスラエル空港で岡本公三ら3人が銃を乱射)は、連合赤軍の同志殺害について反省して結果の「自爆テロ」の遠因には、連合赤軍事件があるかも知れない。

それくらい、連合赤軍事件は「重信」の原點

*

なお文中は敬称を略させていたが、これは原則的に「一括り」である。参考文献は、(永田)「久能泰」などとして出版を示すが、感想であるところ、証言どうしに矛盾があるが、どうも

第一章 連合赤軍前史

1945-1969／新左翼の誕生から69年「4・28」まで

第2章 革命左派と赤軍派の出現

1964-1971／同派の「武装闘争」

第三章 連合赤軍の成立と「総括」

1971.11.30-1972.2.18／死に至る総括の過程と森・永田らの逮捕

第四章 あたままでの10日間

1972.2.19-2.28／銃撃戦の多角的な検証

第五章 もの後の「連合赤軍」

1972.2.28-／裁判じぞれの総括

第六章 解説に代えて

植田康博ロング・インタビュー／当事者による連合赤軍「こまだから語られる」と「

133

121

65

21



第一章

連合赤軍前史

1945-1969

新左翼の誕生から69年「4・28」まで

20代の若者集団が、
なぜあのような事件を起こすに至ったのかを考えるには、
その時代背景を知らなければならない。
ねじれた敗戦処理、朝鮮戦争、高度経済成長、
日米安保条約、ベトナム戦争、大学問題……
「新左翼」が連日マスコミをにぎわす時代があった。

写真：67年10.8羽田闘争

新左翼運動へ

1945

社会状況

6

1945

- G.H.Qによる民主化路線で共産党や全学連が成立
- 10月4日 ● G.H.Q（連合国総司令部）の「人権指令」により、治安維持法などで勾留されていた思想犯など2500人が釈放。このとき出獄してきた旧共産党幹部によつて日本共産党が初めて合法政党として誕生。
- 11月、行動綱領、規約などが決められる。
- 1946**
- 1月4日 ● 第1次公職追放。G.H.Qは軍国主義者等の戦犯容疑者、軍首脳部、大政翼賛会幹部、文筆家などの公職からの追放を指令。軍国主義、超国家主義団体などの解散も命令。
- 予定だった。要求が官公庁労働者の待遇改善から内閣退陣のゼストとエスカレートしたため。
- 11月、行動綱領、規約などが決められる。
- 1947**
- 2月1日 ● マッカーサーの命令により2・1ゼネスト中止。官公労を中心に600万人が参加
- 予定だった。要求が官公庁労働者の待遇改善から内閣退陣のゼストとエスカレートしたため。
- 全学連（全日本学生自治会総連合）結成。国公私立145校、30万人が参加。
- 1948**
- 4月1日 ● ベルリン封鎖。
- 8月13日 ● 大韓民国成立。
- 9月9日 ● 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）結成発表。
- 1949**
- 国鉄をめぐる3つの事件
- 1950**
- 7月5日 ● 下山事件（国鉄下山総裁が行方不明となり、翌日常磐線北千住—綾瀬間の線路上で轢死死体で発見）。
- 7月15日 ● 三鷹事件（国鉄中央線三鷹駅で無人電車が暴走。派出所と民家へ突入。死者6名、重軽傷者20名を超えた）。
- 8月17日 ● 松川事件（東北本線松川駅近くで列車転覆。乗員3名死亡。何者かによりレールの釘が抜かれていたのが原因）。
- 3事件とも国鉄の人員整理との関係が取り沙汰され、三鷹事件、松川事件では共産党員などがそれぞれ10名、20名起訴された。これらを契機に労働組合は弱体化したが、両事件とも、後の裁判で獄死した1人を除き、全員無罪となつた。松川事件では、作家広津和郎らが「検察・警察の共産党に対する予断が招いた冤罪事件」と裁判批判運動を展開。両事件とも未解決だが、犯行の規模や組織性から労働運動の抑圧を狙つたG.H.Q・公安機関の陰謀説も根強く囁かれた。
- 10月1日 ● 中国革命に勝利した毛沢東が中華人民共和国の成立を宣言。
- 1950**
- 1月6日 ● コミンフォルム（ソ連や東欧の共産主義政党の連絡機関）が日本共産党の平和革命論を批判。アメリカの占領下での平和革命は不可能と批判した。これが翌年の共産党内部の争いにつながつた。
- 2月9日 ● アメリカでマッカーサー上院議員が国務省に57人の共産党員がいると非難。マッカーシー旋風（赤狩り）の開始となる。
- 朝鮮戦争と日本国内の再編
- 6月25日 ● 朝鮮戦争勃発。前年の中華人民共和国の成立以来、韓国はアメリカにとって重要な中國大陸への足がかりだった。戦争は当初北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）軍が韓国南端まで侵攻するが、アメリカ軍・国連軍も仁川上陸作戦で巻き返し、中国の義勇軍も参戦するなど、南北の境界線・北緯38度線をめぐつて一進一退の攻防が翌年7月まで続いた。
- 日本国では経済が朝鮮特需に湧いたが、革命の波及を怖れレッドバージや警察予備隊の新設を誘引することになった。
- 8月10日 ● マッカーサーの指令により警察予備隊（後の自衛隊）令を公布。警察予備隊という
- 7月2日 ● 金閣寺、放火で全焼。
- 5月3日 ● 吉田茂首相、東大総長南原繁の全面講和論を「曲学阿世」と非難。
- 6月25日 ● 朝鮮戦争勃発。
- 10月4日 ● 中国、全面的内戦開始。
- 11月3日 ● 日本国憲法公布（47年5月3日施行）。
- 10月24日 ● 國際連合成立。
- 3月31日 ● 教育基本法・学校教育法公布。
- 4月1日 ● ベルリン封鎖。
- 8月13日 ● 大韓民国成立。
- 9月9日 ● 朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）結成発表。
- 10月4日 ● 北大西洋条約機構（NATO）成立。
- 10月7日 ● ドイツ民主共和国（東ドイツ）成立。

新左翼運動

社会状況

名前ではあるものの内閣綜理府の直属で、任務は犯罪捜査ではなく非常事態宣言下の治安維持など。2年後には保安隊、さらに4年後の1954年には自衛隊と組織改編され、日本の再軍備へ

7月24日 レッドページ始まる。GHQ、新聞・放送界からの共産党員やシンパ（同調者）の追放を指示。東京では報道関係50社で従業員の2%にあたる702人が解雇された。9月1日に公務員のレッドページが閣議決定。この動きは程なく民間企業にも波及した。

1951

●共産党 5位 7.7%
●日本共産党の主流派（所感派）、

2月 ①日本共産黨の主流派（所感派）、コミニファルム批判を受け入れ国際派を除名
9月3日 ②サンフランシスコで対日講和条約。日米安全保障条約締結。アメリカ、イギリス

7月10日 朝鮮休戦会談

●サンフランシスコで対日講和条約、日米安全保障条約締結

（）戦勝国49カ国が対日講和条約に調印。中国抗敵の英米のヨーロッパなど日本へも、日本とアメリカは安保条約（日米安全保障条約）に調印。米軍への基地貸与、極東地域での戦争への在日米軍の出動などが決められた。
10月16日 共産党51年テーボを採択し武装闘争路線へ。共産党は第5回全国評議会（五全協）で日本革命を反帝・反封建の民族・民主革命と定義。山村工作隊（農村を拠点に都市を包围する）による武装闘争等の路線を探討した。全学連の学生へも「学園から農村へ」の指示。

256

1月21日 ●白鳥事件。札幌市警の白鳥警部が射殺された事件。警察は共産党軍事組織の犯行断定し、共産党札幌地区委員長村上国治（29歳）を逮捕。村上は犯行否認のまま起訴され、最裁で有罪確定。

2月20日 ●ボボロ座事件。東大校内で小林多喜二祭を開催中の学生劇団ボボロ座の公演に、服警官が潜入。3名が学生に捕まり、警察手帳を押収され始末書を書かされる。警察は学生を

1956

捕したが矢内原忠雄東大総長は非は不法潜入した警察にあるとして学生の釈放を要求。警察による学内偵察・情報収集も暴露され、大学自治への侵害として国会でも問題となつた。

5月1日 ●血のメーデー。戦後メーデー会場として使われていた人形広場は1950年にGHQが使用禁止にしていたが、この日モソ隊の一部が皇居前広場に乱入。後続も含め6000人にふくれあがつた労働者らと警官隊5000人が激突。警官隊の発砲で2人死亡。負傷者は1500人に。騒擾罪が適用され7月末までに1232人が検挙、261人が訴された。

451

3月5日 ●ソ連のスターリン首相・共産党中央書記長が死亡。日本では株価のスターリン暴落する。対西側強硬策を探っていたスターリンの死亡に、東京証券取引所では軍需関連株を中心に値が大暴落した。

6月13日 ●内灘の反基地闘争激化。石川県内灘村で米軍の試射場無期限使用に反対する農民が座り込みによる実力阻止。支援の労働者・学生らと警官隊が衝突。

9961

●共産党、六全協で武装闘争路線を撤回

10月17日 文部省 通達。國旗掲揚・君が代歌唱を

●この年、特需景気。
食え」発言、正確には「一月得の少ひし人には見る
食う。多い人は米を食う（というのが経済の原
則）」。

1561

7月10日 ●朝鮮休戦会談

104

104

4月21日 ●造船疑獄で指揮権発動、佐藤栄作自民党幹事長、逮捕を免れる。
7月21日 ●インドシナ休戦協定。これによりフランスは植民地を放棄。ベトナムは2年後で統一政権を選ぶまで北緯17度で2分さわることになった。統一選挙は米国の圧力で中止になった。

5月14日 ソ連・東欧7国、ワルシャワ条約

新左翼運動へ

社会状況

2月 ●六全協で共産党が武装闘争方針を撤回。スターイン死後の国際共産主義運動「右傾化」と冷戦・平和共存路線の中で、日本共産党は第六回全国評議会で武装闘争路線を撤回。この方針

転換は、山村工作隊、中核自衛隊として運動を担っていた活動家や全学連に多大な混乱を招いた。
9月13日 ●砂川闘争。東京・砂川町の立川基地拡張予定地の強制測量をめぐって、地元の反対同盟および支援の労組と警官隊2000人が激突。翌年10月13日には第2次測量が強行されたが、反対派の抵抗が強く、政府は14日に測量中止を発表。支援の全学連は反対運動各派から賞賛を得、学生運動史に輝く闘争となつた。しかし、学生運動を政治闘争から日常生活の改善要求に転換を図つていた共産党はこれを批判。共産党と全学連主流派との対立は徐々に溝を広げていった。

8月6日 ●原水爆禁止第1回世界大会開催。

9月19日 ●原水爆禁止日本協議会（原水協）結成。

10月 ●社会党統一、11月保守合同（自由民主

党結成）で、いわゆる「55年体制」成立。

●下期～57年上期「神武景氣」。

●ソ連共産党20回大会でフルシチヨフ第1書記がスターイン批判を開始。革命の祖国ソ連でレーニンの跡を継いだ指導者として神格化されていたスターインへの批判は、世界中の共産党に衝撃を与えた。

10月 ●ハンガリー動乱。首都ブダペストで起きた反政府（＝反共産党政権）デモに対し、ソ連が軍事介入。日本共産党がこれを支持したのに対し、全学連や学生党員を中心し反発・離反が進む。これらの人々は共産党に代わる「眞の前衛党」を追求、共産同（ブント）、革共同などが結成されるひとつの萌芽となつた。

1956

●ブント、革共同の誕生

2月24日 ●ソ連共産党20回大会でフルシチヨフ第1書記がスターイン批判を開始。革命の祖国ソ連でレーニンの跡を継いだ指導者として神格化されていたスターインへの批判は、世界中の共産党に衝撃を与えた。

10月 ●日本トロツキスト連盟が革共同（日本革命的共産主義者同盟）と改称。この後59年8月には第四インター系が分派、63年4月には革マル派が分派し、残つた主流派は中核派を名乗る。

赤軍派は、第2次ともいわれるブントの分裂の中から69年5月に結成され、9月に隊列として日本公園に登場することになる。

1957

1月 ●日本トロツキスト連盟（革共同の前身）結成。

10月 ●日本トロツキスト連盟が革共同（日本革命的共産主義者同盟）と改称。この後59年8月には第四インター系が分派、63年4月には革マル派が分派し、残つた主流派は中核派を名乗る。

赤軍派は、第2次ともいわれるブントの分裂の中から69年5月に結成され、9月に隊列として日本公園に登場することになる。

1958

1月 ●日本トロツキスト連盟（革共同の前身）結成。

10月 ●日本トロツキスト連盟が革共同（日本革命的共産主義者同盟）と改称。この後59年8月には第四インター系が分派、63年4月には革マル派が分派し、残つた主流派は中核派を名乗る。

赤軍派は、第2次ともいわれるブントの分裂の中から69年5月に結成され、9月に隊列として日本公園に登場することになる。

1959

12月 ●共産主義者同盟（第1次ブント）結成。日本共産党を除名された全学連主流派の学生党員を中心に結成。同盟という意味のドイツ語ブント（Bund）が通称となる。60年安保闘争を指導。ブントはその後、何回か分裂を経るため、このときを第1次ブントと呼んで区別する。

赤軍派は、第2次ともいわれるブントの分裂の中から69年5月に結成され、9月に隊列として日本公園に登場することになる。

1960

●60年安保闘争

●安保条約（日米安全保障条約）の改定をめぐり、国論が二分。1959年、社会党、総評、原水協などが安保改定阻止国民会議を結成し（共産党はオブザーバー参加）、約20次の統一行動。史上最大の大衆政治運動として盛り上がりを見せたが、60年5月には自民党が衆議院で新安保条約を强行採決。自民党的反対派も欠席する中の単独採決だった。この過程で反対運動の強固な翼を担つた全学連（全国学生自治会総連合）主流派（反日本共産党系）は、3次にわたり国会突入などの実力闘争を取る。

●しかし6月には新安保条約は自然成立。この安保闘争の評価をめぐり、吉本隆明は「擬制の終焉」（1960年）を著し、大衆闘争の盛り上がりと、にもかかわらずそれに対応できなかつた日本共産党の前衛党（革命を指導する党）としての失墜を指摘した。

●60年安保を「壮大なゼロ」と評するのは、右のような政治状況、つまり大衆闘争としては莫大な規模のものだったが、政治的獲得目標（安保改定反対）は達成されず、大衆闘争も自然発生性に依拠するだけで、社会を変える運動にならなかつた（＝革命の視点に立てば、前衛党に結果する主体として組織化できなかつた）ことを指す。

1960

●年の年「若戸景気」。

6月10日 ●来日した米大統領秘書ハガチーが羽田空港でデモ隊2万人に包囲され、米軍のヘリコプターで脱出。これによりアイゼンハーウー米大統領の来日は中止となつた。

6月15日 ●安保改定阻止第2次実力行使に総評・中立系労組111組580万人が参加。夕刻、8000人で国会デモに加わつていた全学連主流派が国会構内に突入。警官隊との衝突の中で東大生権美智子死亡。大衆的な政治闘争の中での初の死者は、大きなニュースとなつた。

1960

6月10日 ●来日した米大統領秘書ハガチーが羽田空港でデモ隊2万人に包囲され、米軍のヘリ

コプターで脱出。これによりアイゼンハーウー米大統領の来日は中止となつた。

6月15日 ●安保改定阻止第2次実力行使に総評・中立系労組111組580万人が参加。夕刻、8000人で国会デモに加わつていた全学連主流派が国会構内に突入。警官隊との衝突の中で東大生権美智子死亡。大衆的な政治闘争の中での初の死者は、大きなニュースとなつた。

1960

新左翼運動

社会状況

6月19日 ●「権美智子全学連追悼集会」に6000人が集結。共産党は「犠牲者を出した責任はトロツキスト指導部にある」と集会をボイコット。

6月23日 ●新安保条約発効。岸信介首相が退陣表明。

7月4日 ●全学連第16回大会で安保闘争の総括をめぐってブースは3つに分裂。ほどなく第1次ブースは終焉。

●白色ラロル勃発

10月12日 ●社会党浅沼委員長、日比谷公会堂で17歳の右翼の少年に肩を刺されていた。左翼の大衆運動の盛上がりに対する、右翼陣営の危機感の表われといわれた。

1961

2月1日 ●中央公論社の社長宅で17歳の右翼少年が短刀で家政婦を刺殺、社長夫人に2カ月の重傷を負わす。深沢七郎の作品『風流夢譚』を雑誌「中央公論」に掲載したことに対議したものの革命が成功し天皇が処刑されるのを見物する夢を見たという小説で、官内庁が皇室に対する名譽毀損として問題視していた。

12月21日 ●中央公論社、「思想の科学」天皇制特集号を業務上の理由で発売中止に。

1962

12月21日 ●中央公論社、「思想の科学」天皇制特集号を業務上の理由で発売中止に。

1963

4月 ●革共同が前衛党建設を優先する革マル派（革命的マルクス主義派）と大衆闘争重視の中核派に分裂。
5月1日 ●狹山事件起こる。誘拐事件とともに被差別地区が集中的に捜査され、同地区出身の石川一雄が別件逮捕される。被告側は無罪を主張し上告したが、77年に無期懲役刑が確定。
60年代、70年代を通じて、狹山差別裁判闘争は新左翼の重要な闘争課題となつた。

1964

4月1日 ●日本、IMF（国際通貨基金）の8条国に移行。●海外渡航自由化。
6月3日 ●韓国政府、朴大統領の退陣を要求する学生らに対し、ソウルに非常事態戒厳令。
6月 ●第51回芥川賞に柴田翔「されどわからが日々」。学生運動に関わる群像を描いた。
8月2日 ●トンキン湾事件。米、米軍艦が北ベトナム軍に攻撃されたと発表。
10月10日 ●東京オリンピック開催される。
11月12日 ●米原子力潜水艦シードラゴン号、佐世保入港。翌日反対派と警察、衝突。

1965

3月 ●社会党の下部組織社青同から社青同解放派が分派。67年10月にはその政治組織として革

8月1日 ●東京・山谷のドヤ街で、3000人がマンモス交番を襲撃する。

9月10日 ●カラーテレビ本放送。

12月20日 ●南ベトナム民族解放戦線結成。

12月27日 ●池田勇人内閣、国民所得倍増計画を閣議決定。

12月27日 ●東京・山谷のドヤ街で、3000人がマンモス交番を襲撃する。

12月27日 ●池田勇人内閣、国民所得倍増計画を閣議決定。

1961

4月12日 ●ソ連のガガーリン、「地球は青かつた」。人類初の宇宙飛行を終えての発言。57年の世界初の人工衛星打ち上げに続くソ連の成果。

5月16日 ●韓国、朴正熙による軍事クーデタ

8月13日 ●東ドイツ、ベルリンの壁構築。

1962

2月8日 ●米、南ベトナムに軍事援助司令部設置。

10月22日 ●キューバ危機。

1963

1月 ●テレビアニメ「鉄腕アトム」放送開始。
3月31日 ●吉展ちやん誘拐事件。
8月5日 ●米英ソ3国部分的核実験停止条約正式調印。14日、日本、同条約に調印。31日、中国、同条約に対し批判声明。
11月22日 (現地時間) ●米国ケネディ大統領、遊説中にダラスで狙撃され死亡。

1964

13

新左翼運動

社会状況

労協（革命的労働者協会）、12月には学生組織反帝学評が結成された。

4月 ●ベ平連発足。

7月29日 ●沖縄・嘉手納基地から飛び立ったB-52米軍機30機がベトナムを爆撃。日本政府は安保条約上は問題ないとしつつ、「日本国民感情を無視したもの」と抗議。ベトナム反戦と反安保、沖縄闘争は一層盛り上がった。

●日韓闘争

11月13日 ●日韓条約阻止の統一スト。日韓条約阻止闘争は60年安保以来の大衆的闘争となつた。

12月11日 ●日韓基本条約が参議院本会議で自民党、民社党出席のもと强行採決。18日に発効。

1966

8月18日 ●北京の天安門広場で文化大革命勝利の100万人集会。毛沢東主席など中国首脳が列席。毛沢東の指示で前年から展開されたプロレタリア文化大革命は、紅衛兵（10代の少年少女）を先兵に「黒五類（地主・反動・右派分子など）」の糾弾や「四旧（古い文化・思想・風俗・習慣）」の破壊をスローガン化。知識人などが反革命として激しく弾劾されることになった。

9月 ●共産主義者同盟統一再建第6回大会開催。第2次ブント結成。

●三派全学連の登場

10月17～19日 ●全学連再建大会で中核派、社学同（ブントの学生組織）、社青同解放派の三派全学連が成立。共産党・民青系と革マル系の3つの組織がそれぞれ全学連を名乗ることになった。

1967

●10・8（じゅうはち）羽田闘争

10月8日 ●佐藤訪ベトナム阻止羽田闘争。〔第1次羽田闘争〕。三派全学連（反日共系全学連ともいわれた）25000人が、佐藤栄作首相の南ベトナム等への訪問を阻止しようと羽田空港に

全学連が成立。共産党・民青系と革マル系の3つの組織がそれぞれ全学連を名乗ることになった。

1967

1月 ●ビートルズ来日。

3月4日 ●新東京国際空港の建設地を千葉県成田市三里塚に閣議決定。

8月 ●ワシントン、ニューヨークで大規模な

ベトナム反戦デモ。

●この年～70年上期「いざなぎ景気」。

●カラーテレビ、クーラー、カーが「新三種の神器」3C時代。

2月11日 ●印バ戦争始まる。

2月10日 ●韓国政府、南ベトナムへ派兵決定。

2月10日 ●防衛庁の秘密文書「三矢研究」暴露。

1968

2月8日 ●米国防省、ベトナム参戦の米兵は47万

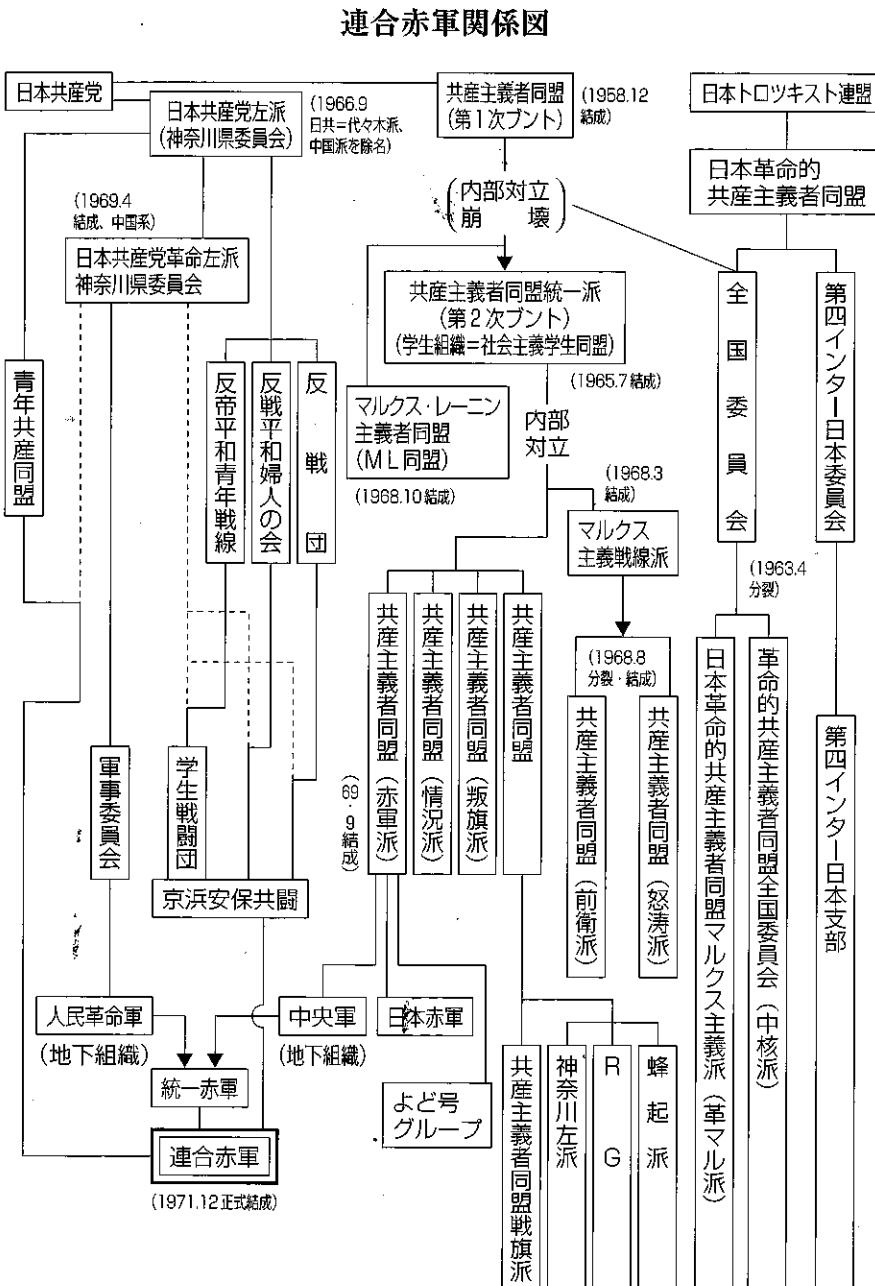
3月3000人と発表。

4月17日 ●米ワシントンで1万人のベトナム反戦デモ。

11月17日 ●プロ野球第1回ドラフト会議。

11月10日 ●戦後初の赤字国債発行を閣議決定。

11月17日 ●印バ戦争始まる。



参考：高橋謙「語られざる連合赤軍」所収の図

新左翼運動

社会状況

突入を試みる。日本学生運動史上初めてヘルメット・棍棒が登場。京大生山崎博昭が機動隊との実力闘争の中で死亡。この「10・8（じゅつぱち）羽田闘争」は、実力闘争を媒介とした政治課題・主張を明確にし、社会的に新左翼の存在（既成左翼との差異性）が大きくなりアップされる象徴的な闘争となつた。同日、共産党は多摩湖畔で赤旗祭りを開催。

●10月17日には全学連・反戦青年委員会600人が「虐殺抗議、山崎君追悼中央葬」に集まつた。しかし60年安保闘争の権美智子の死が体現したような広範な階層・全国民的な共感を得るまでに至らなかつたのは、学生運動の先鋭化の表われといえる。

11月12日 ●佐藤訪米阻止の「第2次羽田闘争」。

11月9日 ●水戸巣氏ら文化人50名により一〇・八救援会発足。

●70安保とベトナム反戦

●1960年代後半、特に1967年の「10・8（ジュッパチ）羽田」から始まり69年1月の「東大安田講堂」頃までは、新左翼が（相対的ではあれ）広範な社会的支持を得ていた時代と言つてもいい。その支持の基盤は、安保条約反対とアメリカが行なつてゐるベトナム戦争に対する反発だつた。それは単純な反発から出発した「日米同盟は戦争に巻き込まれるから安保には反対」という受け身的見方に対し、「安保を容認することはアジアに対する新たな日本の進出を意味するのではないか？」というクローバルな視点の提示や、「日本がベトナム戦争に沖縄の基地をはじめとしたさまざまな協力をしていることについて、一人ひとりがどう行動するのか？」という問い合わせが、受け入れられていたことを意味した。（議会勢力的には安保支持派の方が数多く、社会主義に反対するからアメリカのベトナム戦争は正しいと主張する層も多かつたが、なにより安保とベトナム戦争は、一人ひとりが立場を鮮明にしやすい課題だつた。そこで多くの左翼的な考え方や革新系政党、勢力などを支持する、ないし自民党政権に投票しない（あるいは投票に行かない）人々が生まれた。デモ行進では、「安保反対、闘争勝利」とかけ声された。そんな中で、三派全学連とその実力闘争（＝外見的にはデモや抗議行動がエスカレートし機動隊との衝突に至る）は、既成の権威や社会秩序、体制的価値などにどう関わるのかという根源的な問題意識の投げかけとして、一定のシンパシーを獲得できていた。もちろん実力闘争という違法行為やその被害・迷惑への反発も広範に存在していた。

68年には三派全学連が分裂含みとなり、大学では全共闘（全学共闘会議）学内の党派活動家、自治会、サークル、ノンセクトラジカルなどが共闘）が闘う主体として登場し、大学解体や自己否定の論理等を投げかけた。また反戦青年委員会など新左翼に結集する労働者も増えた。同じ時期、パリの5月革命、アメリカのスチュー・デン・パワーや黒人解放闘争、ドイツの赤い旅団、あるいはチエコのプラハの春、中国の文化大革命など、世界的な既成体制に対する「異議申し立て」「実力闘争」の登場によって、世界は同じように変革期を迎えたかのような様相をみせた。やがてデモのかけ声が「安保粉碎、日帝打倒」などへと変わり始めるとともに、新左翼運動は四分五裂を深め、内ゲバと連合赤軍ショックの中で社会の前面から姿を消すことになる。

1968

●佐世保、成田、王子で実力闘争への支持高まる

1月15日 ●エンタープライズ寄港阻止に向かおうとする中核派が、東京・飯田橋で機動隊に阻止され、131人が警備準備集合罪で検挙される。

1月17～21日 ●米空母エンタープライズ寄港阻止佐世保現地闘争。北ベトナムに出撃する米原子力艦隊に対するもので、野党、労働団体、学生は「安保体制の強化や日本の核基地化につながる」と佐世保港で抗議集会やデモをくり返す。三派全学連の街頭闘争に対し市民の支持が高かつた闘争として有名。

1月29日 ●東大医学部が無期限スト。東大闘争の端緒となる。長く反対してきたインターナン制度廃止に置き換えて新たに出来てきた登録医師制度に反対したものだった。

2月26日 ●「三里塚空港実力粉碎・砂川基地拡張阻止2・26現地総決起集会」。三派全学連と三里塚・芝山連合空港反対同盟の初の共闘。これ以降、反対同盟は共産党や社会党などの既成左翼に代わり、新左翼との結合を深めていく。

3月8日 ●東京・北区にある米軍の王子野戰病院開設阻止闘争。これも反ベトナム戦争の運動の一環。2～4月まで9次にわたる機動隊との衝突の中で、学生、反戦青年委員会の労働者、市民などに200名近い逮捕者と約1500名の負傷者が出了た。

3月29日 ●日本私立大学連盟「学生運動に対決する」と見解を発表。

とする政令發布。

4月15日 ●社共推薦で美濃部亮吉が東京都知事に当選。

●米、ニューヨークとサンフランシスコで総計50万人が参加した大規模なベトナム反戦デモ。

4月28日 ●米、カシアス・クレイ（モハメド・アリ）が微兵宣誓を拒否。

6月5日 ●第3次中東戦争（6日戦争）。ナセル大統領率いるアラブ連合とイスラエルが交戦、わずか80時間でイスラエルが勝利。

7月1日 ●ヨーロッパ共同体（EC）発足。

7月20日 ●動力炉・核燃料開発事業団（動燃）設立。

7月23日 ●米、デトロイト市で黒人暴動。全米各地に暴動広がる。

8月3日 ●公害対策基本法、施行。

8月8日 ●東南アジア諸国連合（ASEAN）設立。

9月1日 ●三重県四日市ぜんそくで、初の大気汚染公害訴訟。

10月8日 ●前キユーバ工業相ゲバラ、ボリビアで政府軍に逮捕され、翌日射殺。

10月16日 ●アメリカで反戦週間。全米30都市でデモ行進では、「ヨーロッパ共同体（EC）」が微兵宣誓を拒否。

4月1日 ●国際勝共連合結成。

4月4日 ●米、キング牧師暗殺される。

4月5日 ●チエコスロバキアで「プラハの春」。

4月25日 ●霞ヶ関ビル完成。

1968

でデモ。

10月18日 ●ツイギー来日、ミニスカート・ブーム。

11月30日 ●佐藤首相、「非核三原則」の国会答弁。同日、南ベトナム全土で解放勢力が大攻勢（テト攻勢）。

2月20日 ●金嬉老、静岡県寸又峡温泉に人質20人をとつて立て籠り、朝鮮人に対する差別を訴える。

1月1日 ●国際勝共連合結成。

4月4日 ●米、キング牧師暗殺される。

4月5日 ●チエコスロバキアで「プラハの春」。

4月25日 ●霞ヶ関ビル完成。

新左翼運動

社会状況

4月 ● 日大で20億円という巨額の脱税が発覚し、日大闘争の始まりとなる。

5月13日 ● フランス・パリで労働者・学生がゼスト、5月革命起る。

● 日大闘争

5月23日 ● 日大生約2000名が、水道橋駅までデモ。右翼の牙城と思われてきた日大の歴史上画期的な「初めての200メートルデモ」として有名になった。

5月27日 ● 日大全共闘結成。7000人の学生が集まり秋田明大が委員長に。この後、秋田はカリスマ的存在となつた（日大闘争では体育会や右翼学生との暴力的対立が激化したが、秋田は1人でもさも右翼学生が手を出せない、と伝説的に語り継がれた）。

9月30日 ● 日大全共闘ら1万人が、日大講堂の大衆団交に集結。会場に入りきらない学生2万人5000人や全共闘に敵対する体育会系学生800人も周囲を取り巻き、騒然とした空気に。独裁者とあだ名された古田会頭は、これまでの日大の体制を謝罪、学生自治権の確立、体育会の解散などを約束した。

10月2日 ● 佐藤首相、「日大の大衆団交は認められない、政治的な対策を考える」と発言。

10月3日 ● 日大当局、9・30団交での確約事項を破棄。古田日大会頭、翌日の団交を拒否。

10月22日 ● 日経連、活動家学生の就職取り消しを発表。

● 10・21国際反戦デー

10月21日 ● 国際反戦デー。社会党・総評系、共産党系、新左翼系など全国46都道府県約560カ所で30万が集会やデモ。新左翼各派は、三派全学連の解消の後、それぞれの位置づけで行動目標を設定。中核派は米軍タンク輸送車実力阻止を掲げ、ML派、第四インターなどと1500人で新宿駅に。駅構内や周辺で群衆2万名を巻き込む市街戦となり、山手線・中央線は翌日までストップ。深夜、騒乱罪が適用され、一斉検挙で769名が逮捕された。ブント・社学同1000人は日本の軍事外交路線を推進する防衛庁（六本木）に突入。社青同解放派900人は国会突入をはかった。全国の逮捕者は、1012名に上った。

10月22日 ● 日経連、活動家学生の就職取り消しを発表。

1969

1月9日 ● 東大闘争・日大闘争勝利全都学生決起集会。

1月10日 ● 深夜、民青が全共闘が占拠している安田講堂を攻撃。

1月14日 ● 東大、加藤学長代行が「警察による封鎖解除も辞さぬ態度で入試を実施する」と表明。

1月15日 ● 東大闘争勝利全都全国労学総決起集会に35000人の学生、労働者、市民が集まる。機動隊6500人が学外に待機していた。

● 東大安田講堂に機動隊突入。東大闘争の終焉

1月18日 ● 朝、東大本郷構内に機動隊8500名が導入され、安田講堂などに立て籠もついた全共闘派（全共闘、各セクト諸党派）の実力排除開始。機動隊は放水とガス銃を使用、全共闘側は火炎瓶や投石などで抵抗。まず工学部列品館にいたML派が重傷者が出てたために降伏。午後3時頃までに法学部研究室なども封鎖解除され、中核派や社学同（ブントの学生組織）などの入った安田講堂が残つた。警察側は4機のヘリコプターで催涙弾を注いだり放水をくり返し、安田講堂のバリケードを排除し、少しづつ屋上の全共闘に迫つた。

● 攻防の模様はテレビで生中継され衝撃を与えた。

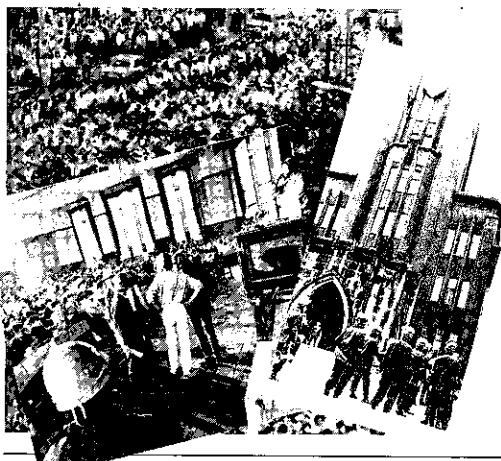
● 神田駿河台では安田講堂に連帯しようと学生が集まり、道路に机などを運び出してバリケード封鎖し機動隊と投石などで渡り合つた。神田カルティエラタン闘争。お茶の水・駿河台界隈には明治・中央・日大など学生運動の高揚した大学が多數あり、セクトの拠点校となつていた。

1月19日 ● 午後5時45分、安田“砦”攻防戦は、屋上に最後まで残つた学生らが逮捕され終る。逮捕された学生数は2日間で631名。

● 「全国の学生・市民・労働者の皆さん……われわれに代わつて闘う同志諸君が、再び解放講堂

69年の社会状況は26頁を参照。

● この年、「昭和元禄」と呼ばれる。



7月1日 ● 米・北ベトナム第1回和平会談。約に調印。

7月9日 ● 東京・山谷で群衆が交番を一時占拠。

8月20日 ● チェコに侵入（プラハの春の終わり）。がチエコに侵入（プラハの春の終わり）。

10月23日 ● 政府、明治100年記念式典開催。

10月31日 ● ジヨンソン大統領、北爆停止を発表。

12月10日 ● 東京・府中で、3億円強奪事件發生。

12月 ● 国民総生産（GNP）、資本主義国で第2位に。

5月13日 ● 米・北ベトナム第1回和平会談。

5月16日 ● 十勝沖地震。

から時計台放送を行う日まで、この放送を中止します」。

● 4・28 沖縄デーに破防法適用

4月28日 ⑥社会党、共産党、総評が沖縄問題で初の統一中央集会を開催し、13万人が参加。新左翼は銀座、神田駿河台、大阪など各所でゲリラ戦を展開。

⑥「4・28沖縄デー」に対して中核派とブントに破防法が適用され、両派の拠点に「がさ入れ」。また5人（ブントリさらざ徳二共産同議長、久保木拓三全学連副議長、中核派リ本多延嘉萬共同書記長、藤原慶久反戦青年委員会会話人、青木忠全学連書記局）に事前に逮捕状が出された。



第2章

革命左派と赤軍派の出現

1964-1971

両派の「武装闘争」

新左翼運動はやがて先鋭化していく。

戦術のエスカレーション、

そして「内ゲバ」。

武闘派で鳴らした「赤軍派」と「革命左派（京浜安保共闘）」を、別々の年表にして検証してみると、

両派の歩んできた道の違いが

鮮明にみえてくる。

写真：69年9月5日、全国全共闘結成大会に初登場。ブント（統一派）と内ゲバになった赤軍派

革命左派

● 革命左派の活動期—永田、坂口、吉野の左翼活動記録

1964

1月

● 共立薬科大学2年の永田洋子は社学同ML派（社会主義学生同盟マルクス・レーニン主義派）の集会に参加。この集会への出席が永田の人生を決める。

1965

4月

● 坂口弘、東京水産大学に入学。後援会費闘争を当時4年生の川島豪（後の革命左派指導者）が指導していた。

6月

● 日韓闘争。坂口、初めて集会とデモに参加する。坂口は「大学生になつた以上、一度は全学連の集会やデモに参加してみたいと思つていた」。日韓闘争に觸りながら、「共産党宣言」（マルクスとエンゲルスの共著）、「國家と革命」（レーニン）を読み感動。また中国共産党の元老朱徳を描いた「偉大なる道」（アグネス・スマドレー）に感銘を受け、「（朱徳のように）自分の恥辱を率直に語れる男らしい男になりた

赤軍派

1963

秋JAP

● 森恒夫が大阪市立大学の自治会活動を通して田宮高麿（大阪市大、後にほど号ハイジャックで北朝鮮入りし帰国せぬまま死去）との親睦を深める。

8月2日 ● トンキン湾事件。米、米軍艦が北ベトナム軍に攻撃されたと発表。

1964

1月

● 1月11日 中教審「期待される人間像」。

8月5日 ● 米英ソ3国部分的核実験停止条約正式調印。14日、日本、同条約に調印。31日、中国、同条約に対し批判声明。

1965

1月11日 ● 中教審「期待される人間像」。

2月7日 ● 米軍機が北ベトナムへの爆撃（北爆）を開始。

2月8日 ● 韓国政府、南ベトナムへ派兵決定。

2月10日 ● 防衛庁の秘密文書「三矢研究」暴露。

4月17日 ● 米ワシントンで1万人のベトナム反戦デモ。

1966

9月1日 ● 印パ戦争始まる。

11月10日 ● 戦後初の赤字国債発行を閣議決定。

11月17日 ● プロ野球第1回ドラフト会議。

6月29日 ● ピートルズ来日。

7月4日 ● 新東京国際空港の建設地を千葉県成田市三里塚に閣議決定。

8月 ● ワシントン、ニューヨークで大規模なベトナム反戦デモ。

● この年、70年上期「いざなぎ景気」。

● カラーテレビ、クーラー、カーが「新三種の神器」3C時代。

● 「交通戦争」という言葉が生まれる。

社会状況

1963

8月5日 ● 米英ソ3国部分的核実験停止条約正式調印。14日、日本、同条約に調印。31日、中国、同条約に対し批判声明。

1月11日 ● 紀元節（2月11日）を建国記念日

1967

3月

● 永田、共薬大卒業後、薬局研究生として慶應に勤める。

1967

1月

● 永田、共薬大卒業後、薬局研究生として慶應に勤める。

7月

●京浜安保共闘の20人余が「反米愛国行動隊」を結成。工場争議の支援や基地反対闘争などに参加。そんな中、多摩川の川原で訓練を行ない、川島が武装闘争の意義を強調。しかし坂口ら隊員はアリティを持って受け止めなかつた。1

951年の日共非合法パンフ「球根栽培法」を復刻した「登山の手引き」を組織内で回覧。

8月

●吉野と金子、一緒に生活を始める。

●吉野、横浜国大を辞める。

●川島は9月の愛知援一外相の訪米訪ソに対し、実力阻止を提起。下部の「組織ができたばかりなのに」という反対に、「組織はつぶれても路線は残る」とアジジ（アジテーション）の演説をする。

8月末

●永田、川島のアパートに陽子夫人（革左の有力な活動家）を訪ねたが陽子は帰宅せず。警鐘時代から共同生活になっていたため、永田はその晩泊ましたが、夜、川島に性的暴行を受ける。性的に未熟だったためショックを受けるが、抵抗してアパートが権力に知られてはと思い、必死には抵抗できず。このことで革命左派が非難されるのは避けたいとも考えた。川島を、想永田は不信感を強める。

●最初の実力阻止闘争—愛知外相訪米訪ソ阻止

9月3～4日

的には問題だが政治的には正しいと思つていたので、強姦を組織的に問題にできず悩む。結局、革命左派の活動をすることで自分が受けた打撃を克服すべきと考えた。また、恋愛一性愛一結婚は一致すべきという価値観を持っていたので、川島に結婚しようと言うが、川島ははぐらかし、永田は不信感を強める。

7月6日

●愛知援一外相の訪米訪ソ阻止闘争として坂口、吉野ら5人の京浜安保共闘メンバーが、海から羽田空港の滑走路に侵入。「反米愛國」の旗を掲げ、愛知の特別機に向かって火炎ビンを投擲。特別機は出発が26分遅れた。他の4人は二手に分かれ、アメリカ大使館とソ連大使館に火炎ビンを投げ込む。

●羽田事件で坂口弘、吉野雅邦など、火炎ビン事件で寺岡恒一（横国大生・山岳ベースで死亡→72年1月18日）など計10人が逮捕された。吉野と生活していた金子みちよは、組織的な支援体制がないことに怒り、革命左派の救援対策メンバーとして目覚ましい活動を始める。

●川島は柴野春彦（この闘争で指名手配になる）、若林功子とともに「機関紙を出せる指導部を守るために地下潜行」。

2人（さらざき徳二・共産主義者同盟議長・久保井拓三・全学連副委員長）に事前に逮捕状が出る。

●28日当日、ブント突撃隊長の上野勝輝が、お茶の水の明大記念館で「先進的な大衆を領導するための共産主義突撃隊の結成」をアジテーション。4・28闘争での行動隊として参加してきた学生の間には、このまま専従「突撃隊員」となる、と言われて一部には動搖もある。

●立命館大で、全共闘が「わだつみ像」を引き倒す。

●新宿西口「広場」に多数の群衆がさらぎ議長ら政治局との間で分派競争に突入。

●ブントの分裂と森の召喚

●6月1日以降、ブント政治局員の塙見孝也らが、「10・21の抜刀隊による首相官邸占拠」、「自衛隊・米軍出動による世界革命戦争」論（前段階武装蜂起論）で、党内の誰がなくオルグし始め、これに反対する東京の学生指導部やさらぎ議長ら政治局との間で分派競争に突入。

●新宿郵便局への「郵便番号自動読み取機導入反対闘争」のブント総決起集会が明大記念館で開催。当時、ブント千葉県委員長だった森恒夫は、集会の司会者の1人だった。集会ではブントが3派に分かれ、非難を応酬し合う場となつた。

●赤軍派は関西の学生を動員したが、東京では明大2部と高校生にしか支持派をもたず、論争は不利となつた。この時、司会の森恒夫は途中から失踪した。

5月29日 ●全共闘を支持する大学教官200人

が、「10・21の抜刀隊による首相官邸占拠」、「自衛隊・米軍出動による世界革命戦争」論（前段階武装蜂起論）で、党内的誰がなくオルグし始め、これに反対する東京の学生指導部やさらぎ議長ら政治局との間で分派競争に突入。

●カルメン・マキの「時には母のない子のようだ」（作詞・寺山修司）、100万枚を超える大ヒット。

●立命館大で、全共闘が「わだつみ像」を引き倒す。

●新宿西口「広場」に多数の群衆がさらぎ議長ら政治局との間で分派競争に突入。

●6月1日以降、ブント政治局員の塙見孝也らが、「10・21の抜刀隊による首相官邸占拠」、「自衛隊・米軍出動による世界革命戦争」論（前段階武装蜂起論）で、党内的誰がなくオルグし始め、これに反対する東京の学生指導部やさらぎ議長ら政治局との間で分派競争に突入。

●新宿郵便局への「郵便番号自動読み取機導入反対闘争」のブント総決起集会が明大記念館で開催。当時、ブント千葉県委員長だった森恒夫は、集会の司会者の1人だった。集会ではブントが3派に分かれ、非難を応酬し合う場となつた。

●赤軍派は関西の学生を動員したが、東京では明大2部と高校生にしか支持派をもたず、論争は不利となつた。この時、司会の森恒夫は途中から失踪した。



しなかつた。

●集会に赤軍派が隊列として初登場（約150人）し注目を浴びた。会場ではブント（マスコミでは統一派と呼んで赤軍派と区別）との内ゲバ（実際にはブントの学生組織・社学同＝社会主义学生同盟とのゲバルト）が起き、赤軍派が勝利。党派が分裂したときは、どちらが「ブント」の名で統一戦線や集会に参加するかを巡って相手の暴力的排除を狙う内ゲバが必至だった。統一派の部隊は各大学の寄せ集めで、新派を宣言したばかりの赤軍派の意識が優った内ゲバ勝利だった。

9月頃

●機関紙誌「赤軍」創刊。

●植垣、赤軍派に
●弘前大全共闘のノンセクトラジカルとして活動していた植垣は、初めて赤軍派のオルグ梅内恒夫（福島大）と接触。大学の占拠闘争の限界に遭遇し、機動隊の攻撃（＝国家権力の弾圧）を本当に突破するなら銃や爆弾による闘争が必要で、赤軍派に銃を含めた闘争の準備があるなら参加しようと決める。他の学生も同調し、弘前大はいちやく赤軍派の拠点の一つとなつた。

●大阪戦争、東京戦争

9月22日

9月23日 ●中国、初の地下核実験。

赤軍派、大阪・阪南交番を襲撃する「大阪戦争」。

9月27日

●全共闘が本部封鎖を続けていた弘前大に、1000人の機動隊が導入され、植垣らはなにもせず撤退（後に植垣はこの撤退は「党派の闘争を大衆運動に優先させ」たものと後悔の回想をすることになる）。翌々日、植垣らは赤軍派の中央の闘争に加わるため上京。

9月30日

●赤軍派、警視庁本富士署を襲撃する「東京戦争」。どちらも警察権力への直接攻撃と武器奪取を狙つたものだったが、田宮は「チヤチな闘争でしかなかった」と敗北の締括。こういう警察などへ向けた直接的なゲリラ戦は、表だった大衆闘争からは姿を隠した非公然活動家（その精銳部隊が「軍」と呼ばれる）を中心的に、ときおり赤軍派（党）の大衆組織（下部組織）である「革命戦線」からビックアップ、ないしステップアップするメンバーによるものだった。通常の大衆運動とは、集会やデモ、街頭での情報宣伝活動（アジ演説やビラまき）をいう。

●この頃、革命戦線がデモに現われると、機動隊・公安が規制して（周りを取り囲んで）活動家一人ひとりの顔写真をしつこく撮影していた。その中から非合法活動へ参加するメンバーが出ることを予想しての行為だった。革命戦線の人数が少なかった（小さいデモなら東京で30人程度のことよくあつた）から抵抗できなかつた。

10月3日 ●自衛隊が東富士演習場で、治安行

動訓練を初めて公開。

10月15日 ●アメリカ全土でベトナム反戦大集

会、1000万人以上が参加。



12月30日

●革命左派創立時の指導者の1人河北が、「政治ゲリラ路線」に反対し組織を離れる。

12月12日 東京・渋谷で、寺山修司の劇団天

の厚い壁を突破するには火炎瓶、ゲバ棒ではだめで武装蜂起一統一軍をつくる以外ないのかと「短絡的に考えた」。

●森の復帰、坂東の決意

12月

●森恒夫、一兵士として赤軍派に復帰。
●坂東は、新左翼各セクト（党派）の60年代後半の階級闘争の総括や70年安保に対する闘争方針を比較するうち、赤軍派の「世界革命戦争」という壮大な発想」「高次の自然発生性」「なしくざしひアシズム」などの総括に共感を覚え、赤軍派に参加するため鈍行の夜行列車で東京へ。

1970

1月

●常任委員に坂口、永田、中山が加わり、柴野、若山の5人での集団指導体制へ。
●接見禁止が解けた川島は、永田に接見に来るよう指示。永田は、個人的な関係を通じて組織を指導しようとする反発を覚える。

●9・4羽田闘争の判決

1月31日

●アメリカ大使館火炎瓶投擲のYに懲役2年の実刑、ソ連大使館火炎瓶投擲の寺岡に懲役2年・執行猶予3年の判決。Yに執行猶予が付

1970

1月16日

●赤軍派の「武装蜂起集会」（東京）に800人が結集。「国際根拠地建設、70年前段階蜂起貫徹」がスローガン。この集会の情宣活動が、坂東の赤軍派デビューの仕事となつた。集会告知のステッカー貼りは、普通、警察の目を避け、夜間に行なうものだが、坂東は糊の入った缶を提げて新宿、早稲田界隈、銀座などで眞剣に貼り廻り、度胸のあるヤツと評判になつた。「正しいことをしているのに何も恐れることはないと思っていた」（坂東）。

1970

1月12日

●ナイジエリア内乱、事実上終結。
餓えた子どもの映像が流され、ビアフラの悲劇が伝えられた。

12月15日 公害健康被害救済特別措置法公布。

●この年、「少年ジャンプ」創刊などもあり、劇画ブーム。

●キックボクシングがテレビのゴールデンアワードに登場。沢村忠の「真空飛びひざ蹴り」が流行。

●ドリフターズ「8時だよ—全員集合」、「コント55号」裏番組を「ツツ飛ばせ!!」が低俗番組の代表と非難される。

かなかつたのは、母親が「外に出たらまた同じような事件を起こすだろうから」と裁判長に下獄を直訴したから。寺岡は警察・検事の取り調べに完全黙秘で通し、裁判でも反米愛国のスローガンを叫ぶなど戦闘的だったが、父親は「親として息子の責任を負う」と証言。このとき執行猶予になつたことが、山岳ベースで森恒夫の追及を受けることになる。

2月3日

●9・4羽田闘争の第4回公判で早くも論告求刑。異例に審理が早かつたのは、金子の奔走でやつと決まつた弁護士が「もともと裁判に乗り気でなかつた……我々がダイナマイト作戦を始めたから私は避けだしたため」（坂口）。求刑は坂口に懲役7年、吉野に懲役5年。坂口は7年という長さに動搖する。救援連絡センターも同時に女性への思いに胸が焦がれ、永田に求愛する。「活動に没頭するタイプで私の性格によく似ている点や、肩が凝らすに話ができる女性だったから……」また、「刑務所に入る前に女性を抱きたい」という思いも募り……」。永田は

●復帰していた森は、この頃、関西から上京。下部メンバーと新宿駅でピラマキなどの活動に従事。
●塙見孝也は森の復帰を喜び、「自分も逃亡したくなる時がある」と話す。しかし森は連合赤軍が結成に際し、革命左派に60年代の階級闘争を経括したとき、「この発言は問題」と言うことになる。

●森、指導部に復帰。坂東は中央軍に

2月7日

●森は赤軍派中央委員を補佐して公然活動部隊を指揮。坂東は千葉県の担当をしながら、プロトの拠点戦旗社（東京・千代田区三崎町）への襲撃など、内ゲバにも参加。

●坂口は求刑7年の重圧感について「生活そのもので喜びもある活動の場が（7年も）奪われることが一番の苦痛だった」と説明している。不足）との紹介を約す。

●永田と坂口の結婚

2月7日

●森は復帰後の地道な活動が認められ、「自己判断書の提出を条件に指導部の一員に。坂東は赤軍派中央軍への入隊を要請され「単独でもいいのなら引き受ける」（単純にゲバルト）暴力を使用する兵隊でいいなら引き受けけるが）、まだ軍の質はない（思想的理解や政治的指導力が不足）と一旦断るが、「単独でもいい」という

●2月21日 ●アメリカン・ニューシネマ「明日に向かつて撃て」封切り。革命左派が銃を奪つて札幌に潜伏していた際の会話「中国に行こうは、この映画のラスト直前、追いつめられた主人公たちの会話を想起させた。

1969～1970

●森は復帰後の地道な活動が認められ、「自己判断書の提出を条件に指導部の一員に。坂東は赤軍派中央軍への入隊を要請され「単独でもいいのなら引き受ける」（単純にゲバルト）暴力を使用する兵隊でいいなら引き受けれるが）、まだ軍の質はない（思想的理解や政治的指導力が不足）と一旦断るが、「単独でもいい」という

坂口を信頼していたが、恋愛や性愛の対象としてみていかつたので断つたが、7年の求刑に同情していたこともあり、「1回目をつぶればよいのだと思った」。その後、2人は5月に結婚することになり、坂口は永田から川島との関係をうちも明けられ、「何とも形容しがたい暗い気持ちに落ち込んだが、あくまで個人の問題と考え川島の政治的主張とは切り離した。

この結婚を振り返って永田は「坂口氏が、川島氏のように性的放縱でないことに信頼の念をおいてしまい、坂口氏の『家父長的』な女性利用主義に反対できなかつた」と述懐している。

●坂口は「路線が違つたら別れようぜ」といい、永田は「路線が違つたら、自分が正しいと思う路線に相手を必死にオルグすべきじゃない」と答える。

●この頃、永田は原因不明の極度の頭痛に襲われ、半日意識朦朧となることがしばしばあつた。

坂口は治療をすすめるが、永田は「活動が好きだから」ととりあわなかつた。

●川島の偽装転向

3月下旬

●川島、面会にきた永田に対し終始泣き叫び「活動をやめる」と繰り返す。その奇態に永田は悩むが、坂口は保釈を狙つた「偽装転向」と経過を見ると本当に偽装だったと思われる。

3月31日

●よど号ハイジャック事件を、坂口は水産大学朋鷹寮のテレビで知る。ハイジャックにまつたく共感はしなかつたが、赤軍派の実行力は見直した。ハイジャック事件後、川島は獄中から「やはりブントだ」「赤軍派から学ぶように」としきりに手紙を出す。

●政治ゲリラ闘争でダイナマイトを使用

5月26日

●横田基地、5月31日立川基地、6月24日大和田基地にダイナマイトを仕掛け爆発させる。実行者となり、ここで裁判を捨て地下に潜ることを決意した。

●川島の奪還要求

5月末頃

●川島が坂口に面会要請し、暗に自らの実力奪還を指示（後に川島は暗黙の指示を否定）。柴野、若山も奪還闘争を受け入れる。坂口がその責任者となり、ここで裁判を捨て地下に潜ることを決意した。

7月始め

●永田、坂口との間の子どもを中絶。

3月2日 ●公明党・創価学会による言論・出版妨害問題で、衆議院に調査特別委員会。

3月15日 ●大阪で、日本万国博覧会が開かれます。

3月15日

●塙見孝也赤軍派議長（28歳）が、前年10・21国際反戦デーでのビース缶事件で、前田裕一と共に爆発物取締り容疑で逮捕。

●よど号ハイジャック

3月31日

●赤軍派、日航機をハイジャックして、国際根拠地建設のために北朝鮮へ。田宮萬蔵（27歳）をリーダーとした9名は日航機よど号をハイジャ

ックし、ピョンヤン行きを指示。機は韓国ソウル郊外の金浦空港へ偽装着陸したが田宮は見抜き、4日間の交渉の末、乗客を解放し身代わりに飛ぶ。当初の計画では秋には帰国し「前段階武装蜂起」を戦つつもりだったが果たせず、1

995年、田宮は北朝鮮で死去。高校生だった柴田泰弘は1988年、密かに帰国中に日本で逮捕。田中義三（当時21歳）は1996年3月にカンボジアとベトナムの国境で拘束されるなど、さまざまな人生を送り、2000年前後に朝鮮に残つてゐる小西隆裕ら4人の自主帰國も話題になつてゐる。

●この前日、坂東が中央委員に。「ハイジャック闘争で人がいなくなり、本来なら一兵卒の私が闘いを継承していかなくてはならなくなつた」。

4月30日 ●米軍・南ベトナム軍、カンボジアに侵攻。

5月11日 ●松浦輝夫、植村直己、日本人初のエベレスト登頂に成功。

5月12日 ●広島でシージャック。観光船を乗つ取た犯人は射殺される。

5月25日 ●プロ野球「黒い霧」事件で、西鉄の益田、池水、与田の3選手、永久追放。

6月16日 ●拓殖大空手同好会、シゴキで学生が死亡。

6月23日 ●日米安保条約、自動延長される。

●社共、総評などの反安保統一行動に全国で77万人参加。

革命左派

赤軍派

社会状況

の救対（救援対策部）活動家らもかけつけた。

12月26日

●救援連絡センター主催の人民葬に3000人が参加。司会やアピールは革命左派・京浜安保共闘メンバー。機關紙『解放の旗』が飛ぶようになれた。革命左派は大集会で発言したことが一度もなかつたので、このような大きな人民葬が開催できることに胸を詰ませた。

●人民葬の後、京浜安保共闘と赤軍派の下部組織である革命戦線が共同集会。これが両派の共闘の最初だった。

●12・18の後、柴野が出入りしていた土浦のアシト（偽の名義で借りたアパート）を栃木県小山に移す。

●ここで金子の妊娠が議題になり、従来の方針を転換し、妊娠した活動家は子どもを産むことにした。

●赤軍派との共闘の始まり

12月31日

●数日前の接触で、赤軍派は12・18上赤塚交番闘争に衝撃を受けたと表明。革命左派は常に赤軍派に学ぼうとしてきたと答え、指導部の合同会議開催を決めていた。そしてこの日、埼玉県蕨市の旅館で、永田、坂口、寺岡と赤軍派の森恒夫、坂東國男が初めて接觸。革命左派は赤軍派

●赤軍派との共闘の始まり

12月31日

●数日前の接触で、赤軍派は12・18上赤塚交番闘争に衝撃を受けたと表明。革命左派は常に赤軍派に学ぼうとしてきたと答え、指導部の合同会議開催を決めていた。そしてこの日、埼玉県蕨市の旅館で、永田、坂口、寺岡と赤軍派の森恒夫、坂東國男が初めて接觸。革命左派は赤軍派

●赤軍派と革命左派の初会合

12月31日

●革命左派の永田、坂口、寺岡との初会合。赤軍派側は森と坂東が出席。坂東は、武装闘争をやっている実践力と、反米愛国といふスローガンの結びつきに奇異なものを感じ、永田らに会うこととに興味を抱いていた。革命左派は赤軍派に銃の貸与を要請、赤軍派は革命左派の12・18

●赤軍派と革命左派の初会合

12月31日

●革命左派の永田、坂口、寺岡との初会合。赤軍派側は森と坂東が出席。坂東は、武装闘争をやっている実践力と、反米愛国といふスローガンの結びつきに奇異なものを感じ、永田らに会すこととに興味を抱いていた。革命左派は赤軍派に銃の貸与を要請、赤軍派は革命左派の12・18

●赤軍派との3度目の会合。森と坂口が「ベトナムでアメリカが核兵器を使うかどうか」で論争。坂口は使うと主張したが、自分の負けだったと述懐。永田は赤軍派の情勢分析に舌を巻く。また、破防法の適用について森の「六法で調べてみないと」という態度にも、自分たちにはない発想と驚いた。

1971

1月中旬

●赤軍派との3度目の会合。森と坂口が「ベトナムでアメリカが核兵器を使うかどうか」で論争。坂口は使うと主張したが、自分の負けだったと述懐。永田は赤軍派の情勢分析に舌を巻く。また、破防法の適用について森の「六法で調べてみないと」という態度にも、自分たちにはない発想と驚いた。

1月15日

●植垣、寿町でオルグを開始

1月15日

●活動家1人が銃を入手するため銃砲店に働きに入つたが、店主に怪しまれ、銃を奪う計画を告白。店主の人の良さから、抵抗されたときに傷つけることが忍びなかつたため。同時に、違うルートで銃の購入には成功。

●植垣、組織作りのため横浜の寿町（港湾労働者のドヤ街）に入る。進藤隆三郎（受験浪人でアテネフランセなどへ通っていた。山岳ベースで死亡→72年1月1日）をオルグ。また早稻田大学生組織の指導も指示され、山崎順（早大。山岳ベースで死亡→72年1月20日）らもオルグした（148頁）。

1971

1月

●活動家1人が銃を入手するため銃砲店に働きに入つたが、店主に怪しまれ、銃を奪う計画を告白。店主の人の良さから、抵抗されたときに傷つけることが忍びなかつたため。同時に、違うルートで銃の購入には成功。

●大阪市西成区あいりん地区で、仕事にあぶれた労働者が暴動。

12月30日

●大阪市西成区あいりん地区で、仕事にあぶれた労働者が暴動。

12月20日

●コザ暴動。沖縄・コザ市で、米軍MPの交通事故処理に市民が憤慨。市民500人が米軍兵隊と衝突。

●赤軍派・日本共産党革命左派共同政治集会（千代田公会堂）開催。革命戦線と京浜安保共闘の共闘宣言発表。壇上で発言者は全員頭にストッキングを被り、異様なムードが醸し出された。

●革左と赤軍派、共同政治集会

1月25日

●赤軍派・日本共産党革命左派共同政治集会（千代田公会堂）開催。革命戦線と京浜安保共闘の共闘宣言発表。壇上で発言者は全員頭にストッキングを被り、異様なムードが醸し出された。

●赤軍派と革左、共同政治集会

1月25日

●赤軍派・日共革左共同政治集会（千代田公会堂）に450名が参加。植垣と京浜安保共闘の共闘宣言発表。壇上で発言者は全員頭にストッキングを被り、異様なムードが醸し出された。

革命左派

赤軍派

社会状況

● 真岡銃砲店襲撃

2月17日

●寺岡、吉野、中山ほか3名が栃木県真岡市の塙田銃砲店に押し入り、散弾銃10丁、空気銃1丁、散弾実包2000発、ライフル実包60発などを強奪。しかし中山ら2名が検問に引っかかる、警察犬に追われ逮捕。栃木、茨城、埼玉、東京の主要道路で自動車の検問が実施され、大使館、首相官邸、警察署、派出所などが戒戒態勢に入っていた。

2月18日

●永田らは、中山が出入りしていた館林アジトを出て群馬県太田市に移動。しかしあパートローラー作戦が1都6県に拡大されたため、わずか1日で新潟県長岡市に移る。さらに永田ら6人は北海道へ、銃を抱えながらの逃避行に入る。北海道へはスキヤーの恰好をし、リュックに銃をひそませた。

●川島奪還のために準備していた金が底をついたため、永田が友人から「あなた個人が困ったときに使う以外はいやだ」と念を押されてカンバされた15万円を使ってしまった。

●2月17日の銃奪取は、3日後に川島が横浜地裁に現われるとき使おうと意図したからだつたが、それどころではなくなった。

●札幌での潜伏

2月22日

●水田、坂口、寺岡、吉野らは青函連絡船で函館入り。その後札幌のシンバや水産大学OB宅などを泊まり歩く。

2月26日

●銃を定山渓の付近に埋める。テレビで長岡のアシトで銃が見つかり、水田、坂口、寺岡ら4人が指名手配になつたことを知る。その後、夜通しやっているマージャン屋などに潜む。

●水田は、警察の追及が厳しい中で射撃の訓練さえできないから中国に根拠地を求めなければならぬないと考へる。

3月2日

●やつとシンバがアパートを借りてくれたが、全く陽が射さず、隣の部屋とはベニヤ板の壁だけ、床はビニールが敷いてあるだけで凸凹の上、傾いているという代物。トイレは共同があるだけだった。6人が6畳大の部屋に、石油ストーブ1つを頼りに服のまま就寝。6人の人間がいると気がつかれないよう、排泄は室内的洗面器ですませ、流しに捨てた。

●赤軍派のM作戦のニュースをラジオと新聞で

から評判が悪く、森はしばらく意氣消沈した。

● 中央委員会分裂

1月下旬

●中央委員会が分裂し、ゲリラ闘争推進派が7人委員会を結成。國際部を統括していた重信房子は、すでに日本脱出が決まっていることを理由に、7人委員会から排除。72年5月にテルアビブ空港の「リツダ闘争」で死亡する奥平剛士らに、赤軍派の内容を教えるため、坂東がしばらく共同生活を行なう。

●7人委員会に警察の手が迫り、千葉県のアジトに隠れることになる。資金が枯渇し、毎日の食事代にも困窮するようになった。

●植垣、革命戦線から赤軍派中央軍へ移るよう指示を受け、電話のあるアジトで待つたが、2週間ほど何も連絡がなかつた。

2月中旬

●植垣、革命戦線から赤軍派中央軍へ移るよう指示を受け、電話のあるアジトで待つたが、2週間ほど何も連絡がなかつた。

●この頃、警察は全国25万警察官の20%を動員した、アパートローラー作戦を実行する。

●中央軍、M作戦を敢行

2月22日

●中央軍が最初のM作戦として千葉県の市原辰巳台郵便局を襲う。この金を元に、7人委員会を東京、名古屋、東北、大阪に分散することにして、名古屋は司令部、M作戦は東京、銃奪取は大阪などと任務分担。森は名古屋に、坂東は東北に行くことを決定。青島は軍と革命戦線を結ぶ組織部（半合法）の担当に。

2月27日

●中央軍、M作戦の第2弾として千葉県の高師郵便局を襲う。

●重信房子、アラブへ

●植垣、初めて森恒夫の名を知る

3月2日

●赤軍派の重信房子、「国際根拠地」作りのために奥平剛士と偽装結婚し、日本を脱出。



2月22日

●成田空港用地の第1次強制執行始まる。

●「銃の質」の討議
知る。

●「銃の質」の討議
●1ヵ月半潜伏する間、永田は「銃の質」論を展開。それは「銃を奪つても意気込みだけでは川島奪還はできず、その前に銃の質（＝銃を撃てるだけの個人の内実）を獲得することが必要。そのためには実践の中で思想の問題を解決する、すなわち銃を得て始めて思想問題を問うことができる」というもの。

3月4日

3月3日 海上自衛隊と米軍原潜、初めて合同演習。

●中央軍、M作戦の第3弾として千葉県の夏見郵便局を襲撃。この3つの襲撃を、植垣はM作戦とは気づかず、新聞報道で初めて知る。また川島奪還はできず、その前に銃の質（＝銃を撃てるだけの個人の内実）を獲得することが必要。そのためには実践の中で思想の問題を解決する、すなわち銃を得て始めて思想問題を問うことができる」というもの。

44

●坂東、植垣ら独自行動
●中央軍M作戦、横浜銀行相武台支店を襲撃。
●坂東、植垣ら独自行動
●坂東が豊橋のアシストに行き、植垣らを伴つて、東京経由、仙台近郊に。植垣はいよいよ中央軍が行動を開始したと思い緊張する。

45

●坂東隊の任務は爆弾作りとM作戦であり、そのため東北に土地鑑があり、物理学科もある植垣が選ばれた。
●M作戦を実行した指導的立場の人間が、次々に逮捕される。
●中央から資金が送られてこないことになり、坂東隊はM作戦を決意。東北地域の金融機関を調べはじめる。ほどなく、中央軍との連絡も途絶え、獨自行動を余儀なくされた（→140）
●坂東で郵便局を攻撃する赤軍派との関係
●坂東、植垣らのゲリラ隊、最初の銀行襲撃（仙台振興相互銀行黒松支店）に成功し115万円余奪うが、植垣がシンバの電話番号メモを車のシートの間に遺留したことから発覚、全国指名手配になる。テレビに自分の顔が映るのを見た植垣は「もはや後戻りできない」と改めて感じた。

●坂東隊、M作戦を開始

3月22日

●やつと半合法部（革命左派あるいは京浜安保共闘の名で公然活動をしている部隊）と連絡が取れ、金と川島の手紙が届けられる。赤軍派が共闘を申し入れていること、川島が永田など指導部を批判していることを知る。

●この頃まで赤軍派幹部と中央軍の兵士のほとんどが指名手配に。坂東、植垣らは、植垣の人脉があつた寿町に潜伏。山崎順が坂東隊に参加。

●4月はじめ、やつと中央軍と連絡が回復。森と総括。「政治的敗北」とは大衆の流動を組織化できなかつたことであり、M作戦を乗り越えるものとして、軍による殲滅戦を4・28沖縄闘争の時に大阪で決行ときめる。

●革命左派との再接触

●永田、坂口、東京の映画館で森と落ち合う。自分たちが捕まつたら使つていいと銃の隠し場所を教える。話し合いの中で森との親密度が深まつた。森に中国行きを提起するが、森は「日本で殲滅戦を闘う」と表明。

●赤軍派のアジトで、森の手料理の肉とキヤベ装闘争を打ち出す。

4月23日

●赤軍派との再接触

4月20日

●永田と坂口が上京。①東京でのアジト作り、乗り場では、数人の警察官が乗客一人ひとりの顔をチェックしていく緊張したが、なに事もなく通り抜けた。

●森恒夫と永田、坂口の会談で、革命左派は赤軍派に銃の隠し場所を教える。坂口、永田から提起のあつた中国行きに対し、森は国内健軍武装闘争を打ち出す。

4月23日

●赤軍派のアジトで、森の手料理の肉とキヤベ

4月21日 ●韓国、在日韓国人学生・徐勝ら51名、北朝鮮のスパイ容疑で検挙と発表。

ツの油炒めを食べる。永田は赤軍派の食生活の豊かさにタジタジとなつた。

4月下旬～5月始め

●永田と坂口は都内のアシトなどを転々とする中で、杉下リサ子（横国大生、山岳ベースで逮捕→72年2月16日）、向山茂徳（浪人しながらアーネフランセなどに通う。後に「処刑」→71年8月20日）など半合法部隊とも会い、中国行きなどを説明する。向山は「テロリストとしては戦えるが、それ以上ではない」と表明。永田と坂口は「ゲリラ闘争は党建設のための戦いでテロリズムとは違う」と説得。

●手配写真が至る所に貼つてある都内の移動は、2人の神経をすり減らし、坂口が隠れ場所としての山岳ベースを提起。永田も同意し、学生時代にワンゲルで行った奥多摩の雪取山に決める。山に入る前、赤軍派の森に会い、30万円のカンパを要請。逆に森は銃2丁の要請。どちらも相手の要請を受け入れる。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。



5月中旬

●札幌に潜伏中の寺岡と連絡し、雲取山で会う。寺岡は永田の「銃を軸とした戦い」を批判し、150名の部隊で前段階武装蜂起すべきと主張。また自分を委員長とする組織の改組案も示すが、銃の問題で永田の意見に賛成し、和解する。

●小袖ベースから向山が脱走

5月31日

●雲取山近くの小袖鍾乳洞の廃屋パンガローをベースに決定（小袖ベース）。吉野ら札幌の3人を呼び寄せる。向山、金子、早岐やす子（後に「処刑」→71年8月3日）、らが入山。

6月初め

●札幌定山渓に埋めた銃を取りに行き、小袖鍾乳洞の中で実射訓練。坂口は散弾銃を撃つのが初めてだった。

6月6日

●向山が下山したいと表明。「反米愛国路線は正しいと思うし、党建設のためのゲリラ闘争も正直いとどまる。」

6月6日

●数日後、早岐も「カレと生活したいから」山を下りたいと申し出たが、他のメンバーの説得

5月15日

●坂東隊と中央の連絡が復活し、寿町からの移動が決められ、植垣は不満を抱く。坂東隊は総勢14人に（坂東、植垣、進藤、その恋人持田、山崎ほか）。赤軍派中央のM作戦（横浜銀行阪東橋支店）は失敗。同日、坂東隊は南吉田小学校給料奪取のM作戦を実施し320万円奪取。

5月26日

●森と植垣、初めて会う。植垣「（森は）頭を短く刈り、腹が出ていて、土建屋の社長という感じだった」。森はみんなから「おやじさん」と呼ばれていたが、それは後の山岳ベースでも変わらなかつた。森はこの名で呼ばれるのは、あまり好きではなかつた。

6月9日

●進藤らが大阪から銃を受け取つて、坂東隊に持ち帰る。

6月13日

●坂東隊は、長野県長谷村の工事現場からダイナマイト10本など奪取。すぐ東京に持つていき、鉄パイプ爆弾に改変。

6月17日

●冲縄公園で鉄パイプ爆弾を投擲

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

●群馬県警、8人の女性を暴行殺害した大久保清を逮捕。

4月28日

●散発的な実力闘争はあつたものの、前年のような街頭ゲリラ闘争のない反戦デーとなつた。

●沖縄反戦デー

●京浜安保共闘・赤軍派も集会。

●日比谷野外音楽堂で、ブント内で最大の内ゲバ。後に戦旗派を名乗る荒岱介の指導する派と、関西を中心とする3派がぶつかり、荒派が勝利。

●赤軍派・京浜安保共闘も集会。

5月14日

</div

6月9日

●丹沢ヒュッテでの拡大党会議に19人が集まつた。永田、建党建軍武装闘争と銃による遊撃戦を提起し承認される。また、川島から来た赤軍派との新党設立を提案する手紙が披露される。

●加藤能敬（和光大、山岳ベースで死亡→72年1月4日）、大槻節子（横国大、山岳ベースで死亡→72年2月5日）が新たにベース入り。入山者は14名になった。

●この後、坂口は機関紙で、山岳ベースを単なる隠れ家から殲滅戦遂行のための根拠地と位置づける主張を展開。

6月15日頃

●早岐、脱走を試みるも果たせず。ただし、その後は通常の活動を続ける。前田は「(山)を下りるのは自由」と言う。

●統一赤軍結成の提起

7月6日

●川島の提起を受けた形で、赤軍派との連絡を回復。永田と坂口は上京し、森に新党を提起。森は「新党ではなく軍の共闘を組もう。そのため、党史を交換しよう」と逆提案。

7月13日

●小袖ベース跡で永田、坂口、寺岡と赤軍派の森、坂東が党史交換のために会合。

彈を投げる。機動隊30名重軽傷。そこをデモ中

の中核派約200人が逮捕された。赤軍派としては「半殲滅戦」と総括。中央軍の銃による殲滅戦がやれなかつたことと、機動隊が死ななかつたことが、「半」がついた理由。爆弾闘争の時代の幕開けとなつた。

6月24日

●M作戦で坂東隊、横浜銀行妙蓮寺支店襲撃。45万円を奪う。初めて銃を使つた。

7月

●獄中から塩見孝也議長がゲリラ型戦争路線を提起。69年秋の前段階武装蜂起の敗北を「革命戦争の開始とは軍事的にはゲリラ型戦争の開始であり、それに見合つた主体の共産主義的改良=党的軍人化、軍の中の党化、軍の正規軍化の獲得」が要求されたと総括した結果だつた。

●新党結成への合意

7月6日

●坂東は、議論がかみ合わなかつたと記憶している。そもそも森には革命左派をオルグするといふ意識があつたし、坂東は、革命左派の決意や戦闘性は評価するが、反米愛国路線はナンセンスだと思っていた。

7月13日

●革命的左派の小袖ベース跡で両派が党史交換のための会合。森が軍事組織を統合した「統一

7月9日 ●米、キッシンジャー大統領補佐官が秘密裏に中国を訪問。翌年のニクソン大統領訪中を決める。

7月17日 ●阪神・江夏豊投手、オールスターで9者連続奪三振。

7月17日 ●阪神・江夏豊投手、オールスターで9者連続奪三振。

●森は第2次ブントの始まりから大菩薩峠での大量逮捕までを語った。自分が7・6内ゲバ（赤軍派がブント統一派を襲い議長を監禁）を戦いきれず逃げたことにも触れたが、永田も坂口も、赤軍派の歴史や森の自己批判についてよく理解できなかつた。革命左派については警鐘以来の歩みを永田が開陳したが、路線の正しさに疑問を感じ始めていたためうまく説明できず、党史の交換は不満足な結果になつた。

●森から提起された両派の軍事組織を統合した「統一赤軍」結成について、革命左派の3人は「森が毛沢東の評価や銃による殲滅戦で歩み寄つたから」と提案を承認した。

●3つの衝撃①向山の動静
7月15日

●永田、坂口、寺岡ら、3つ目のベース塩山に移動。ベースといつても、小木の上に屋根代わりのビニールシートをかぶせた粗末なもので狭く、夜は男女別なくシユラフ越しに体がくつきあって、生活環境は劣悪だった。

●永田が統一赤軍結成を下部メンバーに告げる「一本当・万歳！」などの声が挙がり、賛成ムードだつた。

●しかしこの日の午後、驚愕の事態が出現。その1は、大観が脱走後の向山の言動について、永田に次のように報告したこと。「下山後、登山服姿のまま親類の家に行き、登山服をクリーニングに出した。その家には京浜安保共闘担当

の私服刑事が出入りしているが、彼らと酒を飲み、スリルを楽しんでいる。また山岳ベースについて小説に書こうとしている」（永田、坂口とも一致した記述）。

「どの行為を取つても、山岳ベースの存在を嗅ぎつけられ、安全を根底から揺るがす内容だつた。大槻は「向山を殺るべきだ」と言明（後の法廷での永田の証言）。永田は向山の下山を放置していた誤りを認めるが、「彼に対する組織的対処については十分考えたい」と答えた。

●3つの衝撃②早岐の離脱

●さらにもうひとつ、衝撃の知らせがもたらされた。交番調査のため山を下りていた早岐が姿を消したというものだつた。2人の離脱について全員で対策を協議し、寺岡の牢屋案が支持された。この時点では、誰にも処刑の気持ちはなかつた。早岐が塩山ベースを知つてゐるため、またベースの移動を余儀なくされることになり、丹沢に移動することにする（→64頁）。

●3つの衝撃③米中共開闘明

●この日はこれで終わらなかつた。ラジオでニクソン米大統領の中国訪問決定のニュースが流れ、坂口は強い衝撃を受けた。「毛沢東が、1年前には打倒を呼びかけたアメリカ帝国主義の頭目ニクソンと秘密裏に接触し、訪中を受け入

れ」るなんて！

7月19日

●永田と坂口が上京し森と接触。統一赤軍の機関紙として発行を決めた『銃火』の論文の打ち合わせ。向山と早岐問題を知つた森は「スパイや離脱者は処刑すべきではないか」と答えるが、坂口は一般論と受け取つたという。

●処刑の決定

7月21日

●再び大槻が、向山と早岐のその後の動向を報告。早岐は周囲に「山に行つて来た」と話していくし、向山の小説は3分の2が完成してい、という内容に永田らは危機感をつのらせた。永田「牢獄でやつていいけるかしら？」寺岡「殺るか？」永田「うん」とびうやりとりで、ついに処刑が決定される。坂口は発言はしなかつたが同意の態度をとつた。寺岡は「あとは軍に任せてくれ」と発言。坂口はこれについて、「寺岡君が進んで困難な仕事を請け負つたのは、自ら殺害を提起し、かつ軍の責任者だったから」と説明する。

●永田と坂口の記憶の食い違い

7月23日頃

●東京・新小岩のアパートで赤軍派（森、坂東）と指導部会議。「銃火」の森論文に対して、革命左派として回答。実は（國家）権力問題について、永田が書き直すつもりだったができず、そのまま同意した。

●米子でM作戦に失敗

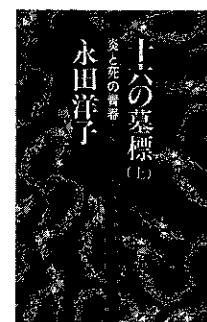
7月23日

●赤軍派のゲリラ隊が、鳥取県米子市の松江相と銀行米子支店を襲撃。現金奪取に成功するが、互に金銭交換で争う。ハンドバーは80円、コカ・コーラは60円だった。

7月20日 ●日本マクドナルドの1号店が銀座に開店。ハンバーガーは80円、コカ・コーラは60円だった。

7月30日 ●零石事故。航空自衛隊のジェット機が全日空旅客機と衝突。旅客機の乗員・乗客全員死亡。自衛隊員は落下傘で脱出し無事に両派の接近が発覚した。

82年に刊行された永田の著書



「続」の原稿がなぜか紛失するという
アクシデントも



●このとき2人の処刑決定を森に告げる。森は赤軍派も同じ問題を抱えていて、処刑することに決めていると答えた」というのが永田の記憶。坂口は「永田は森と坂東に『山を降りた2人の処置に迷っている』と言い、森が『同様な問題が起きていて、殺ることに決めた』と答え、革命左派に向かい『殺るべきだ』と言った」とし、これによって坂口は殺害方針に踏ん切りをつけたとする。

●2人とも克明な手記を発表しているが、永田が事実の推移を添々と叙述しているのに対し、坂口のそれは、事実関係は比較的簡略にすませ、ときおり解釈を記す。時としてその解釈には悔悟の色と、自己弁護の色がじむ。著作の出版時期が、永田の『十六の墓標』は1982年であるのに対し、坂口の『あさま山荘 1972』は1993年である。事実認定に当たっては、坂口は永田の本を下敷きにしているので、くり返しは避けているのだろうし、事件後20年以上を経て坂口本が出版されているので、彼の記憶は無意識にも合理化されていることも考えられる。また裁判に対する態度の違いも表われているのだろう。坂口は1審では思想性を問う方針で裁判に臨んだが、2審で一転、反省と悔悟を前面に打ち出す。判決はどうちらも死刑だった。

●早岐やす子の処刑

7月末

●新小岩のアジトに寺岡が来て処刑計画を話す。「実行行為者は寺岡、吉野ら4人。杉下リサ子と金子に酒盛りの相手をつとめてもらう。酒の中に睡眠薬を入れ眼させて外へ連れ出す。運転

は入山したばかりの小島和子（市立岬学園、山岳ベースで死亡→72年1月1日）。他に運転免許証を持っている者がいないので仕方がない。埋葬は印旛沼にする」。突然の指名に吉野は躊躇したが、結局「引き受けざるをえなくなつた」（坂口本）。

8月3日

●夕刻、寺岡が「小島は任務を明らかにしないと運転しない」と報告し、遠慮がちに「早岐が合法で活動したいと言っているが……」と言う。坂口は、殲滅戦のためには早岐の存在は危険と思い切った後なので「一度決まつたことは覆せない」と突き放した。

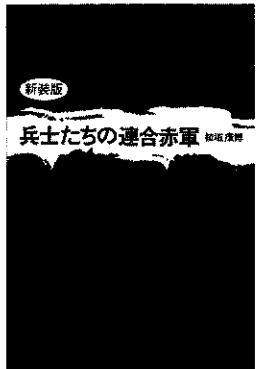
●午後11時頃、早岐が寝込んだ知らせを受けて、実行犯3人は車に乗せる。早岐は目を覚まし、

●坂東隊は、森の処刑方針を知りながら、組織から逃がすことを考える

7月31日

●坂東が森からの指令を伝える。内容は、スキー一小屋をベースに、白河方面で殲滅戦を実行せずというもので、植垣らは一齊に反発し、大都市での銃による殲滅戦を主張。また、進藤隆三郎の恋人M・Tの待遇について、森の処刑方針を伝達。坂東・植垣らは部隊から切り離すことを考える。結局、坂東と植垣の独自判断で、警察にだけは行かないことを条件に、隊からの離脱を認めた（→140頁）。

植垣の証言は「音響小説」としても
読むことができる



「十六の墓標」への返信となつてゐる

永田洋子さん
への手紙

坂東国男

「騙された」とうなだれた。印旛沼につくと外に連れ出し、瀬川が首を絞めて殺害。埋める。

●永田と坂口は一晩中、アジトで待つ。永田は落ち着かず、立つたり座つたりをくり返す。4日朝方、4人が戻り、寺岡が低い声で「殺つたぞ」と報告。「人を殺すのは大変なことだ」と何度も繰り返した。運転をつとめた小嶋和子は自分で歩けず、寺岡に抱きかかえられるように入ってきた。永田も坂口も小嶋に会うのはこの時が初めてだった。

●寺岡ら男性はすぐ眠りに落ちたが、小嶋は「どうしても納得できない」とくり返し訴えた。永田は「交番を調査中に脱走したことは、殲滅戦への敵対であり、われわれの闘いへの敵対である」などと答える。小嶋は「殲滅戦は闘うべき」とうなずき、自分の中京安保共闘時代の話など、早口に長時間話し続けたが、やがてソファに眠り込んだ。

●小嶋はこの後、精神のバランスを崩した。瀬川も恋人の元に行き活動を辞めたいと言い出し、一旦は恋人ともにベースに戻ったが、やがて2人で脱走し名古屋で逮捕されることになった。

●半合法メンバーも事態を察したらしく、表情を暗くし、面と向かって早岐の消息を聞く者はなかつた。

●坂口もアジトで永田と2人だけになつたとき、「処刑に何か暗いものを感じる」と発言。その様子を永田は「日頃の強引きではなく、頼りなさそう」と描写する。永田は処刑は必要なことであり、それに耐えなければならないと思つていたので、坂口の弱々しそうな様子に対し、寺岡と3人で組織的に話し合おうと要求。寺岡は「今頃になつて、そんなこといわれても困るじゃないですか」。会議はそれぞれの思いがすれ違いつのまま、処刑の理由を確認するようなことで終わつてしまい、次の向山の処刑を推進する結果になつただけだった。

8月9日

●新小岩のアジトに来た森に、永田が早岐殺害を告げる。森は「殺る前にはか言わせたか」と答えた。自派の処刑については何も語らなかつた。

●向山茂徳の処刑

8月10日

●杉下と大根が向山を東京・小平市のアパートに呼び出す。寺岡は近くに待機し、永田が喫茶店で電話の中継役に。杉下は「向山は警戒して何も飲み食いせず、早く帰ろうとする様子を見せてるので必死に引き留めている」と報告。

寺岡は「アパートに向かう」「今日殺るかどうかの最終的判断はまかせてほしい」と永田に要請し、吉野らと小島の運転でアパートに向かい暴れる向山を取り押さえた。引き留め役だった。

●革命左派との打ち合わせから帰つた森は、坂東に「革左はスパイを1人処刑した」と報告。

坂東が「本当にスパイだったのか、どんなことをしたのか、どうして摘発したのか?」と聞いても暗い顔をして黙つているだけだった。

受け止めるが、著書（10年後に出版）では視点を変えて「極左的な武装闘争にたいして盲目的に頑張っているだけの私にたいする不満だっただろう」と書く。

●小島和子、衝動的にバスから逃げようとするが、永田に「殲滅戦は闘わなければいけないと思うが怖い、怖いと思うが闘わなければいけないと思う」と心境を吐露し、残留へ復す。

垣は、原因をそれまでの自主的な活動ではないからと分析。

8月25日

●対象の交番の近くに移動。

8月26日

●殲滅戦の対象を国道4号線沿いの駐在所、決行は30日と決定。警官を殲滅し拳銃を奪い、母屋にいる妻を縛って逃走する。途中、パトカーや質問にあつたら、銃や爆弾で粉碎する、という計画を立ててる。

●台風のため前夜から激しく雨が降り、沢のキャンプから胸まで水につかりながら移動。この日の殲滅戦計画は延期となる。2回目を9月10日に設定したが、この日も台風で順延に。

9月11日

●決行となり4人は車で出発。坂東はこのときの植垣の様子を「ハチマキを取り出し、それをギュッと固く頭にしめ、ひざの一点を見つめ、何かこころに念じている」と描写する。植垣はこのときの心境を「もともと賛成でなかつた地方殲滅戦だったうえ、たいして緊張もない駐在所の襲撃だたため、なんともやりにくい作戦で……警官の殲滅への意欲をかきたてるのに苦労した」「人民の解放の事業に生命を犠牲にす

8月28日 ●円、変動相場制移行を実施。

8月30日

●対象の交番の近くに移動。

8月31日

●対象の交番の近くに移動。

11月5日

●ベースを安倍川の上流牛首に移動。

●3人の女性の党員候補化と自己批判の要求

●永田と吉野は、牛首ベースで大根、金子、杉下の3人に党員候補への昇格を通告。同時に大規には「9・4闘争での自供の自己批判」、金子には「政治ゲリラ闘争を救対の立場から批判したことや、中国行きを根拠地問題抜きに批判したこと」、杉下には「寺岡があなたの自立を望んでいるので頑張ること」と、自立の必要性を指摘する。

11月10日

●加藤に党員候補を通告。
●牛首ベースに山の管理人がきたので、急遽移動を決定。とりあえず井川ベースに戻る。

11月14日

●加藤は是政で一斉逮捕

●東京府中市のは政アジトなどで加藤能敬ら5名が逮捕。アジトからは拳銃の実弾が発見される。ベースには逮捕されたFの夫や、Mの恋人がいたが様子に変化はなかった。この時点で加藤と小島は恋人関係だったが、永田は知らなかつた。

11月11日

●坂東、植垣、進藤の3人が先発隊として新倉に向かう。植垣はシンバからカンバをもらつて行つたが、それから約30年、会えないことになつた。

11月12日

●牛首ベースを再スタートする。

11月13日

●3人は新倉のベース候補地に到着。坂東は「ここなら、いくら射撃訓練をしても大丈夫だ」と感想。その後、5つある山小屋のうち、一番奥とその前の小屋の使用を決定。以降の数日を、尾根までの道通しや薪作り、銃の肩付け訓練、星火燎原の學習、討論などで過ごす。進藤は議論好きだったが、肉体労働は苦手で、坂東と植垣は次第に批判的になつていった。植垣は活動の場ができ、一時の消耗感から立ち直つて

11月19日

●沖縄返還協定強行採決に抗議行動
中核派は、東京・日比谷公園内のレストラン「松本樓」を炎上させた。

11月20日

●日活ロマン・ボルノ2本立てで封切り。

●暴力的総括要求の萌芽

11月22日

●小島の消耗が議題となり、荷物を調べるが逃げる準備は見えなかつた。坂口、突然、小島を川に引つ張り出し「夢中になつて洗濯しろ」と命令。永田はこの洗濯強制を振り返つて、「同志的な感情に基づいたものであつたが、一種のしごきであり、吉野が脱走しようとした瀬川を殴つたのと同様の暴力的総括要求を受け入れる下地となつたと回想する。

11月23日

●ベースを榛名山に設営することを決め移動。銃は寺岡、吉野ら6人で持つて山越えすることにし、他のメンバーは電車利用。榛名山に決めたのは、大久保清事件の被害者が埋められた場所の側なら、あまり人も近付かないという判断だつた。

11月29日

●共同軍事訓練の位置づけ

●森が革命左派との共同軍事訓練の位置づけを話す。「連合赤軍の統合司令部の建設を具体化し、殲滅戦の戦術原則をかちとる。そのため革命左派には、瀬川の脱走や是政での大量逮捕の総括を要求する。特に逮捕のとき警察の突破を図らなかつたことを問題にし、そういう軍事的能動性の欠如は、反米愛国路線の欠点の現われである」。

●赤軍派は革命左派には銃を使いこなす能動性・軍事力はないみをしており、共同軍事訓練で自分たちの優位性を示そうと目論んでいた。

3
第3章

連合赤軍の成立と「総括」

1971.11.30-1972.2.18

死に至る総括の過程と森・永田らの逮捕

両派が共同軍事訓練で邂逅してから

わずか2カ月の間に、

29人のうち12人が死ぬことになった。

彼ら、彼らが「やったこと」、

やろうとして「できなかったこと」とは

何だったのか？

複数のテキストから克明にたどる。

写真：連合赤軍、迦葉ベース（72年2月撮影）



【山岳ベース】略図



●共同軍事訓練へ

11月30日

- 赤軍派との共同軍事訓練のため、まず革左の大槻節子、杉下リサ子が赤軍派の新倉ベースに出発。

●植垣は赤軍派と革命左派の軍事訓練参加メンバーを新倉鉄橋まで迎えに行く。

12月1日

- 赤軍派合法メンバー遠山美枝子、行方正時、青島が植垣と合流。植垣は車に入るという女性が遠山であることを知り、やつていてるのか不安に感じる。

●革左の本隊7名（永田、坂口、寺岡、吉野、前田、石田、金子みちよ）が出発。高崎で先発隊から身延駅などの安全を確認し、八ヶ岳の山小屋で1泊。

12月2日

- 革左の本隊、小淵沢→甲府→身延と電車を乗り継ぎ、さらにバスで2時間かかって、迎えの植垣と合流。植垣は「水筒を持ったままですか？」と質問。さらに2時間歩いて屋根まで出て宿泊。植垣の水を沸かし食事に。水なしはどうするつもりだったかと問われ、吉野は革命左派は沢づたに動いていたので水の用意はいらなかつた、と答える。植垣はトランシーバーで水を持ってくれるよう、ベースに依頼。

●水筒問題で赤軍派が革左を非難

12月3日

- 森は、水や食料を持っていく進藤、青島らに、水筒問題で革命左派を批判するよう指示。
- 両派の訓練部隊は、水を持ってきた赤軍派の山崎と進藤隆三郎に合流。進藤は初対面だったが挨拶もそこそこに「何で水筒を持ってこなかつたんだ」と非難。山崎も加勢し、気まずい雰囲気となる。昼頃 やはりトランシーバーで植垣が依頼した昼食を持って青島が迎えに来る。青島も開口一番、水筒の不携行を非難。
- 午後、小屋に着いたときも、森ははじめ赤軍派は水筒問題で革命左派を激しく非難。この追及について坂口は、森が共同軍事訓練のヘゲモニーを握るために下部にも批判させただろうと推測

12月3日

●印パ戦争始まる。

- している。結局、永田の自己批判によりけりがつくまで、共同訓練は中止せざるをえないかとさえ思われるような気まずい雰囲気が続いた。
- 夕食後、初めての全体会議。赤軍派の出席は森恒夫、坂東國男、山田孝、青島、行方正時、遠山美枝子、植垣康博、進藤隆三郎、山崎順の9名。革命左派も同数だった。両派の代表挨拶は、坂東と永田。坂東の長い挨拶を、ここでも永田は「何をいつているのかよくわからなかつた」。
- 永田は遠山の決意表明に注目したが、それは「私は革命戦士になるんだ。今はそれしかいえない」というだけのもので、女性問題に強い関心を持ち、また赤軍派の女性兵士という存在に興味を抱いていた永田は失望した。また他人の发言中にブランで髪をとかしたり、唇にクリームを塗つたり、ねそべつたりする態度を苦々しく思った。「とはいえる、私は苦々しく思つただけで、それを批判する意図は毛頭なかつた」。

●遠山批判の始まり

12月4日

- 午前中、簡単な銃の使用訓練。ただし森の要請で永田は残り2人で会議。森はうつて変わつたような笑顔を見せ、赤軍派9人の評価、M作戦で警察に銃を奪われたことの自己批判、銃の譲渡の要請などを行なう。永田は銃の要請を保留し、遠山の革命戦士としての資質について疑問を表明する。内容は、合法時代と同じ指輪をしている（『革命的警戒心が足りない』）。赤軍派では幹部の夫人が特別扱いされているので、森も遠山（赤軍派幹部・高原浩之夫人）には、ものが言いくらいのかと感じていた。
- 午後はストーブにくべる薪作り。新倉ベースは高い山に閉まれた谷間にあり、雪が少し積もつていて。小屋のそばに水量豊かな沢があり厚い氷が張っていた。氷はこの沢から汲み上げていたが、寒さのためすぐ凍つてしまい、使用する度に氷を汲んでこなければならなかつた。
- 夜 全体会議。森は革命左派の12・18上赤塚交番襲撃闘争と、2・17真岡銃奪取闘争を理論的位置づけて評価し、自派の米子M作戦でその銃を失つたことを自己批判。ついで青島に革命左派の女性との恋愛問題、植垣に丹沢ベースでの痴漢行為問題を自己批判させた。その後、革命左派に瀬川の脱走問題とは政での大量逮捕の総括を要求。永田は、都市アジトと山岳ベースの結びつきによって克服するなどと述べる。

12月5日

- 朝から大雪のため、小屋内で銃の肩付け訓練と柔軟体操。

●夕方、全体会議。森は前日の瀬川脱走と是政大量逮捕問題の総括をむし返す。永田も同じよう答えるが、森は納得せず、気まずい雰囲気が支配。

●夕食後、永田は、遠山が相変わらず指輪をしていることを批判。他の革命左派メンバーも遠山に「なぜ共同軍事訓練に参加したのか?」を問い合わせる。森は坂東、山田、青島の3人と相談の上、「革命左派の批判は方法の問題として学び、作風・規律問題として解決していく」と表明。しかし指輪を取らせるわけではなかったので、批判は続いた。曰く「山と都市との位置づけが曖昧」「合法時代と髪型、同じ偽名を使っている」「会議での態度が革命戦士にふさわしくない」等々。これが一連の総括要求の発端となつた。

●遠山問題で赤軍派自己批判

12月6日

●朝、赤軍派だけが独自に会議。森は赤軍派メンバーに、革命左派が山を離脱した2人を死刑にしたこと、および革命左派の山での相互批判—自己批判の様子を教え、以下のことを意思一致した。(1)山岳根拠地論を軽々しく批判しないこと(2)遠山批判は赤軍派全体に対する批判として受けとめること(3)遠山自身が積極的に受け入れ、行動的な面から改めること(4)そのため遠山が自己批判すること(5)メンバー全体で責任を持つて解決すること。

●その後、革命左派に向かい「遠山さんが結婚できるまで山を降ろさない。山を降りるものは殺す」と宣言。永田は「どうせ言葉だけだ。しかし、そういう気持ちで頑張って欲しい」と考え、坂口は「われわれの2人の処刑を念頭に置いて……本気でそんなことをするはずはあるまい……」と思いつつ、衝撃を受けた。

●森は統いて「作風・規律の問題こそ革命戦士の共産主義化の問題であり、党建設の中心的課題」「革命左派の相互批判—自己批判は自然発生的な共産主義化……それを評価するとともに、目的意識的なものに高めあげ、その観点から各個人の革命運動に対するかかわりあい方を問題にしなければならない」と表明。永田は遠山批判が受け入れられたことに満足し、また自己批判を目的意識的な共産主義化に高めるという森の主張に、2・17真岡銃奪取闘争後の課題であつた思想問題を解決できると思い、大きな期待を寄せた。

12月6日 ●韓国の朴正熙大統領、国家非常事態を宣言。

●午後は射撃訓練。永田は初めての実射だったが、何とかこなした。夕食後、全員が実射訓練の感激をこもごも語る中、腹を打ったと訓練途中で戻った遠山に両派から批判が続出。森が、それを今までの遠山の活動批判へと広げ、高原との結婚の理由などまで激しく問いつめた。途中で帰る遠山を送ろうとした行方にも総括が要求された。

12月7日

●共同軍事訓練最終日。「論理的なものにひかれて革命運動に入った」という山田に、森は「活動を楽しいと思つてきたか?」と聞く、「楽しいと思つたことは一度もない」という答えに「共産主義的人間性を求めて入るべき」と言う。植垣は物理を通して革命運動に関わったと言う。両派の代表による射撃競争の後、全員が決意表明。森は生い立ちから第2次ブントの総括まで長時間にわたって語るうち、感極まつて泣き出す。もらい泣きするものも出、坂口も胸をジーンと熱くした。永田はその涙の理由をよく理解できず。終わりに革命左派が赤軍派に弾銃を1丁渡す。

●主体の「共産主義化」論

12月8日

●永田、坂口は引き続き留まり、森、山田と指導部会議。森は銃による殲滅戦論を開く。その中には「銃による殲滅戦ば、銃を握る主体の共産主義化を党建設として目的意識的に行なうことによって始めて勝利できる」等の内容もあり、永田は從来の自派の「銃を軸とした建党・建军闘争」をより一層理論化したものと思い、森に信頼の気持ちを持つ。坂口は「森のベースで怪しげな理論が作られていくことに不安を募らせていた」と著書に記している。植垣も「理論としては明快だが、そこまで単純化していいか不安も残つた」と書く。

12月9日

●森は行方、遠山、進藤たち(3人も赤軍派)への批判を継続。行方へは「雑談はするが討論には加わらない、行動力がない、自主的な判断力に欠ける」など。進藤へは「愛人の女性Mの逃亡問題に組織の責任を云々するが自分自身の問題として総括していない、個人主義的な行動が多い」など。

12月12日

●ベースに小屋が完成

12月15日

●永田、坂口、榛名ベースに戻る。山本順一が入山していた。合計16名。

●木立に覆われた山の斜面に小屋が完成。斜面を削って整地し、丸太や板を使った山小屋風のもので、縦約7メートル、横約5メートル。屋根はトタンにし、廃屋になっていた旅館の雨戸やガラス戸をうまく使っていたから。これと闘って山で頑張る。杉下リサ子は「(寺岡や吉野に)寺岡に頼つて自立していないと批判された。割り切れない」。金子「お腹の子どもにひびくといけないと実射させてもらえたなかつたことを批判したら、逆に批判された」など。

12月17日

●尾崎が帰山し、12・18政治集会が京浜安保共闘と革命戦線の共催でなく、革命左派と赤軍派の主催になつていると報告。アピール集を見ると川島豪の影響が感じられ、永田は問題視する。

12月18日

●前田ら2人が政治集会に出発。
●永田はラジオで、土田警視庁警務部長の自宅に届いた小包が爆発し夫人が死亡したニュースを聞き、爆弾でなく統なら他人を巻き込むことなく目的を達することができる、つまりテロリズムの克服が銃による殲滅戦であると考える。

●新党の協議

12月20日

●新党の内容を協議するため、森と坂東が様名ベースに来る。指導部会議で森が小鳩をはじめとして革命左派メンバーを批判。永田の反論で女性論に移るが、「女性の性そのものを否定した女性蔑視の観点を女性の革命戦士化の問題として持ち込む……私たち以上に極左的なもの」だったと永田は回想する。その後森は、中国革命の歴史的評価とそれを通じた共産主義化などについて全面展開。永田は、自分たち以上に毛沢東思想を理解していると畏敬の念を抱く。だが坂口は、そう思つたのは永田一人だったろうと、著書に書く。

12月21日

●引き続き指導部会議。極左的実践路線の限界に直面していた永田は、森の革命主体の共産主義

12月18日 警視庁・土田警務部長宅に爆弾小包が配達される。夫人が即死、四男が重傷。

化論に「すがりついた」。そこで森と永田は「われわれになつた立場から共産主義化を追求」していくことを確認。路線問題を切り捨てたまま、新党の結成が決まった。

●「われわれになつたこと」は革命左派の全体会議で公にされた。坂口の経過報告、永田と森の挨拶の後、一人ひとりが発言。早岐と向山の処刑に関する小嶋の発言を森が聞きとがめ批判。森の革命左派メンバーに対する最初の批判となつた。

●夜、是政で逮捕された加藤能敬が不起訴となりベースに戻る。加藤は12・18集会への指導部の対応(主催から革命左派の名を外すように要求したことなど)に、石田とともに意見書を提出。

永田は、集会を準備した合法部(京浜安保共闘)の方に非があり、意見書には事実誤認があることを告げると、加藤らは納得し自己批判。

●加藤は、取り調べ時の刑事との雑談を自己批判するよう求められる。また集会、革命左派を代表して行つた尾崎は、帰路に尾行され山の者が全員逮捕されることに備えて、合法部に銃の隠し場所を教えたことを批判される。

●山本、妻と生まれたばかりの子どもを連れて来る。

●指導部会議、続く。加藤に総括要求

12月22日

●前夜から未明まで、森が60年代の階級闘争の追体験が必要と語り始める。永田はスターリン全面批判に戸惑う。

●午後、指導部会議再会。被指導部が歌を歌い出すと、森は「歌は力強く歌うべきで、あのように楽しく歌うならやめさせろ」と指示。

●夕食後、全体会議。森が加藤に対し、逮捕前後の行動を問い合わせた。

12月23日

●赤軍派の山田孝が様名ベースに来る。

●赤軍派の山田孝が様名ベースに来る。

12月24日

●森への屈服

12月24日

●新宿・追分派出所でクリスマスツリーに偽装

●午後、指導部会議。森、60年代階級闘争の総括の続き。69年の4・28沖縄デー闘争でブントが共産主義突撃隊を作り、爆弾闘争を組織したことを強調。永田はこれを聞き、4・28に参加することができなかつた自派は遅れていると思う。坂口は黙っていたが、顔では納得していない様子を隠さず。吉野は淡淡と話を聞く。寺岡は森の内容に積極的に同意し始める。永田はその同意は、自分たちが銃による殲滅戦の理論的支柱がないことが原因と感じていた。

●また川島批判の中、川島が打ち出した路線を「永田さんが打ち出した」と強引に決めつけ、革命左派指導部は沈黙する。

●60年代階級闘争の総括は、69年7・6の内ゲバ（赤軍派がさらざ議長に暴行）から森が離脱したところまで、森の独白に近いものが展開され進まず。その展開も、主に山田や坂東に向けて語つたもので、革命左派にとつては不得要領のものだった。

●革命左派指導部は沈黙する。

●加藤と小嶋は、総括のため作業から排除されノートを広げて話し合う。

●指導部会議では、森が革命左派の歴史を聞い、川島豪の偽装転向について、本当に気がおかしくなつたのだと激しく非難。60年代の追体験を終わらせようという永田に、森は共産主義化の問題をしつかり把握するために加藤と小嶋の総括が行なわれているので、そちらが先と主張。

●夕刻、森は加藤と小嶋を別々に総括させると席を離し、2人の闘争歴を永田に尋ねる。また、夕食抜きで総括が命じられる。

12月25日

●森が、自然発生的にではあれ永田が共産主義化をかちとつてきた理由を明らかにしようと生い立ちを問い合わせ、永田は典型的な労働者の家庭に生まれた（父は工員、母は看護婦）ことを強調する。また山本順一夫婦の子どもがベースで育てられていることを評価し、自分も妻子を呼ぶと発言（実現せず）。

●森、革命左派に川島との分派を迫る

●26日夜の指導者会議で、森は、革命左派の「下からの党建設」を否定し、「上からの党建設」として、遅れている川島との誤別→分派し新党の結成、を迫る。永田は綱領問題など未解決のま

12月26日 ●米軍200機が大規模な北爆。

された爆弾爆発し警官1人死亡、通行人ら11人重軽傷。

までの分派に不安を抱くが、森の共産主義化論の前に自主性を失つていたため、強く反論できなかつた。寺岡も同じような反応を見せ、坂口は分派に抵抗がある様子を見せた。

●永田が示した暴力的総括への嫌悪感と、坂口の反感

●この会議中、中座した永田に小嶋が「加藤が夜、変なことをする」と訴える。加藤と小嶋に腹を立てた永田は、指導部会議に報告（小嶋へは「加藤の隣に寝たあなたにも問題がある」と腹を立てた）。坂口も、加藤に怒り。森は「総括要求されている加藤がそれを隠しているのだから、もつと聞き出すために殴ろう」と提案。さらに「革命左派は暴力的分派闘争の必要を考えてみなかつたから、指導として殴ることが考えられなかつた」「指導として殴ろう」と理屈付けた。永田は、それによつて共産主義化をかちとることができるならと、殴ることに同意した。しかし同意の瞬間、平静でいられず、こたつの中の手がブルブル震えた。隣にて、その震えを知つた坂口は永田の「手を握つてくれた」。以後、しばらく永田は手が震える事態が来ると、坂口の手を求める、坂口もそれに応えた。

●なお、坂口、吉野、坂東の証言では、永田は指導部会議に「嫌なものを見た。加藤と小嶋が接吻をしていた。神聖な新党の場が汚された」と訴えたとなつていていた。

●加藤・小嶋への暴力的総括が始まる

●森は、中央委員に殴る手順を指示する。山田は「今一度、殴ることの意味を確認させてくれ」と要求。森「新しい指導として殴る。共産主義化をかち取らせるため」と答へ、既に寝入つていて被指導部を起こさせる。加藤、小嶋を除いて7人のメンバーが起きてきて、加藤の周りを取り囲んだ。27日の未明になつていた。

12月27日

●「何か隠していることがあるだろう！」それを言え！」と森が殴り始めると、だんだん他のメンバーも「総括しろ！」と同調しだした。他のメンバーにとつては、総括を求められてる最中の加藤がなぜまた総括に値する行為をしたのか、という無念さが動機となつたようだ。

●小嶋については女性が殴ろうと思つていていた永田だが、混乱してしまい、坂口と坂東に小嶋への殴打を促した。

●総括要求が続く中、加藤と小嶋は様々な「告白」を行なう。その中には単なる思いを述べただけのもの（女性の胸を触るうとした）や、トラウマとなつてゐる出来事（レイプされた）など色々なことがあつたが、総括は終わらなかつた。永田は、加藤の2人の弟が手を出していないこ

とに気付き、「兄さんのためにも、自分のためにも殴りな」と声をかける。上の弟は涙を流しながら「兄さんが闘い始めた理由を総括しなければいけないんだ」と4～5回殴り、みんなの輪から出ていった。下の弟はしばらく殴れずに体を硬くしていかが、結局、同じようにした。明るくなり始めた頃、加藤への追及が終わり、加藤はそのまま縛られた。

●森は、殴つたことが「同志的援助」であることを全体会議で確認せよと指示。みんなは「気抜けしたようボンヤリしてい」た。このとき吉野が急に発言を求め、自分には自己批判するべきことがある、声をふりしぶるように自己批判。加藤へ厳しく当たった以上、自分もと思いつてのことだった。

●星頭、大概らう人がベースにもどる。

●新党の成立

●午後の指導者会議で、森は永田らに川島との訣別・分派闘争を再び迫る。永田らは「同志を殴つたのだから銃の觀点を持たない川島にはもつと激しく当たるべき」と分派に同意。この時も永田の手は震え、坂口がそれを握つた。森は「分派するなら新党結成を考えるべき。加藤、小嶋を殴つたことに責任を持たねばならない」と新党を宣言。「川島は私にとつて巨大な存在」という心情の坂口は、なかなか同意できなかつたが、永田、寺岡、吉野が賛成に回り「断崖絶壁に立たされた心境となり、ついに決心する。このときは坂口が永田の手を求めた。2人が互いの手を探りあうのは、この時が最後となる。

●森は、これまで永田を特別視しており、共産主義化の視点から問題となることでも、永田に対しては追及しなかつたが、この日以降、坂口をも特別視することとなつた。

●永田の責任

●後に永田はこの時点の新党結成を振り返つて、各人の共産主義化という方法論で一致はしたものの、路線問題は捨象されていたため、反米愛国という革命左派の立場は放棄されていなかつた。したがつて森の指導的立場は不安定で、その強化のためには不斷に暴力的総括要求をしなければならず、ここに12名の同志「殺害」に至る必然性があつたとし、路線問題を曖昧にしたまま新党結成に同意した自分の誤りと責任は重大と述懐する。

●尾崎充男への総括要求始まる

●夜の指導部会議で、南アルプス新倉ベースにいる赤軍派6人を標名ベースに呼び寄せるなどを決定。

●尾崎充男への総括要求始まる

12月28日

●森が、小嶋を縛つて拘束するよう指示。ガラス戸から外を見ているのは逃げようとしているからだ、というのが理由だった。

●永田が全体会議で赤軍派の残りのメンバーの合流を報告。森は（総括経験などによつて）、ここにいる者の方がはるかに進んでるので、彼らを指導して欲しいと発言。また永田が、指導部が60年代の階級闘争の追体験をしていることを話すと、被指導部メンバーは興味を抱く。

●坂口に不整脈が出て、寝込む。川島との訣別、新党結成などの葛藤と重圧が招いたものと永田は思つた。

●夜、全体会議。加藤・小嶋に対する総括要求に関連して全員が自分の問題点を切開。森は以下のように尾崎を問題にする。(1)加藤問題を各自が内なる問題と自己批判して殴るべきなのに「よくも自分を小ブル主義（チチブルジョア主義）者と言つたな」と発言したのは個人的な恨みから殴つただけ。(2)銃の隠し場所を合法メンバーに漏らしたのは問題。その前提に山のメンバーが逮捕される事態を想定している。森の追及が続くうち、合法活動時代に行動をともにしていた石田や大槻節子が、尾崎批判を引き継ぐようになり、「12・18（上赤塚交番襲撃闘争）で日和り（＝参加せず）、柴野さんを死なせてしまった」と発言。森は「そんなお前がコタツの中にひつていりながら、何度も何度も飛びこませた。永田は耐え難い思いで見ていたが、正視することが自己の共産主義化に必要なのだと思い、「頑張れ！」と言つただけだった。縛られていた加藤も涙声で

●尾崎に格闘を命令

12月29日

●尾崎の日和見主義の克服のため、12・18闘争を再現して警官と闘わせることになる。警官役は坂口が立候補。この格闘はすさまじいものになつた。本氣で突つ込む尾崎に対して坂口も殴り返す。尾崎はほとんど一方的にやられるが、森や山田は倒れる尾崎を引き起こし、「そんなことで総括できると思つたら大間違だぞ」「起きあがらなくとも権力は遠慮しないぞ！」などと怒鳴りながら、何度も何度も飛びこませた。永田は耐え難い思いで見ていたが、正視することが自己の共産主義化に必要なのだと思い、「頑張れ！」と言つただけだった。縛られていた加藤も涙声で

「頑張れ！ 頑張れ！」と声をかけ、小嶋も「（警官を）殺すのよ！」と叫んだ。

●この格闘がどのくらい続いたのか、誰も具体的に書いていない。永田の著書には「相当長い間」「えんえんと続く」坂口は「非常に長く感じられ、小1時間も経つたか」とある。それでも終わらなかつた。永田の提案で、坂口は15分ほど殴られっぱなしにするが、森が元通りにしろと指示。約15分後にやつと終わると、尾崎は森の前に両膝を折り頭をたれ両手を差し出して「おやじさん、ありがとう」。森は尾崎の肩に手を置いて「よくやつた。しかし、これで総括ができたと思うなよ」と答えた。永田は尾崎に「甘えるな」と批判。

●森は金子に、格闘の途中で席を外した理由を聞く。金子は「あんなことをしても尾崎君が立ちは直るはずがないから」と答えた。金子は以後、総括には賛成しても暴力にはきわめて消極的になる。この時以降、森は金子に批判的になつた。

●格闘の評価に対する指導部会議で、森は尾崎の「ありがとう」発言とその後のみんなへの態度を批判。総括要求が終わつたと誤解している尾崎をシユラフに休ませるのは誤りと断罪し、立つたまま総括しろと命令。

●森は金子に、格闘の途中で席を外した理由を聞く。金子は「あんなことをしても尾崎君が立ちは直るはずがないから」と答えた。金子は以後、総括には賛成しても暴力にはきわめて消極的になる。この時以降、森は金子に批判的になつた。

●杉下リサ子が「自立した革命戦士になるため」寺岡と離婚すると表明。金子も同じく吉野雅邦との離婚を表明するが、永田はケースが違うと取りなした。

●会議中、尾崎が何度も休ませてくださいと懇願するが、森は聞き入れず、徹夜の総括を命令。吉野を見張りにつける。

●尾崎を縛る

12月30日

●午前の指導部会議で吉野が「尾崎は何度も横にならせて下さいと来るなど、全く総括する態度ではない」と報告。森は「加藤や小嶋と違うと思つている」から、厳しく総括させるために同じように縛ろうと提案。戸口の横に立つたまま縛る。

●午後、加藤の様子を見た森が「手に水泡ができた」と動搖。しかし山田と相談した後、たとえ

12月30日

●日米合同委員会、東京にある米軍調布飛行場の返還を決定。

●同日、赤軍派の新倉ベースでは、植垣といつしょに風呂に入った進藤が「どうしても死といふことを考えてしまった」ともらす。

●植垣、新党結成の話を聞き、とまどつ。

- 腕の1本や2本なくなつても革命戦士になつた方がよい、と再び態度を硬化。
- 夕方の指導部会議で、永田は60年代階級闘争の追体験の続きを要求。森は塙見孝也が共産主義化を提起したこと強調し、今なら塙見の過渡的綱領で一致できるはずと提案。
- 夜、新たに中竹聖子が入山。永田が各自の共産主義化の位置づけを手短に説明。永田は尾崎の見張りに付くことを申し出、塙見の『民民革命論（民族民主革命論）』の検討を読むこととする。読後、同書は毛沢東思想の評価や、日米複合権力論は革命左派の主張に近いと感じる。

12月31日

- 永田は下部メンバーに、「塙見の日米複合権力論により共産主義化の地平で新しい政治路線が獲得できる。これは新しい反米愛國路線で、川島のは古い反米愛國路線だ」と話す。森は不機嫌そうに、反米愛國路線という言葉を使わないように迫る。これは以後、守られた。「この事態で森はますます路線論争は避けないと新党は成り立たないと理解した」と永田は述懐する。
- 夕方、尾崎の「すいとん、すいとん」という発言に森は激し、もっと分からせようと、指導部で膝蹴りを交えて殴打。はじめ呻いていた尾崎は、やがて蹴られるままになつた。
- ここに、坂東と山本順一が赤軍派の3人（遠山美枝子、行方正時、進藤隆三郎）を連れて戻ってきた。加藤は座つたまま縛られ、小嶋は横に寝かされて逆エビ状に縛られ、尾崎は立つたまま鴨居に渡したロープに繋がれていて、張りつめた空気がただよつていた。坂東は驚き（28日の午後、赤軍派残留部隊を迎えに出発するときには尾崎は普通に行動していた）、遠山らは初めて見る異様な光景に圧倒されていた。

●尾崎充男、死亡（ベースで最初の死者）

- 夜、吉野が「静かにではあつたが驚いた様子で」尾崎が死んでいると報告。永田「目がまわり自分の体がどこまでも沈み込んでいくような不安に襲われた。……突然のことで尾崎氏の死が実感として感じられなかつたし、『殺害』したという感じさえしなかつた。……こんなことで動搖してはならないと思っていた」。坂口「頭の中が空白になつた。やがて動悸が始まり、大変なことをしてしまつたと思った。……自分のイニシアチブでこの重大な事態を收拾しなければなどとは思いもよらなかつた」。
- 森は山田と少し話し合い、「尾崎の死は、共産主義化の闘いの高次の矛盾、総括できなかつた敗北であり、政治的死である。共産主義化しようとしたために、精神が敗北し、肉体的な敗北へと繋がつていつたのだ。本気で革命戦士になろうとすれば死ぬはずがない。革命戦士の敗

北は死を意味している」と総括（坂口の述懐）。他の指導部メンバーはこの論理を受け入れ、全体会議で尾崎の死とその総括を明らかにした。尾崎の死には全員が「シーンとした」が、敗北死という総括と、永田の「私たちは命をかけて共産主義化を獲ち取らなくてはならない」「加藤、小嶋の2人を必ず総括させよう」という発言に「異議なし」と答える。

●全体会議中、加藤と小嶋は内容を聞かれないよう小屋の外に出し、山田と石田が見張りに付いた。また坂東、吉野、前田の3人は尾崎の遺体を埋めに行つた。

●夕食は水田の発案でベースでは贅沢品だったパン、コンビーフ、コーヒーを出した。

1972

●進藤批判、始まる

1月1日

●全員の決意表明が終わつた零時過ぎ、森は激しく進藤批判を始める。ルンペニ的という批判に対し進藤は、山谷で生活をしていて闘争に関わつたと述べる。「山谷物語を聞いてるんじやない」と遮る森に対し、進藤は「でも僕が革命運動に関わるようになつたのは山谷だから」と反論。坂口は進藤が森に反論したことに、強い印象を受けた。

●進藤は問題にひとつひとつ重苦しい感じで答えていった（六本木の芸者だった女性を金目当に活動に引っ張り込んだこと、赤軍派への加入もM作戦の金が目的だったこと、新倉ベースでも逃亡を考えたこと等々）。

●夜明け頃、進藤は「縛つてくれ、自分はその中で総括する」と言う。森は「要求は拒否する！我々はお前を指導として殴り縛る」と宣言。女性や金問題で進藤に怒りを高めた他のメンバーも、進藤を取り囲み、殴打が始まつた。指導部の男は、氣絶させようと腹を集中的に殴つた。気明らかに弱々しい殴りだつた。遠山は「私には殴れない」と躊躇したが、森は「殴れ」と強い口調で言い、遠山も必死の面もちで数回殴つた（坂口の著書では、みんなで遠山に対し「だらしない」と非難したとなつてゐる）。

●殴打中、進藤は2度失禁。外で縛ることになると、進藤は「自分で歩けます」と言つ。

●指導部会議で進藤の総括。逃亡は重大な反革命行為と認識されていたので、進藤への批判は決定的だった。

●進藤隆三郎の死（2人目の死者）

●会議中、進藤の見張りをしていた石田が小屋に駆け込んで、「進藤がもうダメだと言つて死んだ」と報告。永田はびっくりしたと書いているが、坂口は、自分も森も冷静だったと記す。これも森は敗北死と説明し、全体会議でも誰も異議を唱えなかつた。

●小嶋和子の死（3人目の死者）

●全体会議の後、降雨。加藤と小嶋を床下（人が少ししゃがんで入れるほどの高さ）に入れる。加藤が床下の柱に頭を何回も激しく打ち付ける。驚いて理由を聞くと「総括に集中するため」。それを聞いて森は、満足そうに加藤を小屋内に入れた。

●小嶋の様子が急変したとの知らせで、森や山田は人工呼吸などを施すが、遅かつた。指導部会議は重苦しいものになつた。山田が「死は平凡なものだから、死を突きつけても革命戦士にはなれない。考えてほしい」と森に意見。2人は互いの目を見て鋭く対峙したが、そのうち森は「いや、そうではない。死の問題は革命戦士にとって避けて通ることのできない問題だ。従つて、精神と肉体の高次な結合が必要である……」「精神と肉体の高次な結合が勝ち取れていれば、死ぬことはない」と断固とした調子で主張。山田も他の指導部メンバーも最後は森に同調した。

●全体会議も3人の「敗北死」に重い雰囲気。遠山は落ち着きを失い、行方も緊張感に圧倒されていた。

1972

●新倉ベースで、進藤は前夜をまんじりともせず明かす。眠れなかつたのかと問う坂東に「自分を信用して欲しい。山から逃げないから」と答える。しかし「不安が大きい」とも述べた。

●この年、不況下の物価高（スタグフレーション）が問題に。ボーリング・ブーム。スマイル（ベース）バッヂ流行。

●遠山批判、始まる

1月2日

●午前中の指導部会議で、森は遠山と行方を批判。

連合赤軍

社会状況あるある

●午後、植垣康博と山崎順が様名ベースに到着。永田は2人とも元気だったと見たが、植垣は森や指導部の威圧的な雰囲気に圧倒されそうな思いをいだきつつ、かろうじて踏ん張っていた。「山田氏や坂東氏も、それまでの気楽に話せる親しさがなくなり、威圧的な態度をみなぎらせていた。永田さんも、以前にはよく被指導部の人たちといつしょに話していたのに、指導部のこたつに収まつていて、すっかりよそよそしくなつていた。指導部の一人ひとりの性格まで変わつてしまつたがのようだつた」と植垣は第1印象を著書に記している。

●これで旧赤軍派すべてのメンバーが集結。中央委員＝森恒夫、坂東國男、山田孝。被指導部＝青島元雄、遠山美枝子、行方正時、植垣康博、山崎順（進藤隆三郎が既に死亡）。旧革命左派は、中央委員＝永田洋子、坂口弘、寺岡恒一、吉野雅邦。被指導部＝前田広造、金子みちよ、大槻節子、杉浦リサ子、伊崎昭子、寺村雅子、石田源太、加藤能敬、加藤（次男）、加藤（三男）、山本順一、山本夫人、中竹聖子（尾崎充男、小嶋和子が既に死亡）。

●夕食後の全体会議で植垣は、進藤の死、M作戦、丹沢での痴漢行為などを自己批判した後、「共同軍事訓練の時、大槻さんを好きになつた。結婚したいと思つています」と明言。永田は「大槻さんは渡辺（かつての革命左派メンバー）との関係の総括、向山（処刑）との関係の総括が問われているのだから、これらを抜きに当面結婚は考えられない」と発言。大槻は自己紹介に続いて「植垣君にはヴァイタリティがあります。申し出を素直に受け止めたい」と恥ずかしそうに言つた。その後、永田が小嶋の死について説明。植垣は他にも死者がいたことに驚くとともに、「敗北死」という初めての言葉を理解できなかつた。

●引き続き森が遠山批判。森「革命戦士になつて頑張ると言うだけでは総括にならん。どう革命戦士になるうとするのか」。他のメンバーも口々に「黙つていいでなんとか言え！」と言ひ立てる。ついに遠山は「小嶋のようになりたくない。……どう総括したらいいのかわからない」「死にならない」と答えることしかできなくなる。永田は森のやり方ではダメだと思い、実践活動で総括させようと「小嶋の死体を埋めさせることで……総括させよう」と提言。遠山が決意をあらわに立ち上がるが、行方もやると表明。

●「小嶋の死体を埋める」と総括せよ

1月3日

●森と永田は加藤の総括を聞くため残り、他のメンバーは遠山と行方について全員が出かける。午前1時頃だつた。植垣は動搖の様子がないメンバーに驚き、坂東に「こんなことやつていいのか？」と質問。坂東は「党建設のためだからしかたがないだろ」と答えた。以後、植垣は「党建設のため」という思いを前面に押し立て、同志への暴力や激務に参加していくことになる。

●死体をなんとか所定の場所まで運ぶと2人は穴を掘り、死体を裸にした。遠山は死体に馬乗りになり、「私を苦しめて」「私は総括しきつて革命戦士になる」と言いながら、その顔面を殴つた。このとき寺岡が「これが敗北者の顔だ……こんなやつが党的發展を妨げてきたんだ。こいつを皆で殴れ」と命令。3時頃、小屋に戻る。山田や坂口から報告を受けた森は、寺岡にこの殴打命令を詰問。「小嶋の死は反革命（者）の死だと思ったからだ」と寺岡。森は「敗北死は反革命の死として処理することはできない……」などと寺岡を批判。後に永田は、寺岡は赤軍派を迎えて新倉ベースに行つたあと東京にまわつていたので、敗北死の規定を知らなかつたのだろうと回想するが、このときはその事情は考慮されず、寺岡は批判された。

●「自分で自分を殴れ」

●戻つた遠山に、森が再び総括を求める。答えが次々と否定されるにおよび、ついに遠山は顔面を蒼白にして沈黙するだけとなる。森は「今まででは殴つて総括を援助してきたが、自分で総括するというなら自分で自分を殴れ」と命令し小屋の中央に立たせた。遠山は泣きそうな面もちで立つていたが、やがて腹をそして顔を自分で殴り始めた。動作が止まるごとに、森や山田だけでなく、杉下リサ子や大槻節子、寺村雅子も罵声を浴びせた。植垣や青島、山崎らベースに合流したばかりの旧赤軍派メンバーは、事態の急展開に傍観するばかりだった。30分ほど続き、遠山がふらふらになつた頃、森がストップをかけた。顔面はふくれあがつて正視に耐えなかつた。森は遠山も縛らせた。

●朝食後、徹夜明けだったが、被指導メンバーはたきぎ捨い。指導部は会議。遠山を着替えさせ、毛布を掛けた。

●昼食後、指導部は会議。永田は中断していた路線問題の詰めを要求。このことを知らなかつた寺岡は関心を示すが「社会主義革命ですつきりする」と表明。反米愛国路線を放棄していかつた永田は腹を立てる。森は「（みんなが）分散するときのことを考えて、各自の共産主義化獲得に集中すべき」と主張。被指導部は小屋の修理、まさ作り、洗濯など。

●夕食後、指導部会議で中央委員会を結成。従来の指導部の7人（森、山田、坂東の旧赤軍派に、永田、坂口、寺岡、吉野の旧革命左派）が就任。政治局員は森、永田、坂口。永田はナンバー2の位置を「森氏に依存していける立場」と感じた。

●全員の意見表明で、森は行方の発言を問題視して追及し、最後は行方を縛るよう命令。会議終了は深夜の3時になっていた。

● 加藤熊藏の死（4人目の死者）

1月4日

●朝、森が今朝までの加藤の態度を「逃げようとしていたのだろう？」などと追及。そして「総括していると思つたが、小屋の中に入れてからは元に戻つてしまつた。加藤を立たせて縛れ、逃げられまい」と言い置いて中央委員会に。しばらくして土間に縛られた加藤が死亡。永田は動揺して泣き叫びたが、「私が泣くのは許されないと思つて必死に耐えた」。加藤の2人の弟は茫然としていた。永田が「今は泣きたいだけ泣いていい。兄さんの死を乗り越えて、兄さんの分まで頑張つて革命戦士になつていこうよ」と言うとN（三男）は「こんなことをやつたって、今まで誰も助からなかつたじゃないか！」と泣き叫んで外に飛び出していく。M（二男）は永田の肩に顔を埋めて泣き出した。

●森は中央委員会で「加藤は逃げようとしたことがばれてしまい、絶望して敗北死した」とまとめ、永田は被指導メンバーにそう説明した。植垣はこのとき初めて敗北死という規定が正しいのだと確信した。

●午後、被指導メンバーはまき作りなど。この頃、食事は「缶詰の鶏肉や野菜の入った雑炊が多くた。昼は作業、夜は全体会議という状況の中ではおいしく感じられたが、大きな釜でかなりの量を作つても、人数が多いので一人当たりの量は多くなかつた。しかも縛られている者には食事が与えられないため、常に気まずさがつきまとひ、楽しく食事をすることができなかつた」と植垣は記す。

●6時頃夕食。食後、遅れていると再び指摘されていた青島、植垣、山崎（いずれも後からべーべーに合流）は、それまでに死亡した4人（尾崎、小嶋、進藤、加藤）の総括問題について、大槻

節子と金子みちから話を聞く。9時の就寝前、大槻が植垣に「（共同軍事訓練の時）渡辺に似ていたので、あなたに甘えてしまつた。自己批判する」と話しかける。渡辺は大槻の以前の恋人。植垣「今でもそう思つてゐる？」。大槻「あなたは渡辺とは全然違う。渡辺との関係は、ブルジョア的なかわいい女でしかなかつた」。植垣「ありがとうございます」。

●中央委員会で4人の死体を別の所に埋め直すこととし、地図で選定。森は前田、石田、寺村、植垣、青島を党員候補に考へていると表明。

●死体の埋め直し

1月5日

●早朝、山田、寺岡ら6人は死体を埋める場所の調査に出発。森は青島を呼び、6・17明治公園爆弾闘争で青島が手榴弾を投げなかつたことの総括を求め、「ビビッタからではない」と否定する青島との間に険悪な雰囲気が漂う。

●青島と石田は担架つくり。この時点では用途は知らなかつた。森が植垣と山崎に、行方を縛つているロープが緩いと締め直しを指示。「納得できなくとも、決定した党の方針には従え」とも付加。

●夜9時頃、3人一組で4組が、死体を掘り出す作業。死体をライトバンに積み込むと、山田ら6人が埋め直しに出発。そのとき山本順一が人に見つかつたと言いだし、全員ナイフやアイスピックを片手に息を殺すが、何事もなかつた。

1月6日

●埋めに行つた山田らは朝方に戻る。寺岡が、山田の空騒ぎを批判。昼、被指導メンバーは洗濯など。植垣らは着替えを持ってなかつたので、逮捕まで1着で過ごす。これによる悪臭が逮捕の一因になつた。

●夜、森は行方の「他の所に移される時に逃げようと思つてました」という答えに「逃げられないうに、肩胛骨と大腿部の裏側を思つたり殴れ」と指示。山田、寺岡（まきで殴打）の中央委員の他、青島、植垣、山崎も殴つた。植垣は「大変な任務は指導部だけにさせておくべきではない」という思いだつた。殴打が終わると、逆エビに縛つた。

●遠山は立たされたり、座るのを許されたりしたが、座つていてるとき膝を崩していると、永田は「まだ女を意識している」と非難した。行方が殴られてる最中、遠山は「お母さん、美枝子は革命戦士になつて頑張るわ」「お母さんを幸せにするから待つててね」と何回も繰り返した。森

はそれも問題にし、また追及の過程で、遠山がいつも指導的なメンバーを好きになることで自分の地位も高めてきたなどとも批判し、行方と同じように殴つて縛れと命令。植垣ら被指導メンバーが殴り、縛ろうとしたとき、森が「足の間にまきを挟んで縛れ」。寺岡が「男と寝た時みたいに足を広げる」。これに笑い声が起こったが、永田は「そういうのは矮小よ」と叫ぶと、笑いはやんだ。

●行方と遠山に対する激しい殴打・縛縛に、植垣はそこまでやらなければならないのか、とたじろぐ反面、どうして総括を放棄するような態度をとるのか、とも思っていた。

●石田、前田、寺村が党員に。森は旧赤軍派内では坂東、次いで植垣を信頼していたが、なぜかこのとき植垣ははずされた。

●遠山義枝子の死（5人目の死者）

1月7日

●午後4時から全体会議。5時頃、永田が遠山の異変に気付く。火を焚き、必死の人工呼吸も実らず、遠山が死亡。この最中に、永田と坂口は激しい喧嘩となつた。直接のきっかけは遠山を蘇生させるための酒の病のし方等だったが、「薄情だ!」「やることはみんなしたわよ」など罵りあいとなつた。森が永田を擁護し、永田が「謝れ!」と迫つたので、坂口は中央委員を辞任すると表明。森が取りなしたので、この件は沙汰止みになつた。植垣は、仲がいいと思っていた2人の激しい喧嘩に戸惑つた。その後、また何事もなかつたかのように話している2人にも戸惑つた。

●夜の全体会議で、「死んだ5名との共産主義化の闘いを踏まえて殲滅戦を具体化する」と森が宣言。青島はそれを聞き、「もう総括はないだろうと希望を持った」（公判の証人尋問）。

1月8日

●青島と前田は黒ヘル（ノンセクト）グループの奥田秋一（慶應大）をオルグしに東京へ。その他、石田、山崎など8名が任務を受けてベースを離れる。「みんなの雰囲気は重苦しいものから活気あるものに変わりつづつあった」（坂口）。坂口は永田に「もういやだ。人民内部の矛盾じゃないか。このままでは駄目だ。一刻も早く殲滅戦を戦うべきだ」と訴えるが、永田は「総括は必要」と答えた。

1月9日

- 森、金子を主婦的、大槻を女学生的と批判。金子を会計係から降ろし、永田が代行。
- 行方正時の死に誰も驚かず（6人目の死者）
- 行方の衰弱がひどくなり、童謡を口ずさむなどする。夜、震え出す。

1月9日

- 午前1時頃、行方が死亡。森は総括もしようとせず、全体会議で報告しても誰も驚かなかつた。省原案を文部省、自民党が了承。この年、私立
- 昼間、被指導メンバーはまき作り、洗濯、かまどづくりの相談など。植垣は銃の手入れ。この頃から、被指導メンバーの中では植垣が指揮を執るようになる。夕方、山崎らが戻る。
- 午後9時頃から、山田ら中央委員4人が遠山、行方の死体を埋めに行く。
- 森、植垣に山岳調査と党員への移行を申し渡し。植垣は、山崎を元気づけるため一緒に調査に行つつもりだったので、意外な人選に戸惑う。また一緒に党員になるのが前田ら3人であることを聞かされ、彼らを評価していなかつたので、不満を抱いた。

1月9日

- 中央委員会で、新たなベース候補地を群馬県沼田市の迦葉山方面と赤城山に決め、調査隊の人選。様名ペースが道路に近いことを気にしたため。夕食後、全体会議で、調査隊員が決意表明。森は6人の死を「政治的に孤立し軍事的に劣勢の我々が……統による殲滅戦を押し進め、その波及力によって、自然発生的な反米軍国主義の闘争を目的意識的な革命戦争に発展させ……るうえで回避することのできなかつた高次な矛盾」と総括。
- 植垣はこんなことでいちいち決意表明させる指導部に「合わないもの」を感じる。

1月10日

- 未明、迦葉山調査に行く植垣組（植垣と杉下リサ子）、吉野組（吉野と寺村雅子）が山本順一の運転で出發。初めての雪になる。坂東・寺岡隊も日光方面の調査に行くことになる。森は寺岡を、政治的傾向が官僚主義的スターリン主義であると批判、調査中に総括するよう言う。寺岡を、「そう思つていた」。植垣組、迦葉山近くの林道でテントを張り野宿。
- 森、永田、坂口は総括のレジュメ作りの準備。永田は毛沢東の「星火燎原」を読む。「毛沢東が各面運動から離脱を希望するものに路銀を渡して、いつか革新的の日となるよう願つた」というくだりに反芻を覚える。後に永田は著書で「(いんにまで)おかしくなつていた」と回想。

1月10日

- 国立大学授業料を3倍にする大蔵

1月7日 ●佐藤首相、ニクソン大統領と会談し、沖縄返還を5月15日とする共同声明発表。

1月9日

- 対闘争。

●植垣組、高手山付近を踏査。

1月13日

●森と山田が長い話し合い。言に反して女房と子どもを山に呼ばない森に対して、山田は批判を強めていた。

●植垣組、高手山の西側の山を調査。

1月14日

●森が電話連絡のため下山。中央委員は永田と坂口だけになつたが、何も会話せず。夕方戻った森は、車の運転をミスし電話連絡に間に合わなくさせた山本を非難。山本は激しく反論。

●青島、金子らは鉛を溶かして石膏の型に流し込む改造弾つくり。その最中、ハミングが出たが「総括を求められている者の態度か」と森にとがめられる。

●森、寺岡批判を根回し

●森が電話連絡のため下山。中央委員は永田と坂口だけになつたが、何も会話せず。夕方戻った森は、車の運転をミスし電話連絡に間に合わなくさせた山本を非難。山本は激しく反論。

●青島、金子らは鉛を溶かして石膏の型に流し込む改造弾つくり。その最中、ハミングが出たが「総括を求められている者の態度か」と森にとがめられる。

1月15日

●森は夕方戻った山田に、寺岡の総括の必要性を主張し了承を得る。

●植垣組、前日とは一転した激しい降雪に難渋。杉下は足手まといにならないよう必死に植垣についた。テントの中で家族の話、大槻の話などおしゃべりを楽しむ。

1月16日

●夕方、吉野組が戻る。吉野も寺岡批判に同調し、問題点を列挙した（2・17闘争で弱腰だった、向山の処刑では自分で手を下さなかつた、札幌から永田・坂口を上京させたのは安全かどうか確かめるためだつた等々）。

●山岳調査中の寺岡は、夜はもの思いに沈み込みがちで、坂東が話しかけるのもはばかられる雰囲、富士山などが一望に。素晴らしい眺めだつた。

1月17日

●植垣組、バスで沼田へ戻り高崎へ。「都会（高崎）を歩いていると、別の世界に来たような……感覚におそれ……同志たちを死に追いやつたことが夢のようだつた」と植垣は回想。

●夕方、坂東・寺岡組も帰着。森による寺岡批判が始まる。追及内容は①小嶋の死体を殴らせた

②杉下リサ子の離婚表明の受け止め方、③遠山を縛るときの「足を開け」発言等から始まり、答えるからまた問題点をえぐるという方法で長く続いた。夕食を取らずに続行。ある時点で寺岡は「殴つてほしい。恐れる気持ちがあるから、克服し、総括したい」と発言。森は冷たく「指示は受けない」とさらりと追及。永田のものはや中央委員内部の問題を超えているという指摘で、全体会議で追及することになる。森「お前のような傾向と最後まで戦い抜くぞ！」

1月18日

●午前1時頃、被指導部メンバーを起こし、寺岡問題を永田が説明。だが被指導部メンバーから発言がなく、吉野が補足説明。被指導部メンバーに對ては、寺岡と他の中央委員の指導に大差があることは思えず、何も言えなかつた。ついに坂東が「お前らひとごとのような顔をしているが、寺岡は革命を売ろうとしたんだぞ、永田さんや坂口さんを敵に売ろうとしたんだぞ」と怒鳴る。なんだん寺岡への怒りが高まり批判が出て、寺岡はみんなの前に引きだされる。植垣をはじめ被指導部メンバーが殴る。森の追及に寺岡は「坂東さんと調査に行つたとき、ナイフで殺して逃げようと思った」などと答えますますみんなの怒りが高まり、そのたびに殴打も激しくなつた。

●森は権力（国家権力。具体的には公安警察や機動隊を指すことも）との関係を追及。9・4闘争で寺岡に執行猶予が付いたことまでを問題にする。寺岡は関係を否定。森は永田に「寺岡の足にナイフを刺して追及する」と言い、大腿部にナイフを突き立てた。寺岡は呻いたり、上体をよじらせて耐えた。

●永田「驚いたがしつかりしなければならないと思いこの追及に加わることにした」。

●植垣「そんなことしたら、このあとどうするつもりなんだと思ったが、それだけ激しく追及す

1972

る必要があるのだろうと考え……」。

●寺岡はあくまで権力との関係を否認。森は坂東にも腕にナイフを突き立てさせた。血が敷いたシートに溜まっていた。

●「革命戦士として死ねなかつたのが残念」

●森は改まつたようだ大きな声で「おまえの行為は反革命といわざるを得ない。これまでと違う根本的な総括を早急にやるべきであるが、おまえにそれを期待することはとうていできないので死刑だ」と言う。「異議なし」とみんなが答えた。寺岡は目をつむり、じつとしていて動搖した様子は見せなかつた。森「最後に言い残すことはないか」。寺岡「革命戦士として死ねなかつたのが残念です」。

●寺岡獄の一の死（7人の死者）

●森、寺岡のセーターの胸をはだけ、アイスピックで心臓を突く。寺岡は絶命せず、森は次の刺突者を求めて全体を見回した。植垣が「どのみち殺されるなら早く殺してしまつた方がいいと考え、また、このような誰もやりたがらない任務は党のために率先してやるべきだと思って」アイスピックを受け取り、刺した。2度、3度刺して絶命に至らず、青島が代わる。延髓も刺すが事態は変わらず、結局、サラシを持ち出して、数人で首を絞めた。寺岡は7時頃によくやく絶命。死体は床下に移され、みんな一言も発せず、血をふき取つた。

●植垣「大変な闘争をやりきつたのだという奇妙な充実感があり、青島氏や山崎氏と『大変な闘争だつたな』といい合つた」。

●朝食後、全体会議。永田は「寺岡との闘争で共産主義化は、これまで6人との闘争より、さらに新しい段階、つまり敗北主義との闘いからテロリズムとの闘いに到達した」と説明。続いて森が話し、各自に総括発言を求める。その中で山崎順が「死刑の時、皆の後ろでウロウロしていたがあれはどうしてか？」と森に聞かれ、「自分の問題が寺岡と似ていたので、自分も殺されると思った」と答えた。山本、大槻、金子、植垣も問題点ありとされた。

●山崎への追及

1月19日

●午前中、被指導部はまき作り。植垣は大槻に「総括しないとピンチ……永田さんみたいに（女であることを意識せずに行動するように）なれ」と忠告。あまり話しかけると、大槻の立場を損ねるという配慮で、2人はあまり会話をしなかつた。

●迎葉山に移動を決める

●午後1時頃、名古屋に行つて伊崎昭子が戻り、「石田が逃げた」と報告。森が評価していた人物だった。ラジオで坂東隊の一員としてM作戦に関わっていた女性の逮捕を知り、迎葉山にベ

ースを移すことを決める。

●午前中から山崎は森から追及を受けていたが、石田逃亡のニュースが伝わり、追及が中断すると監視を受けることになる。作業から戻つた植垣は、山崎が縛られていたのでビックリする。

●午後、山崎は、総括の真偽を確かめるため偽の死刑宣告を受け、「先の7人のように醜い顔をしないで死んでいきたい」と言う。

●夜11頃、坂口ら4人は寺岡の死体を埋めに倉淵村に向け出発。

●山崎順の死（8人の死者）

1月20日

●引き続き山崎が総括要求を受ける。坂口が足にアイスピックを刺す役目を引き受け、何度も送巡のあぐく、実行。山崎は次々と追及され「逃亡を考えた」などと言いだし、青島や植垣も激高。山崎は「殺してくれ」と懇願。森は死刑を宣告。山崎はアジト情報の申し伝えをしようとするが、森が遮つたので、最後に「革命戦士として死にたかった」と言う。今回もアイスピック、ナイフでは絶命せず、絞殺となる。

●中央委員会と全体会議で山崎問題の総括で意思一致。大槻、金子らが森や永田から批判を受ける。金子への批判は「森に取り入ろうとしている」「主婦のように自分の権威を守り、下部を支配しようとしている」「子どもがお腹にいることをいいことにして、総括しようとしている」というものだった。吉野雅邦も「僕の方から離婚する。もう金子さんに足を引っ張られたりはしない」と発言。この追及は、深夜におよび森などが眠つてしまつたため、途中で終わる。

●午後11時頃、山田が新メンバーとして奥田秋一を連れて戻る。

●迎葉山ベースへ移動

1月21日

●迎葉山への移動の準備。建設部隊として植垣ら7人を選ぶ。その他、必要なものの買い出しな

ど。大槻と金子はベース建設に参加できず、残つて総括を言い渡される。
●森は奥田に入山入軍の決意を改めて求める。中央委員は会議の後、レジュメ作成のための読書など。

●ベース建設のために9人が迦葉山に向け出発。金子は出発する吉野の世話を焼き、森に「あれは女房の態度」と見とがめられる。残留の中央委員4人はレジュメ作成のための読書。

●建設部隊は、雪深い中でテント泊まり。

1月22日

●ベース建設のために4人はレジュメ作成のための読書。迦葉山へ坂口派遣を決める。

●夜、坂口ら5人は山崎の死体を埋めに行く。

●建設部隊は、ベース建設地を決め、植垣の指揮下、杉木の伐採や斜面削りなど。1メートルの雪の中での敢行だつた。4ハリのテントに寝起き。

1月24日

●朝、ベースに戻る坂口らの車が路肩の溝に落ちる。運転は山本。レッカーチー車を頼み、山田と奥田が高崎まで故障を直しに行く。夜、坂口ら4人は迦葉山へ。

●建設部隊は、本格的な作業に入る。小屋の大きさを横7メートル、縦11メートル。

●大槻と金子への総括要求

1月25日

●永田はレジュメ化のためのノート取り。赤軍派の歴史的総括も急がねばと思い森に要請したが、森は無反応。

●大槻と金子は必死に作業。金子は出産が近かつたが、山の斜面でまき捨ひも行なつた。森は夜、2人を順番に追及。大槻へは、「60年安保闘争に関する敗北の文学を好んでいたこと、渡辺や向山との関係など」「脱走した後の向山と会い、肉体関係も持つた」という話に永田は驚く。金子へは、「尾崎に格闘させたことを批判したこと、妊娠中の間に食事を皆と同じ量にしたこと、吉野との離婚を安易に宣言したこと、永田に反発し男を利用して自分の地位を確立しようとしている」となど。金子は反論し、批判を認めなかつた。

●建設部隊に坂口ら男性4人が加わり、作業がはかどつた。夜、坂口が、車の事故について山本に総括を求め、激しく言い争う。これまでの闘争について山本は「山崎の首を絞める時、物理的に手伝つただけだ」「CC（中央委員）の決定通りにしてきただけだ。これからもそうする」と言い、みんなの怒りを賣つ。坂口は様名ベースに報告に戻る。

●大槻、金子、山本を縛る

1月26日

●昨夜からの追及は明け方におよび、森は遂に大槻と金子の縛縛を決定。

●午前中、坂口が車の脱輪に端を発した山本問題を中央委員会に報告。森は縛つて殴るべきと指示。

●大槻は自分なりの総括を森に否定される。金子は「今の私じゃダメということですか」と森に。

●建設部隊は屋根、床、壁の骨組みを終え、屋根にトタンを張る。

●夜、坂口、坂東、吉野が山本を囲んで総括要求。すぐ暴力になり、被指導メンバーや総括しろと山本を殴る。終了後、逆エビに縛る。山本は無抵抗だつた。

●植垣にも総括要求

●坂口が様名ベースの状況を報告。大槻のことで、植垣に総括要求。植垣は「8名との闘争にかかわり、死刑や殴打を率先して行つてきたのであるから、それだけきびしく総括要求されなければならない……大槻さんが縛られた以上、私も縛られるべきだと思い、そのまま指導部のテントで正座していた」が、坂東が「寝ろ」と言うので横になつたが、明け方まで眠れなかつた。

1月27日

●迦葉山へ移動の準備。山田が高崎で銭湯に入つたことが、危険な行為として問題になる。

●森「金子が子どもを私物化することを許してはならず、……子供を（腹から）取り出す」とも考へて置かねばならない」と言う。

●植垣は作業に出るのをためらうが、他に指揮できるものがおらず、再び建設部隊のリーダーに。屋根のトタンばかりなど危険作業を総括のつもりで必死にやる。しかしメンバーとの間に溝ができるようを感じる。



序を「光の雨」の立松和平が執筆

●金子を殴る

1月28日
●金子への殴打が始まり、永田も参加した。金子は「何をするのよ！」と抗議。「私は山に来るべき人間ではなかつた」とも。森がベースを移動するとき逃げるなどと言うと「はい」と答えた。
●夜7時頃、青島を残して出発。運転、奥田秋二、助手席には縛られている山本の妻、森、後ろのシートには永田、坂口、坂東。大槻と金子はライトバンの荷台に寝かされた。山本夫妻の子供は坂口が抱き、銃はゴルフバッグに入れた。

●極左と否定された殲滅戦の決意

●奥田の落とした運転免許証を地元の獵師が拾つてテントに届けてくれる。その際、小屋の建設の様子を見られる。丹沢ベース跡を発見されたニュースがちょうど流れていたので、通報される可能性が高いと判断。吉野らは森たちが来るまで、警察が来たら銃による殲滅戦を開うと決意。
●森ら迎葉山ベースに到着。殲滅戦の方針に対し、森は極左（的方針）と一言のもとに否認。防守は無意味で移動すればいい、人民を誤射したら大変という批判だった。

●迎葉山のベースに入る

1月29日

●テントを引き払い、一部未完成の小屋に移動。高床のガッチャリした山小屋風だった。縛られている3人（山本、大槻、金子）は皆で抱ぎ、小屋の床下の柱に繋いだ。山本夫人が「総括してよ、総括してよ」と夫の胸に顔を埋めて泣いた。永田が総括しろと声をかけると、大槻はハイと答え、金子は無表情で全身で拒否を頭わにした。床下は寒かつた。

●山本順一の死（9人目の死者）

1月30日

●午前1時前、山本が死亡。中央委員の所に呼ばれた夫人は号泣しつつも、「私は闘つていいくよ」。

●中央委員が総括と死について説明。中央委員ではまた敗北死と確認されたが全体会議では説明なし。「同志の死に対する感覚が麻痺していた」（永田）。

●大槻節子の死（10人目の死者）

1月30日

●北アイルランド・ロンドンデリーで血の日曜日事件。カトリック系住民とイギリス軍が衝突し、住民の死者13名。3月24日、北アイルランド自治政府の停止、イギリスの直轄となる。

- 朝から大雪。被指導メンバーは午前中はトタン張り、午後はまき作り。床下の大槻と金子は寝袋に入れられているとはいえ寒そうだった。
- 午後、森は迎葉山に来てから大槻が総括の態度を放棄していると言いつ出す。永田も同意し、植垣や、大槻と仲の良かつた杉下にも「ちゃんと殴らさなければ」と提起。
- それを聞いた植垣は一瞬驚いた顔をしたが、「そのことから逃げることができないのなら先頭に立つてやろうと決意を固め」た。皆で床下に行くと、大槻は既に瞳孔が開き、コンタクトレンズがずれていた。森は「激しく総括するといつたのが聞こえたショック死」と断定。
- 植垣の回想「心の中に大きな空洞ができ」「新党が一段と味気ないものになり」「肉体的疲労が重なり」「殲滅戦が戦える日が一日も早く來ること……を待つしかできない人間になつてしまつた」。

●山田への追及

1月31日

- 東京から山田が戻る。森は自動車のカンパなどの獲得目標が得られなかつたこと、高崎で奥田を連れて銭湯に行つたことなどを追及。
- 金子のお腹の子どもの様子を、看護学生だった中竹、伊崎、経産婦の山本、医学部の学生青島が調べる。
- 被指導部は床作り、まき作り、資材の買い出しなど。
- 被指導メンバーは小屋の完成。植垣はソリ作り。
- 金子と子供の問題
- 森は「（金子は）お腹の子供を樅にとって総括しようとしていない。……組織の子供として金子から取り返さねばならぬ、いざとなつたら子供を取り出す」と言う。吉野は思い詰めた表情で聞いていたが、森、永田の「いざとなつたら私が取り出す」という発言に對し「僕もする」と表明。永田の提案で、子供のためにも金子を小屋に入れ、食事を与えることにした。

2月1日

- 坂口、坂東らは山本と大槻の死体を埋める場所を探しに行き、穴も掘つた。しかし途中、警官がたくさん出ており、森、永田、坂口の手配ボスターが至る所に貼つてあったので、埋めるのを延期。
- 被指導メンバーは小屋の完成。植垣はソリ作り。

●山田への追及2

中央委員会で森が山田に総括を要求。赤軍派時代の話が多く、永田には理解できなかつた。6カ月前には山田の復帰を喜んでいた森たつたが、追及は厳しく、山田は中央委員の辞任を言つたが、森は「我々が君を除名するのだ。一兵士としてマイナスの地平からやり直すべき」と通告。

2月2日

●植垣、青島、奥田らははこりが立たないよう、土間に丸太を敷く。

●山田は丸太敷きの倉庫へ行つて正座する。午後、山田は寒さに弱いから雪の上で克服させようと、雪台の上で正座を指示される。

●森は山田の処置を永田に相談。永田は殴打・緊縛の決断を求められてゐると思ひ、ショックを受ける。代わりに実践活動による総括に「〇・一パーセントの可能性をかけるべき」と主張。森は翌日、食事抜き、水一杯飲むだけで、まき捨ひするよう命令。

2月3日

●山田は朝、コップ一杯の水を飲むと、雪に覆われた山の斜面でまき捨ひに入るが、植垣のよう

に勝手が分からず作業は遅かつた。その上、坂東が見に来たときは態度が一変したので植垣は不快に感じた。結局、山田の実践には相変わらず官僚主義があらわれているなどの批判のもと、総括したとは認められず、皆で殴打の末、逆エビに縛られる。

●金子みちよの死（11人目の死者）

2月4日

●大雪。朝、金子の死が発見される。永田はその死を「金子は自分の行動を権力欲、しかも男性に依頼してそれを獲得する、という女性蔑視的な批判に屈せず、縛られても抗議の態度を貫いた」と回想する（大意要約編者）。

●中央委員は、金子に子供の私物化を許したのは自分たちが躊躇したからと自己批判。山田を土間に入れ、食事を与えることにする。

●吉野がはじめて山本夫妻の赤子を抱く。「吉野氏は金子さんの死に誰よりも打撃を受けていたのであろう」（永田）。

2月3日

●冬季札幌オリンピック開催、13日まで。ジャンプの「日の丸飛行隊」、女子フィギュアスケートのジャネット・リン、人気者に。ビン・ルパング島から、小野田寛郎元少尉も帰還。

▼解体部隊の9人のことは、榛名湖畔から渋川へ行くバスの運転手に強く記憶された。それは彼らが放つ悪臭のせいだつた。

▼中竹はタクシーで榛名湖畔まで行つたが、泣き声ひとつ立てない赤ん坊と生氣のない疲れている様子に母子心中者と間違われ、警察に保護されたのだった。身元が判明し、前日の榛名の不審火は連合赤軍のベースと知れる。

●部隊が3つに分かれ、それぞれの途へ

2月5日

●夜10時、活動資金と車のカンパ要請に森と永田が上京。留守部隊は坂口が責任者になつた。

●夜11時、坂東ら金子の死体を埋めに行く。

●山本夫人の脱走

2月6日

●朝10時頃、山本夫人脱走。坂口は警察に駆け込み子供を取り返しに来るのではと考え、数丁の散弾銃を組み立てる。山田に問うと「聞く」と言うので縛りを解き銃を与えるが、両手両足は激しい凍傷におかされ全く自由がきかず、銃さえ取り落とした。

●午後、警察は現われず、見込み遠いに気付いた坂口は迦葉山ベースを捨てるに。榛名ベース解体部隊との連絡に、中竹聖子に赤子を背負わせて向かわせる。深夜0時を過ぎていた。

●榛名では小屋を解体し終わり、板や柱を焼却。その火が望見されベース発見の糸口になつた。

2月7日

●坂口は沼田に出て、東京の森に電話するが、2、3時間試みてもつながらなかつた。青島と奥田と合流。ベースの荷物を近くの窪地に移す。坂口らは前橋でレンタカーを借りようとするが、店員に怪しまれて失敗。

●前田広造の脱走

●解体部隊が榛名から戻る途中、ベース周辺、渋川や沼田などのあわただしい動きに不審感を抱く。渋川のバス停で前田が姿を消す。

●午後7時、坂口ら残留組と吉野らベース解体部隊が合流。迦葉山からは山本夫人が脱走し、解体部隊からは前田が逃亡、榛名へ異常を知らせに行つたはずの中竹も行方不明と分かる。青島と奥田は東京でレンタカー調達に出発。坂口、吉野、植垣らは山田を連れて小屋を捨て、近くにテントを張る。ここでも小屋の廃材を燃やしたが、不審火として見られていた。

●朝、森と坂口がやつと電話連絡。森は坂口が山田の縛をほどいたことを批判。同時に「坂口君はこれまで永田さんに庇護されてきた」とも。永田は坂口に共産主義化を理解させるためには、

離婚した方がいいのかと考へはじめる。「仲の良い闘う夫婦と思つていたので、坂口氏との離婚を考えることに大変な苦痛を感じた」（永田）。

●午後3時、小型トラックを借りて青島らが戻る。坂口は妙義山への移動案に対し、植垣は同一県内ではなく福島の阿武隈山脈を提案するが、連絡を取り合える場所としては前に調査に行つたところがよい、と坂口は妙義山に決定（→153頁）。洞窟が多いという調査結果も理由の一つだつた。午後6時、青島ら4人は汽車で、坂口、吉野、植垣らは車で出発。

●「裏妙義」に移動

2月9日 朝7時、車の部隊と電車の部隊が妙義湖畔で合流。周辺を調べ、裏妙義の箱沢の洞窟をベースと定める。坂口は安中に行き、公衆電話で森に報告。

●（この日の森と永田の行動については、永田の著書には記述なし）。

2月10日

●洞窟に移動。入口は座つてやっと入れる程の狭さだったが、中は10人くらいが楽に入れる広さ。ただし天井は低く、中では座つていなければならなかつた。

●森と永田はシンバに会い、大口のカンバの約束を得る。テレビ、トランジスタラジオ、トランシーバーなどを購入。偶然、東急百貨店本店の側でプリントR・G派の竹内と会い、喫茶店で話す。3人とも指名手配の出ていた身だつた。

●山田零の死（12人の死者）

2月11日

●終日、洞窟の土を掘り出す。夕食後、山田の容態が悪化。

●森は新聞や雑誌を読む。永田はレジュメ作成を要請するが、はぐらかされた。

2月12日

●午前2時頃、山田が死亡。「総括しろだって、畜生！」が最後の言葉。坂口は横川のドライ

●森は電話で山田死亡を知るが、坂口が悲しそうに伝えてきたと批判。しばし論争になり、森は

自分と妻との関係を「闘争を媒介にしていたとはいえない。共に闘う者同士が結婚するのが正しいのだ」と総括。「僕と永田さんが結婚するというのが一番正しい」と言う。永田はそれなら早く坂口に言うべきと主張。

●永田、坂口と離婚し森と結婚すると表明

2月13日

●坂口ら3人が上京。坂口が森・永田に会う。森は、山田を解いたのは誤りと批判。

●永田は「坂口さんと離婚し森さんと結婚することにする。これが共産主義化の観点から正しいと思う。山田の縄をほどいた問題を必ず総括してほしい」と言う。坂口は「前から永田さんに助けられてきたが、もうそういうわけにはいかないことはわかっている。僕は頑張っていく」と答える。

2月14日

●坂口は永田に「片腕をもぎ取られたような激しい痛みを覚える」という。永田「本当はあなたが好きなの」。坂口「そういうことはもう許されないので」。その後、坂口は離婚について2人で話したいと森に断る。坂口は総括への疑問を表明。永田はあわてて「権力との攻防関係の激化の中で……共産主義化は必要」と答える。また坂口は、寺岡をスターインと同じく死刑にしたことについての話を出ないまま2人は分かれた。気持ちはそれ違いだった。永田は「私が共産主義化の闘いに貢献していることがわかつたうえ、坂口氏自身もまた森氏の総括要求に反対を表明できるだけのものがなかつたため」と回想する。

●坂口、妙義に戻る。

2月15日

●朝刊に、棟名ベースが発見され警察が捜査網を敷いたことが報道される。森と永田は、他のメンバーと一緒に、高崎を使わず小海線利用で大回りして妙義へ向かう。

●妙義ベースでは、朝、吉野と奥田が山田の死体を埋める場所を探しに行く。坂口を中心に全体会議が開かれるが、疲労が重なつていて低調に終わり、昼も眠りこける。夜11時頃、吉野ら4人で、山田の死体埋めに出発。この日、ベース隊は警察の動きを全く把握していないなかつた。

●吉野らは午前2時頃、下仁田山中に到着。植垣の足の凍傷は悪化しており、死体を運ぶとき、

▼警察が、新宿区の赤軍派救対「もつぶる社」号室などを捜索。

一足ごとに激痛が走った。地面は石ころだらけで掘り下げるのに時間がかかり、終わったときはすっかり夜が明けていた。帰路、新聞で株名ベース、迦葉山ベースが発見されたことを知り驚いた。ベースの廢材を燃やした火がきつかけになつたこと、自分が登山姿で歩いてたこと、などが載っていた。「不思議と不安感はなかつた。むしろ、反対に、それまでのやる氣のない気分が急速に吹つ飛んでいくような気持ちだった」(植垣)。

●朝、森と永田、軽井沢の駅に着く。軽井沢は警官の姿が目立つたが、横川にはなかつた。横川から妙義山ベースへ向かい、星頭妙義へ入る。妙義湖畔で車に見とがめられ、2人の男に尋問を受けた。明らかに私服刑事で、森は胸のナイフに手を伸ばした。しかし永田が「ダムを見に来た」と言い捨げると、刑事は住所を聞いて去つた。永田は直ちにベースに向かおうとしたが、森は山の中に逃げ込んだ。上空をヘリコプターが飛び始めた。結局山の中からはベースにいけないので、山に入った地点に戻るが、すでに車が増え道路に出ていなくなつていた。

● 刑事との遭遇

●朝8時頃、坂口ら洞窟に戻る。緊急避難を主張する植垣に対し、坂口は移動先に調査隊派遣を決定。植垣ら4人が調査隊に決まり、1時過ぎ、森に電話連絡に行く坂口を乗せて車で出発。妙義湖畔で2人の刑事に「アベックをみかけなかつたか?」と聞かれる(これは森と永田のことだつたが、気づかなかつた)。植垣が答えると、坂口は、停めずに行けと指示。奥田はあわてて発進。刑事たちは車で追つてきた。カーブではねかるみに突つ込み動けなくなる。この時点で刑事はやつと工事現場に電話を借りて走つた。坂口は、指名手配になつてない奥田と杉下には、このまま車で東京行きを指示。自分たちは洞窟に戻つた。

● 山越えルートを選択

●撤退ルートは山越えしかなかつた。東の雪がない方は警察も警戒しているだろうと、西の尾根沿いに佐久市へ出るコースを選ぶ。リュックに銃、拳銃、食料2日分、磁石、5万分の1の地図、毛布など最小限度のモノを入れた。坂口、坂東、吉野、植垣、青島、加藤兄弟、寺村雅子、伊崎昭子の9人だつた。「やつと日に見える敵が現われ、共産主義化の重圧、とりわけ多くの同志の死に耐えてきた苦痛から解放され、多くの同志を死に追いやつた責任をつぐなえると思つた」

(植垣)。

●朝、森と永田は見計らつて道路により、洞窟に向かうが、近付くにつれ、衣服、黒色火薬、トランシーバーなどほつぱり出されていて、皆があわてて移動したことを悟る。8時30分頃、ヘリ、警笛、警察犬が迫つたので、闘うことを決意。森「もう生きてみんなに会えないな」。永田「何を言つてゐるのよ。とにかく殲滅戦を闘うしかないでしょ」。この時の森を永田は「弱気の発言や消極的な態度に直面して、私は暴力的総括要求の先頭に立つて、それまでの森氏とは別人のように思えた」と書いている。機動隊に発見され、ナイフを振りかざして突入するが、4、5人の機動隊が拳銃を一斉射撃。威嚇射撃だったが、永田の耳の横を、銃弾の音がかすめた。「恐ろしさはなかつた。妙にときさまされた精神のみがあつた」(永田)。

●2人は警笛で殴り倒され、たくさん機動隊員が馬乗りになつた。「永田だな。あの男は誰だ。世話をかけさせやがる」という言葉が投げつけられたが、実際森の正体は警視庁の面割担当が来

2月17日

▼群馬県警は午前8時から警察官350人、警察大15頭、警視庁のヘリコプター2機の規模にて、道路を押さえておけば、長野県には逃げ込めないと判断した。

●永田洋子の「十六の墓標」の題名の由来は、以上の12人と、70年12月18日、革命左派の上赤塚交番闘争で死亡した柴野春彦、71年8月に革命左派の「処刑」の対象となつた早岐やす子、向山茂徳、そして73年1月1日、東京拘置所で自死した森恒夫の16人の死を綴つていることからである。

■山岳ベースで死亡した連合赤軍メンバー(享年・旧組織)〔下部組織を含む〕・死亡日時)

小嶋和子 (22・革命左派・72年1月1日)	尾崎充男 (22・革命左派・71年12月31日)
加藤能敬 (22・革命左派・72年1月4日)	進藤隆三郎 (21・赤軍派・72年1月1日)
山本順一 (28・革命左派・72年1月30日)	山田孝 (27・赤軍派・72年2月12日)
大規節子 (23・革命左派・72年1月30日)	小嶋和子 (22・革命左派・72年1月1日)
山田洋子の「十六の墓標」の題名の由来は、以上の12人と、70年12月18日、革命左派の上赤塚交番闘争で死亡した柴野春彦、71年8月に革命左派の「処刑」の対象となつた早岐やす子、向山茂徳、そして73年1月1日、東京拘置所で自死した森恒夫の16人の死を綴つていることからである。	

●警察は洞窟から尾根に向かう登山道を捜索し、ついで、群馬県警は彼らはまだ妙義山中において、道路を押さえておけば、長野県には逃げ込めないと判断した。

●9人は、登山靴の底が半分はがれ、歩きづらくなつた。凍傷による激痛も続いていた。懐中電灯を頼りに進んだ。何とか大遠見峠の標識を見つけたときは、一同ほつとした。

●森と永田の迷走

るまで分からなかつた。森の手配写真は学生風のひ弱さが残つていたが、捕まつた森の風貌は（土建屋の）オヤジさんといふ愛称そのものだつたのだ。

●カンパ活動で得た金のうち、343万円を森が、46万円を永田が持つていた。

●山道の入口まで連行されるとマスクがたくさん来ていて、一齊にシャッターが切られた。永田には「絶望などは全くなく……今後の闘いを全力でしていこう」と思った。しかし……この逮捕はこれまでと比較にならない絶望と混乱に満ちた困難な闘いの始まりであつた。

●坂口ら9人は、朝6時半まで歩き続け、明るくなつたので岩場の陰の洞穴に隠れた。朝9時のニュースで森と永田の逮捕を知る。指導者として信頼を寄せていた森の逮捕にメンバーは動搖したが、必ず彼らを奪還して殲滅戦をやり抜こうと思つた。坂口は永田との離婚・森と永田の結婚を皆に報告。つらい報告だった。ヘリコプターの姿と洞穴を爆弾で破壊しているような音（実際はガス銃を撃ち込む音）が響いてきたが、いずれも遠かつたので搜索圏外に脱出していると思つた。

●尾根伝いに成功

●夕闇が迫つた5時頃、洞穴を出る。岩をよじ登つたり、崖を這い下りたりの困難な歩行を、皆やり遂げる。銃をひもで肩からつるしていた。11頃、前方眼下にチラチラ灯りが見え、谷急山の尾根に出たとわかり、皆歓声を上げた。そこから尾根を下り、沢の水をむさぼり飲んだ。山道に出て歩行は楽になつたが、植垣の足の激痛は増すばかりで、他のメンバーに後れをとつた。和美峰に近づいたとき、ライトバンが停まつていたので林の奥に待避し、夜明けまで休息した。

●地図になかつたニユータウンに困惑

2月18日

●朝8時頃、進行方向に20名ほどの機動隊が検問を敷いていることが分かり、午前11時頃、別沢を登つて待避を開始。和見峠を見下ろすと検問体制が敷かれていた。午後1時半、尾根に登ると妙義山が見え、ヘリコプターが何台も旋回していた。権力の包囲網を脱したと思い、喜び合つた。尾根沿いに進み、夕方一休みして、暗くなつてまた歩くと、前方に街の灯らしきものが見えてきた。佐久市と思つて進んでいくと、きれいに街灯が並んだ道路にぶつかつた。地図にない道だつた。

●植垣らの逮捕

2月19日

●朝5時、植垣、青島らの4人が佐久（と思っていた）へ買い出しに向かうが、別荘地に入り込みウロウロする。7時、商店や交番のある別荘地の入り口に出る。バス停があり、軽井沢駅行きだつた。権力の包囲網の真ん中へ飛び込むことになるが、人の目もあり引き返せなかつた。駅には警官がいらず、とりあえず小諸に脱出し佐久から仲間と合流しようと考え、待合室に。●しかし風呂に1カ月も入つてなく、髪は伸び放題、山越えで服はぼろぼろの4人は、満座の注目的になつた。

●列車には男2人、女2人と別れて乗つたが、商店の女性の通報で、ついに警察が列車のデッキやホールを固めた。知らぬ顔をして新聞を読む植垣と青島に近づいてきて、仕事、現住所、名前などを職務質問。「下りてくれ」としつこく言う警官に対し、2人はついに腰を上げデッキに出たとたん、反対側に飛び出そうとしたが抱きつかれ失敗。8時5分、ついに逮捕された。女性2人も逮捕。

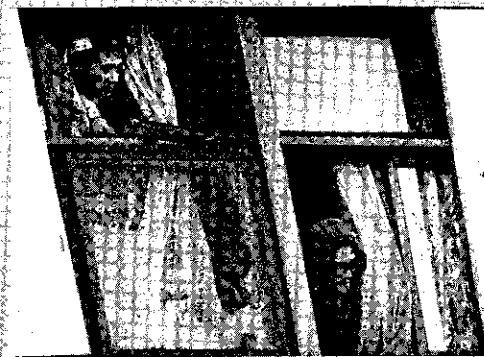
●植垣は「これでは何のために12人の死にかかわり、それに耐えてきたかわからない……坂口氏たちを危険な状態にし、せっかくの山越えを失敗させることになる」と殘念に思う。反面、「激しく疲労した自分のガタガタの体をやつと休ませることができる……長い困難な獄中生活が続くであろうが……新たな学習によって、消耗しきった気持ちを克服していくことができる」という期待もあつた。

▼森と永田の同時逮捕と、ア吉トから発見されたたくさんの文書から、警察は初めて両派が一括活動専従など。27歳）、永田洋子（共立薬科大卒後、労働運動を経て党活動専従。27歳）。

▼森と永田の同時逮捕と、ア吉トから発見されたたくさんの文書から、警察は初めて両派が一括活動専従など。27歳）、永田洋子（共立薬科大卒後、労働運動を経て党活動専従。27歳）。

▼午前中の搜索で、群馬県警は洞窟を発見。鉄パイプ、黒色火薬、空薬莢、寝袋、生活用品など4000点を押収。この中に、両腕、両足、脇腹などが切り裂かれた下着やセーラー、および糞が付いた男物のパンツがあつたことから、殺人事件担当の刑事は誰かが殺されていると断定。

▼軽井沢署に「連合赤軍軽井沢事件警備本部」、長野県警本部警備第一課に「連合赤軍軽井沢事件警備本部」設置。



4

あさま山荘の10日間

1972.2.19-2.28

銃撃戦の多角的な検証

視聽率89.7%！

警察側から見れば

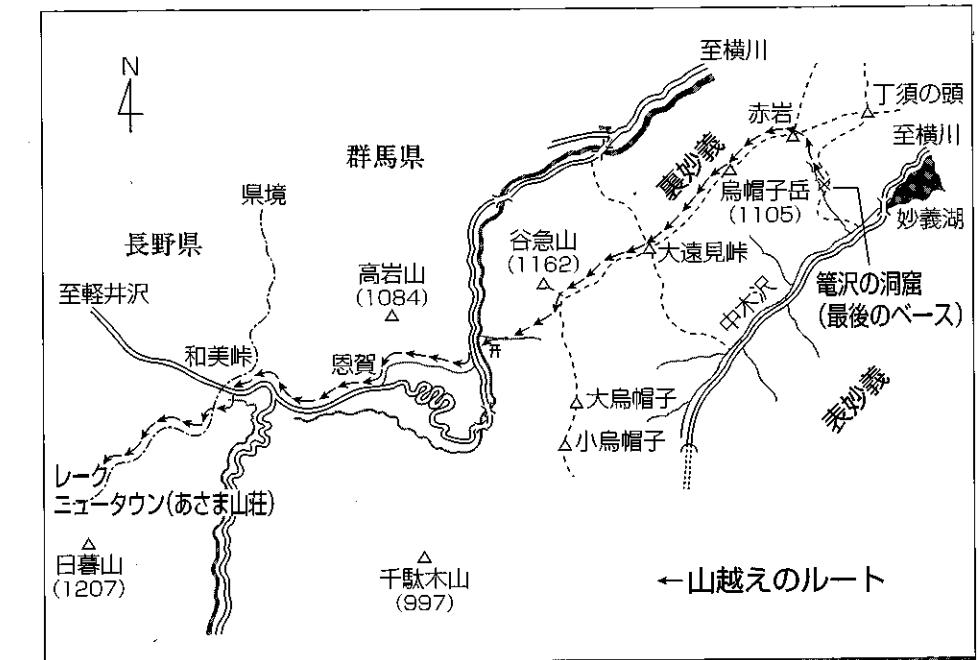
人質を取りながら何も要求してこない

奇妙な立て簾もあり犯。

そのとき山莊の内外部では、

さまでま人夕のさまでまな想い・葛藤が

写真：あさま山荘最後の日に外をうかがう連合赤軍（72年2月28日撮影）



「あさみ川莊」へと至ったルートと妙義山のスケッチ(下)。ともに植垣康博作成

●坂口らさつき山荘行

●坂口らは朝9時のニュースで植垣らの逮捕を知ったが、なぜ軽井沢駅で捕まつたのかわけが分からなかつた。長距離トラックを奪つて包囲網を突破しようと考へたが、誰も運転できる者はいなかつた。坂口は4人に10万円ずつ渡し、次の落ち合ふ場所を茨城県大子町の袋田の滝と決め、雪のかまくらを出た。近くの別荘地の中の1軒（さつき荘）に潜んだ。植垣らが悪臭やボロボロの衣服で怪しまれたことを知つて、入浴し荘内の服に着替えた。

●あさま山荘に侵入

●午後3時頃、かまくら跡から足跡を追つてきた長野県警の機動隊がさつき荘に来た。機動隊員は5人で、中から散弾銃を撃つと4方向に散つた。初めてここで銃撃戦となつた。15分くらい対峙したが、これでは取り囲まれるばかりだから5人は脱出を試みる。成功してまた走つて逃げ、600メートル離れた別荘に飛び込んだのが、あさま山荘だった。

●中には女性がひとり（管理人夫人・31歳）いた。坂口は銃を突きつけ別荘の様子を聞き出し、夫人を縛つた。吉野は夫人の拘束に異議を唱え、車で山中への逃げ込みを主張したが、坂口・坂東は夫人を人質にとって森・永田の解放と自分たちの逃走を要求する策を取ることにした。

●坂口はバリケード作りに北側のバルコニーに出たとき、初めて山荘が崖に建つていて、道路側だけ防御すればいいことに気づいた。1階から3階まで、雨戸を開め切り、テーブル、イス、テレビ、布団などを積み上げバリケードを築く。3階のベッドルームを拠点にすることとし、生活用品や食料を運び入れた。6人の客が滞在予定でもあり、おでんが用意されていた。

●警察は人数を把握できます

●夕方、久しぶりの白いご飯に皆、生氣を取り戻した。夫人に身分を明かし、たまたま逃げ込んだだけであるたは人質ではないと説明。夫人は「手足を自由にしてください。ここから出ていくと、そこでメンバーにリンチを加え、床下の柱に縛り付けたり、死体を雪の中に埋めたりしたことと思うと、正視に耐えなかつた」と回想する。

●坂東は夫人の用便には、ドアを開けたまま自分は後ろを向いて応じた。夜は坂口と加藤（次男）が眠り、坂東が夫人の見張り、加藤（次男）と吉野が外を見張つた。

2月20日（あさま山荘侵入2日目）

●山荘の表の道左右と、裏の崖下の道左右に、警察の特型車（特殊な装甲車）があるのを見つける。

●徹底抗戦の方針を固める

●坂口・坂東・吉野が方針協議。夫人を逃走や森・永田解放の取引材料に使うことも考えたが、前日人質ではないと説明したことが自縛となり捨棄。またベースでの同志殺害の件もあり、犠牲者への償いとして警察との銃撃戦を挑む方針が上回る。吉野は徹底抗戦なら夫人を解放すべきと主張するが、坂口は却下した（↓153頁）。

●食料品をすべてベッドルームに運び込む。米20キロをはじめ小麦粉、砂糖、味噌、コンビーフ、ミカン10個、カステラ、ウイスキー2本、ビール50本などがあつた。坂東は1ヶ月は持つと目算。●誰かが報道のヘリコプターに散弾銃を撃つ。ヘリの騒音は「いたずらに緊張を煽り、われわれの敵意を搔き立て」（坂口）た。

●夫人の縄を解く

●午後0時前、坂口が夫人の縄をほどく。人質ではないという表明を一貫したかったためと、ベースでの同志の縛縄姿と重なつて、罪悪感を覚えたためだった（坂口本では夫人の縄を解いた後、夫の呼びかけがあつたとある）。

●畳やスノコでバリケードを補強。夜、吉野が屋根裏の換気口を見つけ、銃眼に細工。

●夕食に遅れた加藤（三男）が炊きあがつた電気釜のふたをすぐ取ろうとするのに対し、夫人が「少しそのままにしておいた方がおいしいよ」と教えるなど、少し会話が交わされるようになつた。

▼警察は午後3時40分にはあさま山荘の包囲に取りかかつたが、何人が立て籠もっているのか、つかめなかつた。しかし、さつき荘で採取した指紋の中に吉野のものがあつたのが判明して、翌日、坂東の指紋も確認された。

2月20日

▼朝6時、警察が呼びかけ。「こちらは軽井沢警察署長です。山荘内の学生諸君、いつまで卑劣な行為を続けるのだ。銃を捨てて出て来なさい」。警視庁第9機動隊156名、神奈川県機動隊106名が到着（坂口本）。その後、22日、23日、25日、26日と警視庁を始め近県から応援部隊が現地入りし、総勢1400名の員員態勢となる。しかし東京や神奈川などの部隊は、経験のない寒さから、体調を崩す機動隊員が続出した。

▼前夜から夜明けまで、警察は説得活動を14回、繰り返した。

▼午後3時、警視庁第9機動隊長が山荘玄関前に、夫から管理人夫人への果物籠と手紙を置く（坂口らはこれに気づかなかつた）。

2月21日（あさま山荘侵入3日目）

●坂口が、夫人や盗聴器に対する警戒から、偽名の使用を提起。あさま山荘にちなんで、全員、山の名を名乗つた。

●午後4時頃、ラジオニュースで心理学者3人が来て意見を述べたと聞く。3人とは宮城音弥（東京工大名誉教授）、島田一夫（聖心女子大教授）、町田欣一（警視庁科学警察研究所長）。

●この日も管理人の親族による呼びかけが行なわれる。特型車の接近等がなかつたため、坂口らは「1発も銃撃はしなかつた」。

●坂口と吉野の母親の呼びかけ

●午後5時29分から56分まで、坂口の母・菊枝（58歳）と吉野の母・淑子（51歳）が現場にて説得活動。坂口らは全員ベッドルームで聞く。坂口の母「潔く武器を捨てて、Mさんの奥さんを出して……。代わりが欲しけりや、私が行きますよ。……」振り絞るような涙声だつた。坂口は「何も感じない」ということはなかつたが、親の情を警察が利用したとの怒りが強く、また、機動隊の特型車のマイクを使用したことがたまらなく嫌で、早く終わることのみ念じていた。そして夫人には「実家は花屋をしている。田舎だから村八分にされていると思う」と言う。

●続いて吉野の母が立つた。「まあちゃんと、もしもいるなら聞いてちょうだい。……」「あんたたち

のいちばん気持ちが誤解されるのはつらいんです。……社会のために身を犠牲にしてやるつもりだつたんでしよう。本当に犠牲になるつもりなら、銃がありながら弾丸がありながら、みんなの前に立派に出てきてちょうだい」「出してあげるときは、日に布を当ててやつてください。外は一面、雪ですから」。

●米大統領の訪中のニュースを茫然と見る

●午後7時、テレビでニクソン米大統領訪中の様子を見て、ショックを受ける。旧革命左派の革命論が毛沢東に負う部分が多くたため、自分たちの武装路線が根底から覆される思いがした。

2月22日（あさま山荘侵入4日目）

▼午後7時30分頃、1人の男が山荘に近づこうとして逮捕される。新潟のスナック経営者田中保彦と名乗つた。人質の身代わりになるつもりだったと供述。身代わり志願者は日に日に増え

ていたが、この日警察は田中を厳重注意で帰す。これが翌日の田中被弾につながることとなつた。

●吉野の涙

●朝9時、吉野の母・淑子の説得中に銃声。「お母さんが撃てますか」と淑子が言うと、また発砲があり、銃弾は淑子の乗る装甲車の車体に当たり跳ね返つた。母親の説得を聞いていた吉野が、早くやめてほしいと撃つたものだつた。吉野の目は潤んでいた。

●沈默

●警察は玄関先にトラメガを置いて政治的主張を訴えるよう要請。「人質を取りながら、何を要求してこない連合赤軍の不気味な沈黙に、警察は戸惑っていた。吉野は訴えるよう主張するが、坂口は「黙つて抵抗していくことがわれわれの主張になる」と拒否。しかし内面は、政治的主張と現在の状況に乖離を感じていたこと、同志殺害が早晚暴かれることは必至とみて、ひたすら徹底抗戦することが左翼的良心の発露と思つていたこと、が理由だつた。しかし敵から政治的主張を言ふといわれたことで「政治的敗北をビシビシと感じざるを得なかつた」。

●民間人の負傷

●正午近く、玄関先に妙な男が現われ「赤軍さん、赤軍さん。私は文化人です。あなたの方の気持ちは分かります。私は、××さんの身代わりに来ました」などと言いながら徘徊。坂口は私服刑事ではないかと疑いながら監視。男は玄関先の果物籠を持ち上げたり、ドアを開けたりした。吉野が散弾銃を天井に向かって撃つたが、後退せず。吉野はこれを聞けば聞くほど警官の偽装と思いこんだ。坂口も機動隊にウインクするなど男の拳銃に不審なものを感じ、遂に拳銃で狙撃。男はいつたん倒れたが、すぐ立ち上がり、フラフラしながら歩き、大柄を持つた機動隊員に保護される。ラジオが「撃たれたのは新潟市内でスナックを経営する田中保彦」と放送。

●機動隊員の負傷

●午後2時30分頃（久能靖「浅間山荘事件の真実」（河出文庫、以下久能本）では3時30分）、特型車の後ろに7、8名の機動隊が隠れながら接近。吉野が散弾銃やライフルでそのうちの1人の足や、救助に来た別の機動隊員の首筋に命中させた。

●夜8時10分、電源が切られテレビが消え、部屋が真っ暗になつた。以後、電気はずつと切られていたが、ガスと水道は止まらなかつた。テレビがこの時点で消された理由について、前述の高橋権は、山荘にいる「過激派」に、日中國交回復を見せようという意図だったのではないかと述べている。さらに、警察は山荘内部状況はあらかた把握できるにもかかわらず、10日間の時間を

▼田中は軽井沢病院に運ばれる頃から意識をなくし始め、上田市の病院で3月1日に死亡。

▼警察が「山荘の学生諸君。この人は警察官ではない。民間人だから撃たないように」と呼びかける。

かけたことについても、日中共同声明を見せつけるためという解釈をしている。

●坂口は直径1ミリそこそこの散弾粒を溶かして、2、3センチに作り替える作業に従事。

2月23日（あさま山荘侵入5日目）

●爆音作戦と睡眼妨害を意図した投石作戦の開始

●朝の気温は零下14度に。

●坂口がベッドルームでトランジスタ・ラジオによる情報収集と夫人の監視、坂東と加藤（次男）が屋根裏の監視、吉野と加藤（三男）は玄関ホール、管理人室、2階、1階の監視。

●午後4時30分頃、催涙ガス弾が2階風呂場の窓ガラスを破る。3階ベッドルームにもガスが充満。坂口は夫人にレモンとクリームを渡し、レモンは目の廻りにつけ、クリームを皮膚の露出部分に塗るよう教える。夫人は従つた。

●この日の発砲は3発。警察の狙いが偵察であることを察知して、弾の無駄遣いを避けた。

2月24日（あさま山荘侵入6日目）

●朝5時と6時に、管理人、夫人の父と弟、計3人が呼びかけ。夫人は「夫を安心させたいんです。ちょっとでもいいですから、バルコニーに立たせてくませんか？」と哀願するも、坂口は「そうしたら警察の勝ちになる」と拒否。夫人「電話でもいいんです。電話をかけさせてください」。坂口「あんたが大丈夫なことは、盗聴器を使って、警察はとっくに知っているよ。旦那にあ言わせているのは世論工作のためだよ」。このとき坂口は、「同志殺害の途方もない過去を背負つて、……ひたすら警察と闘うことのみが、左翼の良心を示す唯一の方法だと」思つていたので、要求や取引には一切応じないことにしていた。これは後の取り調べや公判などにおいても貫かれ、弁護士やマスコミ、一般人の一定の賛同は受けた。しかし革命左派としての論争やかたくなな態度などは、公判を通して、永田や植垣との対立を生むことになる。

●午前9時30分、板東の母が希望して説得に来る。板東は表情を変えず、黙つて聞いていた。

●この頃、坂口は風邪を引きベッドで横になる。他のメンバーの許可を得て半合ほど日本酒を飲んで体を温めた。あさま山荘で酒を飲んだのはこの時だけだった。

●放水が始まる

●午後0時、特型車8台が接近。坂口らも、昨日とは違う本格的なものを感じ、応戦体制に入る。玄関先、裏手に発煙筒が投げ込まれ、坂口らは散弾銃で特型車のフロントガラスめがけて発砲。

●運転手の顔が見えたが、動する気配はなかつた。

●坂口らが緊張して待つと、放水があつた。水圧で玄関のドアが破られ、バリケードとして積み上げられた椅子や箱、蒲団の一部が吹き飛んだ。放水の合間に大橋で防御した機動隊が玄関前に近づき、銃眼めがけて催涙ガス弾を発射した。坂口らは散弾銃で応酬。散弾が大橋にドスッドスッと当たるたびに大橋は押されて後退。はずみで後ろにひっくり返る機動隊員もいた。

●盗聴器の問題

●盗聴器が仕掛けられているのを予想し、大事な話は筆談で行なうこととした。坂口は後に新聞記事で、数百個の盗聴器があつたこと、警察は夫人の声をキヤッヂして、身の安全を心配していないなかつた、と載つていたのを読む。ただし「連合赤軍「あさま山荘」事件」（佐々淳行著、文春文庫、以下佐々本）には「指向性集音マイクをつけた竿をあさま山荘の窓に近づけたり、屋根に登つて煙突からコードにぶら下げた秘聴マイクをたらしたりやつてるのだが、××さんらしい声はとれてない」と記述されている。

2月25日（あさま山荘侵入7日目）

●坂口らは午前と午後の警察の強行偵察の際、警備車の助手席に上級職らしき風貌の人物を見、敵愾心を燃やした。

●放水とガス弾、発煙筒の攻撃が続く。

2月23日

▼午前7時をもって国内の人質事件の最長時間87時間を過ぎた（従来の記録は静岡県の寸又峡の温泉宿に13人の人質を取つて立て籠もつた金嬉老「41歳」の事件→68年2月）。

▼警察は重装備の強行偵察を実施。午後2時と3時の2回にわたって、東西両方向から特型車と機動隊30名（拳銃所持）をあさま山荘玄関に近づけた。4時には、2名の機動隊員が屋根裏の換気口そばの銃眼に向け催涙ガス銃を発射。

▼午前7時をもって国内の人質事件の最長時間87時間を過ぎた（従来の記録は静岡県の寸又峡の温泉宿に13人の人質を取つて立て籠もつた金嬉老「41歳」の事件→68年2月）。

▼警察側は新たに、警視庁特科車両部隊を投入。また、玄関前に土嚢を積み上げた。

▼警察側、心理的搔さぶりを狙つて2つの新作戦。その1は午前0時30分と5時に行なつた

「擬音作戦」。ブルドーサーや自動車のエンジン音、機動隊の号令や駆け足などを大音響で流した。

2月25日

▼警察側は新たに、警視庁特科車両部隊を投入。

また、玄関前に土嚢を積み上げた。

▼警察側、心理的搔さぶりを狙つて2つの新作戦。その1は午前0時30分と5時に行なつた

「擬音作戦」。ブルドーサーや自動車のエンジン音、機動隊の号令や駆け足などを大音響で流した。

2月26日（あさま山荘侵入8日目）

●前夜から朝まで、濃い霧が発生。吉野は霧に乘じて脱走することを提案し、排水管や浄化槽の位置などを確認するが、いずれも利用できるものではなかつた。

● 警察の新作戦（109頁下段参照）は30分ほど続いたが、坂口らは「子供だましの真似をしゃがって」とせせら笑つた。この後もくり返されたが「またか」と意に介さなかつた。新作戦の2つ目は、山荘の屋根への投石だつた。ベッドルームの屋根は絶え間なくガンガンと響き、「こたえた」。この日からメンバーは睡眠不足に陥る。

●夫人との約束

● 9時30分、管理人夫妻の両方の親族が代わる代わる呼びかけ。夫人はまた「顔だけでいいから出させて下さい」と頼むが、坂口は拒否。午後、夫人は「死にたくない」ともらす。坂口は夫人も警察の強行突入が近いと感じていると思う。また夫人は「私を楯に……しないでください」「あとで裁判になつた時、私を証人に呼ばないで下さい」と言う。坂口は両方とも約束し、後に彼の弁護人が夫人を証人申請しようとするのを、検察側の調書に同意してまで、拒んだ。

●寺岡の父の呼びかけ

● 夕刻、寺岡恒一の父が呼びかけ。5人全員がベッドルームに集まつて耳を傾けた。ベースで死刑宣告した寺岡の両親を目の前にして坂口は「言ひようのない胸の圧迫感を感じた」（後に寺岡の遺体が発掘されたとき、寺岡の父は「恒一があさま山荘にいなくて良かった」と語つたといわれる、と坂口は著書で明らかにしている）。

●夫人に中立を誓わせる

● 夜、坂口は夫人に「あなたを決して傷つけないこと、警察側にも我々の側にも立たず、中立の立場に立つてほしい」と話す。夫人は中立を守ると言つたが、「言葉だけのもので、内実が伴つてゐるようには見えなかつた」（坂口）。坂口の狙いは、夫人に自分たちの立場を説明することで、誠実な論理を明確にしておくことだつた。

●坂口、板東、吉野、亘の反目

● 夜、吉野が「任務中に板東が菓子をつまみ食つた。妙義山に移つた頃から坂口と板東には反発を感じてゐる。警察と闘つたときにこんな状態ではいけないと想つたが、「言葉だけのもので、内実が伴つてゐるようには見えなかつた」（坂口）。坂口の狙いは、夫人に自分たちの立場を説明することで、誠実な論理を明確にしておくことだつた。

▼坂口、吉野、寺岡の3家族が軽井沢の旅館で話し合い。

● 吉野は納得行かない顔をしていたが、とりあえず矛を収めた。坂口は著書で「吉野君とは特にフレーリングが合わず、ものの感じ方の違いに驚く場面が少なくなつた」と告白している。

2月27日（あさま山荘侵入9日目）

●異変を感知

● 朝はみぞれ。擬音の騒音や投石は前夜もあつたが、比較的眠れた。この日も、吉野の両親、寺岡の父の呼びかけ。午後、ラジオからあさま山荘関連の放送がなくなる。「連合赤軍事件に関する取材・報道協定」が警備本部とマスコミ各社との間で結ばれたことによるものだつた。

● 26、27日と警察の接近行動が形ばかりのものになつた。そのため夜、全員で警察の出方を協議。結論は出なかつたが、明日はこれまでにない接近活動があるだろうと予測。夜通し、激しい投石があり、全員眠れなかつた。

2月28日（あさま山荘侵入10日目）

● 朝5時、投石がやむ。夫人と加藤兄弟は眠つたが、坂口は極度の寝不足にもかかわらず、眠れなかつた。

● 投降勧告は繰り返し行なわれたが、そのたびに語調が激しくなつたので、坂口らは警察の強行突入を察知。坂口は急いで雑炊の朝食を作り、「今日は総力戦だ。……頑張つていこう」と檄したのち、配置に付く。坂口はベッドルーム、坂東と加藤（次男）は屋根裏の銃眼、吉野と加藤（三男）は管理人室と厨房。坂口は他の4人に鉄パイプ爆弾とマッチを手渡した。

2月28日

▼早朝、警察は山荘周辺に融冰剤を散布。特型車、機動隊員のスリップを防ぐため。この日の

警備部隊は「1635名（うち警視庁の応援部隊548名、その他特型警備車9輛、モンケン（ビルの解体に使う大型の鉄球。この日のものは1トンの重さがあつた）を装備した10トンクレーン車1輛、高圧放水車4輛。このうち直接山荘を攻撃するのは警視庁第2機動隊（2機）、第9機動隊（9機）、第7機動隊レンジャー部隊、特科車輛隊、長野県警機動隊の計382名だつた。

▼朝9時、警察は投降勧告。「山荘に××さんを監禁して立てこもつている犯人たちに告げる。……君たちは人民のために闘つていると書いているが、××さんを監禁していることは凶悪犯

と何ら変わらないではないか……警察はもう待てない」。

●最後通告

▼午前9時55分、警察「間もなく部隊は××さん救出のため、君らに對して実力を行使する。君たちが銃を持って抵抗すれば、警察はやむを得ず必要な措置をとる」と最後通告。

●10時2分、管理人室の銃眼からこの日初の発砲。前進する機動隊員の大楯に当たった。一斉にガス弾が応酬。銃撃戦が開始された。

●銃撃戦の開始

●坂口「ものすごい衝撃音と同時に、ベッドルームがグラッ、グラッと横揺れした。……モンケンがぶつかる度に床が大きく傾いで、立っていられない。……玄関横の壁は、わずか5分で破られた。間髪を入れず、穴めがけて放水が行われた。放水中もモンケンを使った破壊作業は続行された。玄関横の壁はほとんど壊された。管理人室とベッドルームが分断される恐れが出てきたため、吉野君と加藤（三男）君の二人が、ベッドルーム入り口の手前に後退してきた」。
●放水の水が、ベッドルームの坂口の「くるぶしから脛へ見るうちに嵩を増し、足元で鍋、箱、花瓶がぶかぶかと浮かびはじめた……奇妙な光景であった」。
●11時6分、階段は完全に破壊。モンケンは屋根を壊しはじめ、数分で「青空が覗くようになつた……直径50センチ程の鉄玉……威力の割に小さいな、と思った」。

●ラジオで情報収集に当たっていた坂口も、突入命令の発令を聞く。

突入命令

●坂口「ラジオで1人の被弾を聞き、吉野や屋根裏の坂東に「一人やつたぞ」と伝える。坂口には誰が狙撃したかわからなかつた（結局公判でも特定されず）。

●開いた穴めがけ、激しい放水と催涙ガス弾の打ち込みが交互に繰り返される。坂口らはガスが薄れるのをじっと待つた。

動開始。

▼11時17分、2機の決死隊、3階管理人室から山荘内突入に成功。同24分、9機中隊、1階に侵入。

●高見警部の被弾

▼11時27分、放水車に狙いなどを指揮していた警視庁特科車輛隊の高見繁光中隊長（42歳）が頭に被弾。土嚢からわざかに頭が出た瞬間だった。仰向けに倒れた中隊長の下で、白い雪が真っ赤に染まつた。高見警視は1時間後、上田市の病院で死去。

▼11時40分、長野県機が2階の壁を破壊して侵入に成功。

●大津巡査、被弾

▼11時47分、2機隊長・内田尚孝警視（47歳）が左目に被弾。2機の突入班が玄関に入つてるので、自分も行こうと土嚢を乗り越えた際の被弾だった（左眼球および左側頭部貫通銃創の重傷で左目は失明する）。これまた発砲者は裁判で特定されなかつた。

●内田隊長の被弾

▼11時54分、2機隊長・内田尚孝警視（47歳）が頭に被弾して倒れる。2枚重ねの大楯の横から顔を出していた。大楯のそばには隊長旗が掲げられ、内田は指揮者を示す白線が3本入つた防弾ヘルメットを被つていた。そのため屋根裏の銃眼のライフルが常に狙つているのを、特務隊員とは山荘正

●坂口「坂東君がライフルで狙い撃ちしたようである。しかし、彼は、狙撃の模様を詳しく報告してくれなかつた。私を信用していかなかつたためかどうか知らないが、大津巡査の時も私は報告を受けていない」。

●管理人夫人、必死の叫び

●高見警視撃たれて重傷のラジオ放送に接した夫人は「銃を発砲しないで下さい！ 人を殺したりしないで下さい！ 私を橋にしてでも外に出て行って下さい」と叫ぶ。

●坂口は上原中隊長の狙撃を、法廷で聞くまで、まったく知らなかつた。

●5人全員、ベッドルームに退却

●午後0時30分過ぎ、警察の作戦行動が休止したため、5名全員がベッドルームに集まつた。開いた穴に布団、箱、ベニヤ板、冷蔵庫などを積み上げ応急処置を施し、ご飯とコンビーフの缶詰の食事をとる。放水の水が引かないため、立つたまま食べた。食後、それぞれ決意表明。坂口は「この戦いを新党として、これまでの総括の闘いを踏まえそれを深化させるべく断固闘う」と発言。

●3階で上原勉中隊長、被弾

●11時56分、3階の厨房に侵入し指揮していた

面の小高い山上から銃口を監視する任務を負つていた。内田隊長は午後4時1分、上田市の病院で死去。

●モンケン攻撃、突然の停止

▼午後0時30分頃、突然クレーン車のエンジンが停止。警察情報は「エンジンに放水の水がかかったため」。佐々淳行著『連合赤軍「あさま山荘」事件』でもこの説を引用しているが、元日本テレビアナウンサー久能靖は著書『浅間山荘事件の真実』で、クレーン車を運転した白田弘之社長とモンケンを操作した義弟の白田五郎に取材し、「いい加減にも程がある」という警察批判を引き出している。「クレーン車は雨の中でも作業する。原因は水ではない。狭い操縦席に指示すると乗り込んできた機動隊員が、バッテリーのターミナルを蹴とばしたようでコードがはずれてモンケンが動かせなくなった。隊員がどけは修理できるが、数メートル先から銃

●拳銃使用の許可を聞く

●午後0時40分頃、ラジオで「警備本部は、拳銃を使用して犯人を逮捕せよ、との命令を出しました」と聞くが、坂口はこのニュースについて他のメンバーと話し合つた記憶はない。「私も他のメンバーも威嚇射撃だらうと思つていたためと思われる」と書いている。

で狙われていたため、動けなかつた」（大略、編者）。「五郎は、『水が入つたことにしておこう』という警察側の無線でのやりとりを今でもはつきり覚えているといふ（前掲書）。白田兄弟はNHKテレビ『プロジェクトX』でも、同様の説明をしている。

▼警察庁から警備本部に「なぜ鉄球による破壊作業をやめるんだ」と電話。全国のテレビ視聴者からも同趣旨の抗議電話が何十本もかかる。

●拳銃使用の許可

▼午後0時38分、警察庁が拳銃使用の許可。（適時適切な状況を判断し、適時適切に拳銃を使用せよ）。現場指揮の石川統括（警視庁警視正）は「E、Fの銃眼からライフルを発射している対象に対しても射角を考慮し、拳銃を適正に使用し、これを制圧検挙せよ」「談話室で散弾銃を所持している対象に対しては、状況により（以下同文）」と命令。

▼日本テレビ・小早川アナウンサー「家族や親戚十四、五人が集まつてテレビを見ていますが、Mさんだけは河合楽器の同僚八人と……テレビを見ていています……画面には目がいかず、ただ音声を聞いているだけ……放送が始まつてからひと言も話をしないということです」。

●夫についての報道

▼日本テレビ・小早川アナウンサー「家族や親戚十四、五人が集まつてテレビを見ていますが、Mさんだけは河合楽器の同僚八人と……テレビを見ていています……画面には目がいかず、ただ音声を聞いているだけ……放送が始まつてからひと言も話をしないということです」。

警視庁メーランの動き

●現場の停滞

●報道陣に発砲

●午後12時45分頃、坂口は破壊された穴から外を見ると、右側に望遠レンズで山荘を狙っている大勢の報道陣を発見。「人が命がけで闘っている時になんということだ」と拳銃を一発発射した。左側にも2発撃つた。約5分後「信越放送の記者がライフルで撃たれて負傷しました」というラジオ放送に驚く。

●13年後、坂口は小林カメラマンに謝罪の手紙を送り、母も弁護人と共に自宅に住むに行く。両方とも「ごろよくなじて下さった」。

●日本テレビ・久能アナウンサー「××さんは依然として判りません。現場はますます冷えこんでました。山荘にも外気が直接流れ込むようになつたため、××さんの安否が心配です。

表の動きはまつたく止まつてしましました」。

▼弾は小林忠治カメラマンの右足関節下を貫通、全治3カ月の診断だったが、足は曲がらなくなつた。

●警察作戦会議で28日中の決着を決める

▼「各隊は攻撃を一時中止し、現場を確保せよ」との命令が出る。本部車で野中本部長以下、幕僚や部隊指揮官が集まつて作戦会議。会議は約1時間、強行突入をこの日中に貫徹することを確認。既に山荘は水没しなつており、破壊されて外気にさらされているため、中止すると犯人も人質も凍死する恐れがある、犯人側に懲勢を立てなおす余裕を与える、隊員の士気を翌日高め直すのが難しい、などの理由だった。

▼その他、夫人救出のため4人の特別決死隊の編成、2機の攻撃正面を1、2階に、代わりに9機を3階に変更、などを決定。2機は隊長以下数名が撃たれ指揮系統が寸断されたため、交代となつた。

●機動隊の撤退

●この間に、坂口らベッドルームの入口に冷蔵庫などを移動し、バリケードを補強。作戦停止時間が長くなつたので、突入は順延か、など甘い観測をする。

●鉄パイプ爆弾を投擲

●午後2時40分、厨房に機動隊がたむろしているから爆弾投擲のチャンスだという吉野の進言で、坂口は鉄パイプ爆弾を手にベッドルームを出て食堂ホールへ入る。放水の水が凍り付いていて、ミシッ、ミシッと鳴る。ホールと厨房の間の配膳口はジュラルミンの大桶で防衛されていた。管理人室から「誰かこっちに近づいてくるぞ。拳銃、拳銃を取り」と声。かまわず近づくと、穴が開いていた厨房の天井へ鉄パイプ爆弾に火炎ビンで着火して投げ込む。「うひやー」「爆弾だ」の声。坂口がベッドルームまで逃げ込んだ途端、ズドーンと低くて腹にひびく爆発音。

●坂口は結果を知らなかつたが、後に「中村氏の怪我は……治療に5、6ヶ月かかり、その後も長く後遺症に悩まされたと証言しておられた。しかし、法廷でも、また自宅に私の謝罪の手紙をお送りした後、母がお詫びに上がつたときも、「気にしていない」といわれ、驚かされた……この言葉に自責の念を一層強めた」と書く。

●警察、行動を再開

●午後3時30分、屋根裏に放水を受けてベッドルームにまた水が溜まる。10分後、ガス弾が撃ち込まれ催涙ガスが充満。

●午後4時52分、また夥しい数の催涙ガス弾が撃ち込まれ、呼吸困難になつた坂口は怒ガラスを破り、顔を突きだして息をする。そのとき初めて眼前に浅間山が聳えていてことに気付き、あさま山荘という名に納得する。

●警察、拳銃を発射

●午後4時52分、また夥しい数の催涙ガス弾が撃ち込まれ、呼吸困難になつた坂口は怒ガラスを破り、顔を突きだして息をする。そのとき初めて眼前に浅間山が聳えていてことに気付き、あさま山荘という名に納得する。

▼午後1時40分、山荘1、2階から監視要員15人を残して機動隊が撤退。

▼警備無線「至急、至急、現場一から統括。状況報告。3階厨房室を確保していた2機部隊に對し食堂方向から爆弾」発投げられ、中村巡査部長他5人重軽傷。救護班を要請する。以上、現場一」(佐々木)。

▼日本テレビ・久能アナウンサー「中でまた負傷者がが出たのではないでしょか。今、急いで担架が前の方に運ばれています。……山荘の中から一人、隊員が運び出され……狙撃される恐れがあるため、楯を持った機動隊員たちが懸命に掩護しています。……屋根裏に向かつて再び放水がはじまりました」(久能本)。

▼2機4中隊の中村欣正分隊長(30歳)は右腕を碎かれ重傷。その他4人は鼓膜をやられ聴力を失う。

▼「急速に気温が下がり……足下から容赦なく寒さが上へ上へと忍び寄つてくる」(久能本)。

▼放水とガス弾で攻撃している間に、決死隊の4人や9機が厨房に進出。至近距離からの弾が当たるたびに、楯は衝撃で倒れそぐになる。少しずつバリケードを撤去した9機は、ついに食堂を制圧。

▼午後4時35分、警察は拳銃を6発発射(坂口本)。結局10日間で警察が使用した拳銃は22発で、内訳はさつき荘で長野県機6発、あさま山荘で警視庁16発(威嚇射撃)となつてている

●午後5時過ぎ、ベランダに機動隊が進出し、ガス弾を撃つ。坂口は拳銃で応戦しようとしたが、不発。

●同じ頃、ベッドルームの入口に機動隊が少しづつ迫る。ガス弾を援護射撃に、大柄で弾を避けながら、バリケードを少しづつ排除して近づいてきた。

セヨ

●ベッドルームの壁が破られる

●同じ頃、ベッドルームの壁が破られ、30、40センチの穴が開く。坂口らはその壁穴に向けて散弾銃を発射。ガス弾を撃たれると呼吸ができないので、ガスが薄まるまで発砲しなかつた。

●午後5時50分頃、ホールから放水。坂口の体に激しく当たる。震え上がるほど冷たかつたが、ガスが拡散して、呼吸は楽になった。水よけにベニヤ板を持ったが、放水ではじき飛ばされ、坂口らの体に直接放水される。部屋は真っ暗で、壁穴の向こうの機動隊の姿は見えなかつた。

●一斉に突入、検挙せよ

▼午後6時5分、9機の大久保隊長「一斉に突入、検挙せよ!」の命令。遠藤正裕隊員(24歳)が

穴から「わあー」と喊声を上げ、大柄を構えて穴からベッドルームに突入。ドンと銃声がひびき、遠藤隊員は右目を撃たれた。

▼冷蔵庫の陰で機をうかがっていた仲田小隊長は、2発連続発射して弾が切れたときをみすま

して、ベッドルーム奥にうずくまっている犯人に突進。大柄を振り下ろし、散弾銃とライフル

（佐々木）。

▼日本テレビ・浅見アナウンサー「会見場の動きも慌ただしくなってきました」（久能本）。

▼同・倉持アナウンサー「救急車が到着しました。もうすでにエンジンをぶかしています。新しい担架とピンクのタオルケット2枚、真っ白い枕が外に出されています。……前線本部前

にロープが張られ、機動隊員が報道陣に整列するように指示しています。こちらは準備万端整いました」（久能本）。

▼決死隊4人はベッドルーム入口から突入をはかるが、冷蔵庫が妨害していて入れない。冷蔵庫と壁のわずかな隙間には木材で固められている。

それを窓口で1本1本崩すが、中からの射撃でまもなくない。

●218時間の闘争

●管理人夫人、救出

●坂口「下段ベット東北隅に坂東君に守られるようにしていた夫人は、私が下敷きになつていて時、既に機動隊員に救出されてベッドルームから出ていったようだつた。ああ、××さんは連れて行かれるな、と何かわびしいきもちになつた」。

●ベッドルーム内は28人の機動隊員が、坂口らに折り重なるように馬乗りになり、銃を手からもぎ取ろうとする者、蹴られながら足を懸命に押さえる者、首を抱え込む者など。隊員たちは、同僚を2人も殺された恨み、憎しみがあり、気持ちを抑えきれない彼らの激しい拳が飛んだ。

●管理人夫人、救出

▼仲田小隊長は夢中で目の前の手首を掴んで引き出し、手銃をかけようとするが、手首が細い、体重が軽い。「私、ちがいます」と声。とつさに、その女に覆い被さっていた男に手銃をかけた。

▼決死隊の1人、日黒巡查部長は管理人夫人と思われる女性を背負つて脱出。そのまま救急車に向かおうとするが、山荘内に入つていた佐々淳行警察官・警備局付警務局監察官が「待て……確かに×××さんか確認しろ」。皆初対面なので戸惑い、懐中電灯で顔を照らした。「その女性は長時間水のように冷たい放水を浴びて全身ビショ濡れ、髪はざんばら髪で真青な顔色でブルブル震えている……よし、本人に聞くしかない……貴女は×××さんですか……その女性はうなずいてかすかな声で答える「はい、×××です」（佐々木）。

▼午後6時15分、現場情報班報告「人質救出。本人に確認した。×××さんに間違いない」。

●ベッドルームにはおびただしい数の空薬莢と、22口径ライフル1丁、散弾銃4挺、38口径拳銃1挺、実包595発、鉄パイプ爆弾3個、現金75万1615円が残っていた。催涙ガスや硝煙の匂いと、5人の体と衣服が放つ悪臭も残された。

●報道陣の前を行く

●坂口「直ちに山荘から外へ連れ出された。……投光器の光に照らし出された……体をくの字に曲げて歩かされた。……途中考えたことは、ああ、植垣君らもこの道を通つて軽井沢駅に行った

のだな」。

● 軽井沢署、坂口は留置所の房の中で、目をつむって正座した。坂口の回想「どんな形であれ、われわれは銃撃戦を闘つたのだ、という思いだけで気持ちを高ぶらせていたようだ。もちろんそれが『総括』から逃れる、ある種の自己満足であったことは否定できない」。「こうしてあさま山荘籠城事件は幕を下ろした。だが、われわれ連合赤軍の事件はこれで終結したわけではない。この後、しばらくして、山岳ベースでのリンチ殺害事件と印旛沼殺害事件の二つの大事件が発覚し、日本中を一大センセーショナルの渦に巻き込むのである」。

▼管理人の回想「(強行突入決行)了解を求めるためにこられた時からは、みつともないことだけはしてはいけないと……この後、関係者にはどうやつてお礼をして廻ればいいのだろうか……ヒスピリックになつた方がいいのか、それとも泣きわめかなければいけないものなのか……およそ当事者らしくないことを考え……待機している間に、なぜか気持の上で空白な時があり、強い孤独を感じた。その時、これは××のためのことではなく、戦争だなどフツと想えて、これは何なのだと憤懣やるかたない気持でいっぱいになつた」(久能本)。

●坂東の父が自殺

●午後6時過ぎ、朝からテレビを見ていた滋賀県大津市の坂東の実家では、坂東逮捕が伝えられる。父親(51歳)は席を立つた。しばらく後、首を吊つて死んでいるのを家族が発見。遺書には「人質にされた方には心からおわび致します。……残った家族を責めないでください」などと記されていた。実家にはこの日も、嫌がらせの電話がかかっていた。

▼同6時45分、軽井沢病院で夫人と母、夫が10日ぶりの対面。夫人は母に「心配かけてごめんね」。「國中の皆さんが大変心配してくださいましたよ」という夫にも「皆に迷惑をかけてごめんね」と答えるのが精一杯。冷え切った体に体温が戻らないため、7人の看護婦が交代で頭の先から足の先までマッサージを続け、2時間後にやつと体温がもりり、顔に赤みが差した。

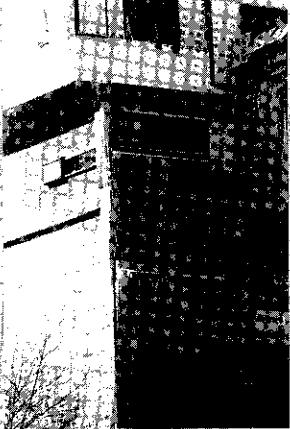
●テレビの視聴率は89・7%

▼この日、テレビの視聴率はNHK、民放合わせて史上空前の89・7%を記録。

▼5人が山荘の玄関から出でると、一斉にカメラのフランシュが吹かれた。報道陣や機動隊員から「人殺し!」「なんでおめおめ出てきたんだ!」と罵声。放水ですぶ濡れの彼らの体からは湯気が立ちのぼっていた。足下は裸足かびしあびしその靴下だけ。

▼TBS公安担当記者・田近東吾「(5人は)あらゆる物を拒絶しているというか:何も寄つけない感じの厳しい顔をしていた。極限を経験すると人間はこんな顔になるのか」(久能本)。

▼午後6時45分、日本テレビは9時間にわたる生中継をおえる。最後に映つたあさま山荘の軒先からは、放水の水が早くも氷柱となつて下がりはじめていた。



第5章

その後の「連合赤軍」

1972.2.28-

裁判とそれぞれの総括

森 恒夫……自死。

永田洋子……死刑囚。再審請求中。

坂口 弘……死刑囚。再審請求中。

吉野雅邦……無期懲役囚。

坂東國男……日本赤軍によって「奪還」。

植垣康博……27年の獄中生活を経て、いま「討論スナック」を。

写真：最後の日から一夜明けたあさま山荘。放水の水が長い氷柱となった

(72年2月29日撮影)

その日の連合赤軍

社会状況

●永田から森へ、口止めの返信

2月19日 ●永田は弁護士に対し、山で大変な闘争があったが、誰にも話してはいけないことで、弁護士にも話せない。ただ、森が話してしまわないか心配なので「森さんにあることは言つてしまふが、それを聞いて、黙つていてなんの反応もなかつた。

●この時、弁護士は警察官から「あの事件はひどいですね。死体がころころ出てきて」と話しかけられた。弁護士は大久保清事件のことかと思い、適当にあいづち。警察の採りだつたようだ。

●管理人夫人への報道被害

3月2日 ●管理人夫人が記者、カメラマンの3人による代表インタビューを受ける。

Q=犯人は脅かすようなことは言つたでしようか?
Q=あなたを人質だと言つていましたか?

Q=これが報じられると、夫人に対する世論が一変した。「遊びたいとは何事だ」「お前のために警官が死んでいるのに」。夫人は精神的に不安定になり、「怖い、眠れない」と訴える。

●自供の開始

3月5日 ●奥田秋一は「同志に暴行を加え、外に放置したところ死亡した」と自供。

3月6日 ●加藤（三男＝当時未成年）が、山岳ベースで12人の同志を総括として殺害したと話し始める。この自供を他の逮捕者につきけると、加藤（二男＝当時未成年）や軽井沢駅での逮捕者も認めた。

●森、裁判所に上申書を提出

3月7日 ●森は黙秘していたが、切り裂かれたシャツと遺体の写真を見せられ動搖をみせる。

（これは久能本による。高橋本では、いくつかの状況を組み立てて、森の自供はもつと早かつたのではという推測のもと、『同志殺し』を知つていた警察は、あさま山荘に籠もつた連合赤軍を

●上申書の影響

3月7日 ●森の「上申書」をきっかけに、黙秘していたメンバーも次々と自供することになった。

●永田「いかなる自供も許さなかつた『共産主義化』に反することであつた……（共産主義化への）確信の何かがその上申書を見てすぐガラガラとくずれ落ちるよう感じ」た。

●坂口「権力に対する森君の屈服とみなし、総括を主導した人物の重大な裏切りとみなした」。

●植垣「森は遺体を埋めに行つてないから、埋葬場所がどこなのかは知らない。それなのに遺体を家族に返すと言つてゐんだから、私たちに自供しろと言つてゐるようなものなのです」。

●山岳ベースから逃亡した3名も、森の上申書提出が報道されると、警察に自首。

●森は上申書を、警察や検察院ではなく、裁判所に宛てたことで、自供や屈服とは思つていなかつたようによつて「とても残念です」と泣きじやくる。

3月7～13日 ●12人の遺体が次々に発掘される。

●自供と手記

3月15日 ●金子みちよ、および自分と金子との間にできた胎児の写真を見せられた吉野は、完

默中だったが、「(この)子は死んでいない。(この)がで生きている」と叫ぶ。

3月24日 ●吉野が、アジトから逃亡した2人を殺害したという上申書を提出。

●坂口の手記

3月11日 ●車椅子での会見だった。「トイレ以外、一步もベッドルームから出られず、トイレもロープで縛られたまででした。また銃でいつ殺されるか分からぬ状態でした……それを自由

だつたように言つてとても残念です」と泣きじやくる。

3月7～13日 ●車椅子での会見だった。「トイレ以外、一步もベッドルームから出られず、トイレもロープで縛られたまででした。また銃でいつ殺されるか分からぬ状態でした……それを自由

だつたように言つてとても残念です」と泣きじやくる。

3月7～13日 ●12人の遺体が次々に発掘される。

●管理人夫人、2度目の記者会見

3月11日 ●吉野が、アジトから逃亡した2人を殺害したという上申書を提出。

3月24日 ●吉野が、アジトから逃亡した2人を殺害したという上申書を提出。

2月21日 ●ニクソン・米大統領、訪中。北京で毛沢東主席らと会談。
周恩来首相が平和5原則の共同声明発表。

4月7日 ●坂口は中央委員の吉野まで自供したことで「連合赤軍の良心を守つていく決意を獄内外の人ある人々に伝える」ため手記を執筆。逮捕されている連合赤軍と革命左派の全員に読ませることで条件だった（検察はこれを守らなかつた）。

4月4日 ●外務省「秘密漏洩」事件。沖縄返還に関する極秘公電を外務省事務官が新聞記者に漏らしたとして、事務官と記者がこの日逮捕された。74年に執行猶予付きの有罪判決。国

●手記の骨子は闘争の誤りの切開と森・永田への批判。「誤りの根本原因は……政治路線抜きの自らの軍事行動の統一のみに走った連合赤軍の結成」。

●永田の自供

4月11日 ●永田、自供を始める。検察官の「同志殺害は精神異常者の犯行ではなく、革命の問題だという主張をするために統一公判を要求しない」という論理にのせられ、統一公判要求の供述書を書いたことがきっかけだった。

●永田は共産主義化のために行なった坂口との離婚についても誤りだったと感じ、坂口に離婚宣言を謝罪し、「共に結婚と公判を闘つていきたい」と手紙を出す。坂口は離婚宣言については何も触れず、頑張つてくださいといふ内容に留めた返信を出す。

●坂東の自供

●3月中旬、取り調べで「卑怯だ」と言われた坂東は、「苦いものを口に入れたように顔をしかめで横を向いた」。初めて黙秘以外の反応を見せた瞬間だった。

4月20日 ●坂東が4月3日にスマモを要求し、この日、供述書を完成。「敗北が党建設と党の共産主義化実践の敗北なのか、さらに根底的には自らの思想（社会革命から人間革命）理論実践の敗北なのか……私のことで死を選んだ父親のことを考えますと残された肉親の方々の悲しみがどんなにかと思い、お詫び致します」。

●黙秘と自供

●「黙秘していたのは坂口さん一人……それができたのは、何よりもあさま山荘銃撃戦を闘つたから……その闘いが取り調べに対する強い意思を与える……同志殺害に対する罪悪感を和らげることもなった……実際、同じよう闘つた吉野さんは、この時手記は書いても自供はしていないかった。坂東さんも自供はしたとはいえ、形だけの調書の範囲を出なかつた」（永田）。

●森、膨大な自己批判書を書く

4月13～25日 ●森、「自己批判書」第1、2部を書き始める。両方で400字詰め原稿用紙50枚。坂口はこの「自己批判書」について、共産主義化など自分の指導の役割を忘れ、その結果永田に責任の一端を転嫁している、暴力の出所を把握していないなど「内容については承服で

民の知る権利と報道の自由の侵害」として話題に。

4月16日 ●川端康成が自殺。

●「観光名所」となつたあさま山荘

●あさま山荘のあつたレークタウンは、200本のボブラン並木は薪にするため切られ、道路は穴だらけ、飲料用の水はなくなるなど大被害。長野県警は迷惑料として100万円を払つた。あさま山荘は観光名所となり、観光バスのコースにも入るほどだった。別荘地への侵入騒ぎや、観光客のゴミ処理など、10年間、騒ぎは収まらなかつた。

5月15日 ●沖縄本土復帰、沖縄県発足。

5月26日 ●米ソ戦略兵器制限交渉（SALT I）調印。

●日本赤軍の圖書

5月30日 ●P.F.L.P.（パレスチナ解放民族戦線）と連携する日本赤軍の3人が、イスラエル・テルアビブのロッド国際空港で自動小銃を

きないが……森君の誠意は認めない訳にはいかない」。

●自己批判書は、7月20日まで書き継がれ、「銃撃戦と肅清」（新泉社1984年）として刊行。
●後に森は、7月まで書き重ねたこれらの自己批判を全面撤回する（→72年10月31日）。

●坂口、痛苦の第2手記

5月5日 ●坂口は取り調べで、金子みちよと胎児が横たわった遺体のカラー写真を見せられ、「あまりの惨たらしさに、思わず目を逸らした……ここで私は黙秘を維持できなくなつた」。

5月6日 ●坂口、供述調書の作成は拒否し第2の「手記」を書くが、「これは体面を守るためにしかな」く、「検事の取り調べに屈服したもの」だった。

●坂口、武装闘争路線に疑問

5月7日 ●坂口は5・15沖縄返還協定の発効、沖縄県の発足、田中内閣発足などの新情勢から、「武闘の条件があるようには見えず、新しい時代に入ったことを感じざるを得なかつた」。

●しかし坂口は、この時点では武装闘争に賛成していた。革命左派が武装闘争路線を取り、武闘清算派と論戦していくからだ。坂口は革命左派の準メンバーに復帰していた。

●永田、坂口に手紙

10月23日 ●永田は坂口に、改めて離婚宣言を謝り、連赤問題とは「反米愛國路線の放棄」が間違いいという、坂口の総括に対する反対を伝えた。坂口からは「私に対して『かつての感情』を持つてないこと、連赤総括を正しいと考えていること、革命左派として闘つていくことが記された手紙が返ってきた」。「共産主義化」の闘いについては何も触れてはいなかつた。

●永田、いつたん革命左派に立ち戻る決心

●永田にとって川島は「新党」結成の経過を検討することなく、「反米愛國路線の放棄」で片づけ……「共産主義化」の闘いに対しても、「エロ・グロ・ナンセンス」と切り捨てるだけだった。坂口には「共産主義化」の闘いがあつたことを分かつてくれるはずだという思いがあつた。

●しかし永田は、連赤総括のために「一旦革命左派の反米愛國路線の立場に戻」ろうと決める。「だが、それは……党派に従属しない個人として自立できるとの必要性を理解できなかつたことによるものに他ならない」（永田）。

●森、自己批判書を撤回

10月31日 ●森、「自己批判書」を全面撤回。「根底的な誤りに気付いて以降、自分が何故生きているのか、自分も死ぬべきではないだろうか、という考えに私がおぼれ、……眞の自己批判を貫

73年7月20日 ●ハイジャック

74年1月30日 ●シンガポール闘争（ベトナム空港襲撃作戦に向かう根拠地）

その年の連合赤軍

社会状況

徹し得なかつた所産であり、権力への敗北の証に他なりません」。

●公判期日100回指定

11月末 ●吉野と加藤（二男）が、統一公判へ参加を表明。

12月4日 ●東京地裁（山本裁判長）、73年1月から74年6月の間に、公判期日100回を指定。

被告団は、十分な防御ができないと、通知書の受取拒否・出廷拒否で闇う旨を表明。

●森と坂口の手紙

6～12月

●坂口「君が革命左派の反米愛国路線を攻撃するの構わない。だが、彼等に対して様々な中傷を加え、暴力の行使まで宣言したことは、どんな理由を付けても正当化できるものではない。このことをまず虚心に自己批判して欲しい」。

森「反米愛国路線を放棄したから肅清を引き起したなどといふ革命左派獄中メンバーの主張は絶対に受け入れられない」。

●坂口「のぼせ上がるのもいい加減にして欲しい。君は山岳ベースであれほど過酷な要求をメンバーに課しておきながら、獄中での態度は何だ！」『上申書』は書く、『自己批判書』は書く、自供はする。こんな筋の通らないことをした君が、他組織のことをむやみに批判する資格があるのか！」。

森「断固たる批判を待ちます！　君の批判については、一片の弁護もなく認めるべきだと思います」（12月27日付）。

●森から吉野雅邦あて「あたたかい手紙ありがとう……根底的な思想的敗北を切開し切ること抜きに一步も自己批判などありえないという原点を確立しようとしたのは、最近のことすぎません」（12月25日付）。

●森から塙見幸也あて「もしほくが絶望感の大きさに敗北したら、この手紙を公表して下さるか、この内容を御遺族、他の被告同志、同盟、革左に明らかにして下さい」（12月27日付）。

1973

●森恒夫の自殺

1月1日 ●午後1時52分、森、東京拘置所で自殺。廊下側ドアの窓側についている鉄格子にタオルを斜めにくくりつけ、足をシャツで縛つて体を投げ出す恰好でドアにもたれていたという。

●坂東あて遺書「ほくの『自己批判』は新党への道を擁護し、単なる『方法の誤り』とする」「唯銃主義などを）ほくは（革左の実践の）あとから論理化しているのです……ほくは党主義でそれを純化していくことに、そしてその間君（坂東）の意見を多く押さえてきたことに、肅清の道があつたと思います……それはほく自身のその論理化、純化、変質の決定的責任を抜きにしで発せられるべき問い合わせではないのです」。

●坂東あて遺書「元旦になつてしましました。いい天気です。山田さん（ベースで死んだ山田の未亡人）が入れて下さった花が美しく咲いています。／一年前の今日の何と暗かったことか。この一年間の自己をありかえると、とめどもなく自己嫌悪と絶望がふきだしてきます」。

1月2日 ●早朝より公判対策委など約20名が正門前に集合。弁護士が東拘置所長と会見。

1月3日 ●森の家族が遺体と対面。午後4時過ぎ、家族が火葬を延期し通夜を営むことを了承。

●同志にとつての森恒夫

●水田「森氏が死刑攻撃をはじめあらゆる非難、中傷に耐えながら、連赤問題を総括し自己批判しないでいくという困難な闘いから逃げたと思い、卑怯だと思われるを得なかつた」。

●坂口「森恒夫君は、意図して独裁体制をつくつたのではない。自ら創り发展させた共産主義化の理論により、理論上の專制主義者になつたのである。森君の『独裁』とは……この理論に招來された『独裁』のことであり、野心によるそれではない。それは結果であつて、目的ではない」。

●坂東「弱さ」を共にして、変革しあっていくというベクトルを持たない分、……負い目を感じている森同志をそこまで追いついた……『指導すべき』という建て前を彼におしつけ、責任をおしつけていく私のあり方が……弱音や本音をはかせない構造へと組織をおいやつた」。

●植垣「僕たちが遠慮しきぎたのではないか、森さんに問題をぶつけていく、そして彼がそれに答えていく、自殺なんとしている余裕はないという状況をつくつていったはうが良かつた」

●永田の過食症

●警視庁の取り調べの頃から永田は過食症になる。「刑事の取り調べ中にお菓子などを食べる」とができると、「自分でも驚くほど食べてしまつたが、それでも常に何か物足りず飢えを感じ……」トナムから撤退。

●前橋拘置監に移つてからは取り調べから解放され、食べ物を味わう」とめざるようになった

74年9月13日 ●ハーブ闘争（フランス大使館占拠）

75年8月4日 ●クアラ闘争（クアラルンプールの米領事館、スウェーデンの大使館占拠）

77年9月28日 ●ダッカ闘争（日航機ハイジャック）

7月 ●連合赤軍公判対策委員会、正式発足。

9月19日 ●神奈川県相模原市で、米軍の装甲車搬送が再開。機動隊と市民、学生が衝突。

10月13日～ ●分離公判の中竹聖子に懲役6年（10・13）、奥田秋一に懲役7年（10・31）、前田広造に懲役16年（12・6）、寺村雅子に懲役9年の判決。

9月5日 ●田中角栄内閣誕生。

10月17日 ●韓国の大統領、全土に非常戒厳令を布告。「維新体制」発足。

1月25日 ●アラ・ゲリラ侵入。

1月13日～ ●世話人に丸山照雄（日蓮宗僧侶）、小沢遼子（埼玉ペ平連）、藏田計成（評論家）など。

7月7日 ●田中首相訪中、国交正常化に合意。

9月25日 ●アラ・ゲリラ侵入。

10月13日～ ●分離公判の中竹聖子に懲役6年（10・13）、奥田秋一に懲役7年（10・31）、前田広造に懲役16年（12・6）、寺村雅子に懲役9年の判決。

1月17日 ●韓国の大統領、全土に非常戒厳令を布告。「維新体制」発足。

1月25日 ●アラ・ゲリラ侵入。

1月13日～ ●世話人に丸山照雄（日蓮宗僧侶）、小沢遼子（埼玉ペ平連）、藏田計成（評論家）など。

7月7日 ●田中首相訪中、国交正常化に合意。

9月5日 ●田中角栄内閣誕生。

10月17日 ●韓国の大統領、全土に非常戒厳令を布告。「維新体制」発足。

1月25日 ●アラ・ゲリラ侵入。

1月13日～ ●分離公判の中竹聖子に懲役6年（10・13）、奥田秋一に懲役7年（10・31）、前田広造に懲役16年（12・6）、寺村雅子に懲役9年の判決。

9月5日 ●田中角栄内閣誕生。

10月17日 ●韓国の大統領、全土に非常戒厳令を布告。「維新体制」発足。

が、人民救援会からの大袋の花林糖とボテトチップは、「感謝するよりも何よりも、膝に抱え込み、袋を破つてガムシャラにパクパクバリバリ……またたく間に一袋を食べ終えてしまった。しかし、一層物足りなく感じ、何か苦しかった」。

●公判と坂口の懲罰

1月23日 ●山本裁判長指定の「第1回公判」に被告・弁護団は出廷拒否。裁判長は写真による人定尋問を強行。以降、4月11日の条件付き指定取消まで、出廷拒否と出廷しての抗議が続く。

2月6日 ●初出廷。1年ぶりに5人が一堂に会し、みんなそれぞれに握手。坂口は永田に手を差し出さず、永田が伸ばした手に「ちょっと手を出すだけだった」(永田)。永田が革命左派の立場に立つと表明して以降も川島と坂口は「反米愛国路線に立っていない」と不斷に批判していた。

●公判で談笑せず、目をつむり腕を組むという坂口の態度は、弁護団や支援者からは「大いに評価された……ところが、公判闘争や総括方向になると……誰もが批判的だった」(永田)。

●「坂口さんはお山の大将になってしまった、統一公判を……革命左派の方針で動かそうとした……吉野さんに対し、「統一公判から出ていけ!」と迫りさえした」(永田)。

9月27日 ●第21回公判で、弁護団は弁護方針を「内乱罪」と表明。確信犯に適用される内乱罪をもって、各人の実行行為の内容にこだわらず、内乱への関わり方の度合いによって特殊な処罰方法で対処すべきという主張だった。この頃から審理の様子が報道されることが少なくなった。

●「坂口さんはお山の大将になってしまった、統一公判を……革命左派の方針で動かそうとした……吉野さんに対し、「統一公判から出ていけ!」と迫りさえした」(永田)。

赤軍派(プロレタリア革命派)に植垣、坂東と共に参加。「連赤問題の核心は思想問題である」という塙見を支持したもの。

●坂口は出獄拒否

7月 ●永田、「共産主義化」の問題に答えられない革命左派を離党。塙見が中心となって結成した赤軍派(プロレタリア革命派)に植垣、坂東と共に参加。「連赤問題の核心は思想問題である」という塙見を支持したもの。

●坂東、日本赤軍の「奪還」で出国。坂口は出獄拒否

8月4日 ●日本赤軍(和光晴生ら5人)、クアランブルのアメリカ大使館を占拠し、坂口、坂東ら7名の釈放を要求。日本政府は超法規的処置によって釈放。坂東らは出国したが坂口は拒否。坂口は日本赤軍に「武装闘争は間違った闘争との結論を出しています」。永田は当初、坂東のために彼の出国を喜んだが、やがて連赤の総括が一層困難になつたことを感じる。

●坂東はアラブで重信に会つたとき、「自分は同志殺害という誤りを犯した。査問委員会で裁いて欲しい」(大約編者)と申し出る。重信は「そんなつもりも資格もない。連赤の敗北と共に責任をとり、総括するために奪還した」と答えた。

1976

●公判メンバーの対立

8月9日 ●吉野と加藤(二男)が統一被告団を離脱し、分離裁判を選択。3者の対立の中で、

思つような方針で裁判に臨めないことが引き金になつた。

●この頃から植垣が永田を陰に陽に支えていく。獄中では資本論や英語、数学の学習など。法廷では私語やメモのやり取りが激しくなる(→153頁)。坂口は永田に対する個人攻撃を開始。

●植垣、出獄を拒否

9月28日 ●日本赤軍がダッカで日航機をハイジャックし、植垣ら9名の釈放を要求。植垣ほか

3月20日 ●熊本地裁、水俣病訴訟で患者側全面勝利。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

10月 ●第1次石油ショック。トイレットペーパー買いだめ騒ぎ。「省エネルギー」が流行語。

8月8日 金大中事件。アラブゲリラ2人が戦闘。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

10月 ●第1次石油ショック。トイレットペーパー買いだめ騒ぎ。「省エネルギー」が流行語。

8月8日 金大中事件。アラブゲリラ2人が戦闘。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

10月 ●第1次石油ショック。トイレットペーパー買いだめ騒ぎ。「省エネルギー」が流行語。

8月8日 金大中事件。アラブゲリラ2人が戦闘。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

7月18日 ●永田、坂口ら革命左派を匿つたとして6名が逮捕。

7月20日 ●日本赤軍(和光晴生、山田義昭など十数人を逮捕。公判中捜査当局でのち上級がのちに明らかになり、85年無罪確定。

10月6日 ●第4次中東戦争。エジプト・シリ

ア両軍とイスラエルが戦闘。

その他の連合赤

社会状況

3人は出国を拒否（→154頁）。植垣の拒否は、永田と塙見に「予想外のこと」だった。

1978

2月 ●永田と植垣は、塙見と共にプロ革派を離脱。永田にとって初めての党派活動の休止で「それは妙にまばゆく、不慣れのものだった」（永田）。

1979

3月 ●永田と植垣は、塙見が設立した「日本社会科学研究所（マルクス・レーニン主義・毛沢東思想」へ。連赤総括のため、研究活動に立ち戻るうとするものだった。

3月29日 ●東京地裁で分離公判組の吉野に無期懲役、同じく加藤（二男）に懲役13年の判決。

1980

7月 ●永田と植垣は、塙見と訣別。塙見が連合赤軍の敗北の原因を、永田の個人的資質に求める「これまでのどの批判よりも差別的……女性蔑視的」（永田）なものだったから。

●この頃、永田は瀬戸内寂聴に初めて葉書を書く。

1982

●1審判決で永田、坂口に死刑、植垣に懲役20年

6月18日 ●東京地裁（中野武夫裁判長）で統一公判組の判決。永田、坂口に死刑、植垣に懲役20年の判決。

●第1審判決（以下「中野判決」）は弁護側の内乱罪中心の組み立てを認定せず、「あくまで被告人永田の個人的資質の欠陥と森の器量不足に大きく起因」した山岳ベースでの処刑であり、その原因是「自己顯示欲が旺盛で、感情的、攻撃的な性格とともに強い猜疑心、嫉妬心を有し、これに女性特有の執拗さ、底意地の悪さ、冷酷な加虐趣味が加わり、その資質に幾多の問題を隠していた」永田の性格にあるとした（この判決は女性蔑視としてマスコミを賑わした）。

●あさま山荘事件については「多数人を殺傷して無法の限りを尽くした犯人は、醜態をさらすことを潔しとせず、勇者の最後にふさわしい名譽ある自決の道を取ると思ひきや、卑劣にも最後まで人質に隠れて我が身をかばい続け、おめおめと全員逮捕されて生恥をさらした」。

●判決と坂口の幻想

●死刑宣告に坂口は「全身から血の気が引いた」。坂口には、判決は無期懲役という感触がもたらされていたのだ。「死刑宣告の重圧は生半なものではない。最下等の人間に突き落とされた惨めさを味わった。全身がしこり、喋っている言葉も自分のものとは思えなかつた」と悩んだ。

1983

5月24日 ●永田、明暗の区別も付かなくなるほど目が悪化。眼底の乳頭浮腫、視野欠損、脳圧亢進が発見される。翌々日、CTスキャンで検査、松果体部に2センチ弱の腫瘍発見。脳圧亢進症状明。さらに2日後、導水管狭窄による脳圧亢進症の緊急手術、髓液排液のシャント手術を受ける。このときは「劇的によくなつた」（永田）が後に再発。

1984

7月14日 ●永田、明暗の区別も付かなくなるほど目が悪化。眼底の乳頭浮腫、視野欠損、脳圧亢進が発見される。翌々日、CTスキャンで検査、松果体部に2センチ弱の腫瘍発見。脳圧亢進症状明。さらに2日後、導水管狭窄による脳圧亢進症の緊急手術、髓液排液のシャント手術を受ける。このときは「劇的によくなつた」（永田）が後に再発。

1986

●控訴審も死刑判決

9月26日 ●二審判決。永田・坂口は控訴棄却、植垣は懲役20年。事実認定は1審に沿つたもの。

●坂口についての認定。「被告人坂口の反省の情には見るべきものがある……犯した罪の深さを感じし……国外からの脱出の呼びかけにも応ぜず……被害者、その遺族に自らの反省の情を綴つた謝罪の書簡を送り……真摯さは疑う余地はない」。ただし死刑判決は覆らず。

11月 ●この頃、数少ない永田の支援者の一人として、植垣の弘前大学時代の友人井村幸司が現われる（93年3月に2人は獄中結婚）。また、永田は植垣の勧めでボールペン画に熱中する。

1978

5月20日 ●新東京国際空港（成田空港）開港。
5月23日 ●初の国連軍縮特別総会開幕。

1979

2月17日 ●中国軍がベトナム侵攻開始。
12月27日 ●ソ連軍が、アフガニスタンの首都カーブルで宮殿、首相官邸などに軍事介入。

1980

6月22日 ●初の衆参ダブル選挙で自民党圧勝。
9月22日 ●イラン・イラク戦争始まる。

1982

6月22日 ●教科書検定で「歴史の実相を歪曲化している」など中国などから抗議があり、国際問題化。

1985

2月8日 ●東京・赤坂のホテル・ニュージャパンで大火災。33名が死亡。
2月9日 ●羽田空港沖に日航機が墜落。機長が「心身症」から復帰したばかりだった。
7月26日 ●教科書検定で「歴史の実相を歪曲化している」など中国などから抗議があり、国際問題化。

1986

4月1日 ●男女雇用機会均等法。
4月28日 ●ソ連・チエルノブイリ原発事故。
5月4日 ●第12回先進国首脳会議が東京で開かれ（東京サミット）。

5月20日 ●日本赤軍岡本公三、捕虜交換で釈放。
5月15日 ●東京デイズ二ーランド開園。
9月22日 ●G5で田高説導のプラザ合意。
11月19日 ●6年ぶりに米ソ首脳会談。

1986

4月1日 ●男女雇用機会均等法。
4月28日 ●ソ連・チエルノブイリ原発事故。
5月4日 ●第12回先進国首脳会議が東京で開かれ（東京サミット）。

12月30日 ●臨時閣議で防衛費予算のGNP
1.7%枠突破を含む87年度予算を決定。76年に三木内閣の閣議決定以来初の1.7%枠突破となつた。

その後の連合赤軍

社会状況

1988

●坂口の上告審の新弁護人は弁護方針を転換し事実を争う。1審は内乱罪を主張、2審で坂口は事実調べに消極的だったので刑事件としての認定が曖昧だった。発砲者・場所の特定、死亡警察官への銃撃は狙つて撃つたか否か、坂口は主にベッドルームについての銃撃を知らないこと等々。

1989

5月28日 ●坂口が歌作を始めて3年目に、作品が朝日歌壇に初めて掲載される。選者は坂口の名前に気がつかず選んだ。以後、坂口は歌作にのめり込み93年10月には「坂口弘歌稿」(朝日新聞社)出版。「わが胸にリンチに死にし友らいて雪折れの枝叫び居るなり」。

1990

12月9日 ●川島豪、胃がんで死去。享年49。

1991

5月 坂口が歌作を始めて3年目に、作品が朝日歌壇に初めて掲載される。選者は坂口の名前に気がつかず選んだ。以後、坂口は歌作にのめり込み93年10月には「坂口弘歌稿」(朝日新聞社)出版。「わが胸にリンチに死にし友らいて雪折れの枝叫び居るなり」。

1992

2月19日 ●最高裁判決。永田、坂口の死刑、植垣の懲役20年が確定。植垣はこの時点で既に20年間、留置所及び拘置所に拘束されていたため、植垣の残刑は5年半となった。

1993

10月6日 ●植垣、5年間の甲府刑務所暮らしを終え出所。27年ぶりの『婆婆』だった。

2000

6月 ●坂口、再審請求。

1994

6月 ●永田も再審請求。同志殺害については、殺意はなかったという主張を中心据えるもの。

1987

11月20日 ●最大の労働センター「連合」発足。

10月7日 ●昭和天皇死去。

1989

10月3日 ●東西ドイツ統一。

1990

1月17日 ●湾岸戦争勃発。

12月21日 ●ソ連消滅。

1991

9月17日 ●カンボジアへ自衛隊派遣。

1992

11月30日 ●田宮高磨、北朝鮮で死亡。享年52。

1995

3月18日 ●レバノン政府の国外退去令により、若生晴生(51歳)ら日本赤軍4名が日本に強制送還。岡本公三はレバノン亡命が認められた。

11月8日 ●日本赤軍リーダー重信房子が日本に潜入していく、大阪で逮捕。



第6章

解説に代えて

植垣康博ロング・インタビュー／
当事者による連合赤軍「いまだから語れること」

「我々は権力に負けたわけではない、
赤軍派内ノンセクト、の頃末、
「武装闘争」で目指そうとしていたこと、
同志殺害に至るメカニズム、

いま、同世代へのメッセージ……

「連赤」の見方を変える
元連合赤軍兵士による

問題発言、の数々。

写真：植垣康博氏。23歳で逮捕、27年間を獄中にあった。(02年6月13日撮影)

1998

11月20日 ●最大の労働センター「連合」発足。

1999

10月7日 ●昭和天皇死去。

2000

1月7日 ●南北朝鮮統一。

2001

1月17日 ●湾岸戦争勃発。

2002

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2003

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2004

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2005

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2006

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2007

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2008

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2009

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2010

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2011

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2012

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2013

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2014

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2015

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2016

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2017

1月17日 ●南北朝鮮統一。

2018

1月17日 ●南北朝鮮統一。

——2002年は、72年2月のあさま山莊の銃

撃戦から30年ということで、さまざまなものになりました。植垣さんもテレビに出演

するようになりました。植垣さんは「連合赤

軍当事者の証言」という単行本のシリーズを出

して、「危機管理の原点」みたいなことを書

いて悦に入っている元役人は論外として、「事件

の裏側にはこんなに感動的な人間ドラマがあり

ました」といった「感動物語」を意図的に作り

上げたり、深刻そうに「悲劇はなぜ起つたか」

といいながら、結局、時代や個人の資質に還元

しただけ、そんな感じを受けるものがほとんど

「ハイドショーハミ」に編集されているという

印象です。自分の自慢話・手柄話を並べた本を

書き、「危機管理の原点」みたいなことを書つ

て悦に入っている元役人は論外として、「事件

の裏側にはこんなに感動的な人間ドラマがあり

ました」といった「感動物語」を意図的に作り

上げたり、深刻そうに「悲劇はなぜ起つたか」

といいながら、結局、時代や個人の資質に還元

しただけ、そんな感じを受けるものがほとんど

だったよう思います。

それでは、「異常な連中が異常な」とをやつ

た」ということで片づけられてしまします。そ

うではないだろう、というのが私たちの考え方で

す。連合赤軍事件は、誰かに洗脳された集団が

引き起こした集団狂気などではないはずです。

かたつけですが、一連の「報道」に対し、違

和感のままなものを感じるところがありました。

どうして」とかといいますと、今の世の中の

動きは「ハイドショーハミ」されて伝わるという

ことができると思いますが、連合赤軍事件も

「ハイドショーハミ」に編集されているという

印象です。自分の自慢話・手柄話を並べた本を

書き、「危機管理の原点」みたいなことを書つ

て悦に入っている元役人は論外として、「事件

の裏側にはこんなに感動的な人間ドラマがあり

ました」といった「感動物語」を意図的に作り

上げたり、深刻そうに「悲劇はなぜ起つたか」

といいながら、結局、時代や個人の資質に還元

しただけ、そんな感じを受けるものがほとんど

も総括できないと思います。総括できない」とい

うなるかというと、また同じ」とが繰り返され

るだろうことになります。

そうしないためにも、連合赤軍の一連の事件

を歴史的・社会的な文脈のなかに位置づけて考

える作業が必要になってくると思います。「年

表」という形式をとったこの本は、そのひとつ

の試みのつもりです。そして、この作業を補強

していただく意味で、植垣さんにお話しをうか

べてきましたが、そういう解釈をしていた

のでは、いつまでたっても「連赤」も「オム」

ードになりましたが、そういう解釈をしていた

のでは、いつまでたっても「連赤」も「オム」

だったよう思います。

0 植垣康博・2002

お話しの前に年表とダブりますが、植垣さん

の「ごく簡単な略歴を紹介しておきたいと思いま

す。

植垣さんは1949年静岡県生まれ。67年、

静岡県立藤枝東高校から弘前大学理学部物理学

科に入学。69年の全共闘運動を経て、71年「兵

士」として赤軍派に参加。「M作戦」などの闘

争を担い、その後連合赤軍に参加。72年2月19日、軽井沢駅で逮捕される。82年6月18日、一審懲役20年の判決。86年9月26日、二審懲役20年の判決。93年2月19日、最高裁、上告棄却。

98年10月6日、約27年ぶりに刑期満了で出所――

一とこうになります。

まず、素朴な疑問からいきましょう。植垣さ

んは、なんで「テレビに出られたのですか？ 誤解を受けることも多々あるだろ」と想像できま

すが？

それは、党派の論理に絡めとられてしま

った全共闘運動を総括できないからで

はないかと考えられます。僕は「連赤」ま

でいつてしまつたおかげで、若いときにひ

たずら苦労させられたわけだけども、彼

らは今、僕と同じ苦労を味わっているのか

もしません。この状況を前にして、僕ら

というのは、「私は過去の問題を隠さず、

今までと同じように、これからもやってい

きますよ」と言いたかったからです。特に

僕と同じ世代に対してね。連合赤軍の問題

を伝える「アドルバーン役」という自覚

も、僕にはありますから。

僕ら「団塊の世代」は、企業ではリスト

ラ攻撃を受けたりしてひどい目に遭つてい

ます。彼らの多くは運動をやつてきたこと

を曖昧にしながら会社に入つてさんざん苦

労させられ、今度はリストラでクビが危な

い理由です。

僕が飲み屋をやることの意義を言うと、

1789年のフランス革命も「サロン」から始まつたじゃないか、という発想です。

全井闘運動でもほかの運動でも、人が集まる酒場は重要な役割を果たしている。飲み屋から何か新しいものをつくっていこうということですね。いわば「討論酒場」。飲み屋で議論を重ねていくうちに、社会についても運動についても新しい形が見えてくるのではないかと考えています。

立地がいいわけじゃなく、知り合いの連中も「飲み方で潰れる」なんて言うもんだから、「それならしつかりやりましょう」ということながら、今も続いている。飲み屋がどんどん潰れているこの「時代」で、カラオケもない、女性もない「バル」がなぜ続いているのか。それは、本来酒場が持っている人間関係の文化といったようなものがうけていると考へたいですね。

町内会の組長の仕事もしていますよ。テレビに出で「ワタシ、連赤のウエガキです」とやつたおかげで、かえつて町内の人たちと仲良くなれた。町内会の顧問をしている

自民党の県議も挨拶をしてくれました。これから運動は、コソコソやるんじやなくて、オープンにドーンとやっていかなければならない。そのほうがみんなを惹きつける力になるんじゃないかな。

しかも、住民基本台帳法や個人情報保護法等によって、國家権力による情報の集中管理が進み、個々人の管理がより強化されるなかでは、隠すこと自体が意味を失ってしまうわけです。それに対抗して生きていくためには、自分の主張や行動ができるだけオープンにして、監視することのメリットをなくしてしまったほうがいいと思っています。

佐々氏たちは、「あさま山荘事件」を警察側から描いた映画にかこつけて、警察の勝利を喧伝し、その当時を戦後警察の最高

時代と称賛したりしています。でも、「ホントにあなたたちが勝ったの?」と聞いてみたいですね。たしかに連合赤軍は、立派な「侍」です。僕との対談ならば応じるというよくなことを言っていますが、テレビ局がまじめに企画したら、はたして応じるかどうか大きいに疑問ですね。

【権力に負けたんじゃない】

僕がテレビなどに出たりして、オープンにやっていることが気に食わない人もいるようですね。たとえば佐々淳行氏は、「正論」(02年6月号)の石原慎太郎都知事との

1 テロとゲリラは違う

【テロとゲリラ】を混同している

【前は、ゲリラとテロが混在しているわけですよ。】

たとえば、僕らの部隊がやつたM作戦(注:一般的にいえば銀行強盗→45頁他)や爆弾闘争などの武装闘争は、テロを意図してしまったが、小泉首相はあいまいにしか答えなかった。そういう問題にも関わってきました。

連合赤軍の指揮していた行動は、ゲリラとテロが分岐するちょうど境目に位置していることがあります。その後74年の

「東アジア反日武装戦線」(→128頁)や西ドイツ赤軍の要人暗殺などは、純粹にテ

口を志向するものだった。しかし、その少

対談の中で、僕のことを「元懲役囚」と呼び、僕がテレビに出でることを「あつてのほか」とみなしています。まあさつきの

よくなメッセージを込めているので、当然といえば当然ですが(笑)。佐々氏は、「あさま山荘」でだいぶ稼いでいるようですが、

といえば当然ですが(笑)。佐々氏は、「あさま山荘」でだいぶ稼いでいるようですが、

といえども、どうも「あさま山荘」でだいぶ稼いでいるようですが、

ナの場合、「自爆テロ」という言い方をしますが、あれはパレスチナの民族解放闘争の一環として、それを脇から支えるという

かたちで行なわれるものです。もちろん、「自爆テロ」がいいか悪いかは別の問題ですが、「自爆テロ」によってしか反撃できないパレスチナの悲しい現実を忘れてはならないと思います。

これに対しテロは、大衆運動とは無関係に動く。01年9・11の同時多発テロは、アメリカによる侵略的な中東政策が背景にあるとしても、間違いなくテロなのです。実際の闘争との関連はまったくない。それどころか、ブッシュ政権がその情報を事前に知つていながら、その後の政策のためにあってやられたという疑惑が後から出てきたように、テロには不斷に謀略の臭いがつきまといます。しかも、たいていの場合、それは実際の闘争に打撃を与える口実に利用されています。

しかし今、ゲリラとテロを「つちやにしますが、なんでも「テロ」として一刀両断にする傾向がありますが、それではこの本質がみえなくなってしまうのです。

僕らの例でいうと、71年「6・17」明治公園の爆弾闘争（→47頁）なんかは微妙なことになるわけです。赤軍派の指導部が目

指していた武装闘争は、テロでしかできな

いわけですから、指導部は、あの闘争は党

の軍が独自にやった武装闘争ではないとい

うことで、あまり評価しながつた。だから、

党独自の方針のもとに、白河という田舎に

ある交番を襲つて警官を殲滅し拳銃を奪え、

なんて指令が出てきたわけです（注：70年

12月18日の革命左派による上赤塚交番襲撃とは、別的话。→71年8月56頁参照）。

現在の日本ではテロもゲリラも必要ないし、むしろ有害だと考えてます。たとえばテロについては、第二次大戦の前にヒトラーをテロで暗殺できたとしましよう。するとナチスは潰れたかというと、そんなこ

とを考えると、必要性は低かったと言わざる

をえません。ゲリラ戦は大衆運動を脇で支

持を招く原因のひとつになつたと思います。

さつきの白河の駐在所を襲つという指令が、結局中止になつたのはそういうことからです。僕らの部隊にはテロ指向はありませんから、はじめからやるつもりはなかつた。その後、僕らが南アルプスにベースを探し、「新倉ベース」をつくつたのは、米軍の北富士演習場から武器を奪つためだった（→61頁）。それをもつて72年の沖縄決戦に挑むつもだつたんです。ところが、そこに降つてわいたように、「共産主義化」の論理（→69頁）がやってきて、全部おじやんになつてしまつた。

しかし、今から考えると日本における階級闘争は、武装闘争を中心と考えるべきものではなかつたのです。それを、僕を含めた赤軍派は、武装闘争を中心とした階級闘争に変えていこうとしていた。そこに無理があつた。あの頃武装闘争が必要だつたか

ではない。ヒトラーの暗殺を乗り越えて、もっと強力なナチスの権力が登場したかもしれない。あるいは、危険な傾向があるといつて石原慎太郎を暗殺したら、もっと悪い状況になるのは容易に想像できます。テロは政治的に有効ですらないということなのです。

これに対しゲリラ戦は、中国革命戦争やベトナム戦争のように、時と場所によつては重要な役割を果たすことはありうるというこ

とです。

指導部のテロ指向

僕らの部隊は、ゲリラ戦をやろうとしていました。しかし、指導部が出してきたい

わゆる「銃による殲滅戦」（71年10月頃→61頁）という方針は、それとは相反するもの

だつた。それは大衆運動との関連性のまつたくない、「党の闘い」「党のための闘い」

考え方が強固にあつたのです。

たとえば、赤軍派が軍に「兵隊さん」を徵兵するでしょ、するとそういうメンバー

は地方の大学で指導的な役割を担つていた人がほとんどだつた。そうした指導者をひ

っこ抜いちやうものだから、地方の運動は壊滅的な打撃を受けたんです。

また、僕らの部隊は横浜の「寄せ場」寿町に拠点をつくつていたんですが、指導部のほうでは勝手なことをやつたといつて、

僕らは「勝ちを求めて戦争」した。

僕らは召喚させられてしまつた。これもまた、寿町の運動にとつては打撃でした。寿

町は劣悪な条件で働く日雇い労働者の町で

文字通り暴力的な対決もあるわけです。で

かなり混乱させたし、学生の結集軸を潰す役割も果たしました。もちろん、当時の全

体にとっては、マイナスの役割を果たしたといえるでしょう。赤軍派の誕生は戦線を

引き寄せたわけですが、日本の階級闘争総

てではない。ヒトラーの暗殺を乗り越えて、もつと強力なナチスの権力が登場したかも

しない。あるいは、危険な傾向があるといつて石原慎太郎を暗殺したら、もつと悪

い状況になるのは容易に想像できます。テロは政治的に有効ですらないということなのです。

なつてしまつ。

そのへんがテロとゲリラ戦の大きな違いです。党中央のほうは革命戦争をやるうとしながら、赤軍派単独の革命戦争でしかないがゆえに、その意図に反してテロへテロへと向かつていった。しかし、現場の僕らの部隊はゲリラ戦をやつていこうとしていたし、実際、大衆のさまざまな形の支援や協力ぬきに闘うことはできなかつたのですから、赤軍派という党派的な立場にこだわらないゲリラ戦しかできなかつた。こうした指導部の意図と現場の考え方との違いは自覚されていませんでした。それが軋みはじめていたなんだけれど、指導部のテロ的闘争は大衆の支援や協力がないため、「精神力」が必要だということになり、「共産主義化」の論理がダーリーと入つてきました。現場はそれに圧倒されてしまったのです。

——テロに純化せざるをえない、というのは、赤軍派が権力に追いつめられていたからというふうなものがあつたのです。その間で四苦八苦しめていたのが、坂東國男さんです。彼は指導部からは責められ、僕ら現場からは年中突き上げをくらつていました。もっとも寿町から召喚されるまで、僕らは指導部の方針なんぞろくに知らなかつた

ことですか？

——より、それは「党派の論理」によるものほうが大きいと思います。

党派の論理とは

たしかに、僕らの部隊以外の赤軍派の部隊は、M作戦に失敗したりしてどんどん潰れていましたが、僕ら自身は追いつめられた感じはもつていなかつた。むしろ、僕らは手を広げていたし、人数も増えていた。なんで増えたかというと拠点（大衆との接点）をもつていたからです。そのところ

に、僕らと赤軍派指導部との対立関係のようなものがあつたのですが、僕らは苦していたのが、坂東國男さんです。彼は指導部から責められ、僕ら現場からは年

中突き上げをくらつていました。もっとも寿町から召喚されるまで、僕らは指導部の方針なんぞろくに知らなかつた

運動にまつたくといつていいほど関係ない芸者さんでした。僕らの部隊の強さはそういうところにあつたかもしれませんね。赤軍派とは関係ない人が入つていて、部隊は処刑されそなつた人は女性で、左翼運動にまつたくといつていいほど関係ない芸者さんでした。僕らの部隊の強さはそういうところにあつたかもしれませんね。赤軍派とは関係ない人が入つていて、部隊はもできるでしょう。

思い、自分の存在位置はどこにあるのかみえてこなくなつたんです。誰とも口をきかなかつたこともありました（→60頁）。

でも、「消耗」の後、居直っちゃつたんですけど、森さんが指導した部隊はすべて失敗しました。この事實をもつと强硬に主張していれば、違つた結果になつていたのかもしれません。僕は方針に反することをしようつちゅうやつてたわけだから、何度も懲罰を受けるわけです。2ヶ月の禁酒・禁煙（笑）。やっぱ「整風運動」とか、そういう「作風」つてよくないよね（笑）。やがて、「笑い事では済まなくなるのですが……。

71年の秋、「共産主義化」が始まる直前まで、僕らはそつやつて自分らの独自性を守るとしていたわけですが、抗しきれなくなります。その後はしばらく「消耗」の連続でした。徒労感といいましょうか、

——植垣さんも、党の「無謬性」（注：党は間じていた違和感とか、対立とかは、直感的で漠然としたところが多く、「共産主義化」とグワッ！と言われるとい、「ジ無理」もつともです」になつてしまつた。

その後の事態の進行に対しても、何もできなかつたというのが正直なところです。もつとも、当時僕らが指導部に対してもうけていた感覚とか、対立とかは、直感的で漠然としたところが多く、「共産主義化」とえは党派の活動家にとつては当たり前のものです。党で方針をつくり、それに基づいて部隊が動き、またその結果をフィードバックするというやり方を間違つていて

といつことがあります。指導部との連絡も、人づての間接的なもので弱く一度切れてしまつた。そのため、自分たちで方針を立てやつていかざるをえなかつたし、ずっとスケジュールを立て、独自に行動していくとしていたんです（→44頁）。

だから、僕らの部隊は処刑しないで済んだ。指導部から「〇〇を処刑せよ」という命令が来たら、「〇〇を処刑せよ」という動きがあつても、現場としての判断は違うわけで、それを回避できた。組織から脱落するように仕向けて逃がしてしまい、正式に指令されたときにはその人間はいなかつたわけです（→53頁）。その頃までは、僕らの部隊の独自性は保たれていたといつと

とじつことがあります。指導部との連絡も、人づての間接的なもので弱く一度切れてしまつた。そのため、自分たちで方針を立てやつていかざるをえなかつたし、ずっとスケジュールを立て、独自に行動していくとしていたんです（→44頁）。

——植垣さんも、党の「無謬性」（注：党は間じていた違和感とか、対立とかは、直感的で漠然としたところが多く、「共産主義化」とえは党派の活動家にとつては当たり前のものです。党で方針をつくり、それに基づいて部隊が動き、またその結果をフィードバックするというやり方を間違つていて

そうですね。その原型は日本の軍隊にも

ウム」も、行動の中身は違つても「どれだ

あつただらうし、戦前の日本共産党的「査問」もそう。連合赤軍の「敗北死」は、共産党スパイ査問事件のときの「ショック死」

と同じ論理で、問い合わせに耐えられなくて「勝手に死んだ」ということじよ。日本軍では暴力に対する恐怖心をなくさせるため捕虜を殺させたり、しきぎがあつたり、

アメリカの海兵隊でも過酷な状況をつくりて、相手を殺すことを含めた暴力に対する恐怖心を克服させようとする。

それは集団狂気ではないし、単純に誰がにマインド・コントロールされて行動したわけでもない。そこには集団を支える強固な論理構造がある。

——あえて「ド」を言いますが、もし、森氏のポジションに植垣さんがいたら、どうなつていただでしょう？

もし僕が兵士ではなく党的局員で、

ような気がするんですね。

——話を持った當時に戻しますが、個別の闘争について、文字通り「命をかける」ことがあるのはわかるよつた気がするんです。でも、その向こうというか、革命というものをどれだけ具体的にイメージされていたのでしょうか。

「とりあえずぶつ壊せば、後は皆がなんとかやつてくれるだらう」という発想でしたね。将来の展望がないままに武装闘争をやつても、死にきれないというか、自分をすべて犠牲にできないという気持ちも当然あるんですが、それは「敗北主義」であるとか「日和見主義」であるとか、そういう評価になつてくるわけです。そして「共産主義化」しなければならないという論理がでてくる。

「共産主義化」が素晴らしく思えた理由

森さんの立場だつたら……当時の僕だつた

ら、同じことをやつてしまつた可能性が高いですね。ただ、兵士ではなく政治局員にいるということはある意味で「出世」だから

れなければならないわけで、僕という人間がそつなる可能性はなかつたとはいえるで

しょう。

——組織内の個人の行動が免責されるわけではありませんが、組織のポジションが行動させたり、発言させたりするというメカニズムがある

ように思えます。その意味では、「連赤」でも「オウム」でも戦前の「共産党」でも、どうい

う集団でもいいのですが、どんな知的な人間であつたとしても、暴力的な総括に至つてしまふ共通した論理構造のよつたものがあるのかもしれませんね。

共通性というと「おもてなし」と言えば、組織間の競合関係があると思います。「連赤」も「オ

ー」「新左派」など、組織間に競合する組織もあると思うのです。「有事法制」やらなんやらもそうでしょう。そういうとき、「拒絶反応」だけで大丈夫かという疑問で

す。組織に対抗するしつかりした個性をもつていないと、簡単にコロッといつちやう

僕自身のことと言えば、「植垣は決意してよくやつている」と言われたことはあつたけれど、実際、「この後、たとえば沖縄決戦の後どうなるんだろう」と考えると

「後の人々に託すしかない」、そう思われる見えなかつた。そういう意味（革命までの展望はない）での運動の行き詰まりは感じていた。

だから、「共産主義化」がでてくると、素晴らしいものに思えたんです。ひょっとするとそれは、新しい展望をつくっていくものではないか。あるいは「共産主義化」によつて、新しい「諸関係」を自分たちのなかにつくりだすこと、それが展望を拓く、とにかくつくりだすこと、それが展望を拓く、といふことですね。

僕も「植垣は女にもてたいがために闘争をしている、そこを総括しろ」と言われた。「ちょっと違うんじゃないか」という思い

「総括します」と一応答えてしまつ。僕は、「言えなかつた。あの頃は、理論を体系的に

爆弾でも、M作戦でも、ベースの設営でも、

のよつたものはなかつたわけじゃないけど、

けラディカルになれるか」という点で競つていた点があつたと思ひます。会社だつて、ライバル社との厳しい競争が、そういう論理を招くと「う」とが言えるでしよう。しかし、そういう構造は共通してあるにしても、じゃあ全部同じように扱えるかと、いうと、そうではない。それぞれ、社会的な文脈、歴史的な状況のなかにおいて考えなければなりません。

今の若い人たちは、危ない状況におかれていると思う点があります。僕らは組織というものに染まりやすい部分をもつていて、ですが、彼らは組織に対し拒絶反応を示しています。それはいいのですが、彼らをあります。それで、彼らをあらわす組織に統合しようという動きが必ずや出てくると思うのです。「有事法制」やらなんやらもそうでしょう。そういうとき、「拒絶反応」だけで大丈夫かという疑問で

す。組織に対抗するしつかりした個性をもつていないと、簡単にコロッといつちやう

きらんとやつてきた圧倒的な自信があつたから、それ以上追及されなかつたけれど、違和感を論理的に展開することはできなかつた。

ですから、違和感はずつとあつたわけです。共同軍事訓練が終わつた後、遠山さんと進藤君と行方君に総括要求をしていくわけだけど、その後、森さんたちは「榛名ベ

ース」に移つていく。僕ら赤軍派の兵隊だけが、南アルプスの「新倉ベース」に残るのですが、「いつまでこんなことをやつて

るんだもつた」と話していた。

そんなときドーンと、新党結成という事態になつたんですよ。（→74頁）。もちろん新

党には大きな違和感より、自分の総括をどうするかと、いう問題のほうが先だつたんです。「俺た

ちに無断で決めやがつて」という思いはあつたけど、自分の問題が負い目になつて、

つたしね。訳のわからない「理論」とくに赤軍派の「理諭」を語らざると、わからなるのは自分が未熟だからとか、「自己否定」が足りないからと思つてしまつたんです。

こういう言い方もできるかもしれません。

60年代前半の左翼は、「貧しい農民・貧しい労働者」という概念を基盤に運動を作っていた。ところが60年代後半の全共闘運動は、いわゆる中産階級の子弟が担つていたわけです。するに、それまでの農村的文化を中心とした革命運動に、商品経済の中心の市民的な文化がもたらされた。農村的文化を感性にもつた人たちにとって、市民的な文化をもつ人間は、物凄く異質で、いつみれば「ブルジョワ的」に見える。その「ブルジョワ性」をなんとかしようというのが、「総括要求」「共産主義化」の論理だったともいえるわけです。

特に古い左翼党派の感性は「清く・貧しく・美しく」という「清貧の思想」ですから、全共闘などの新世代の人間は、「だら

——このへんでも、植垣さんが「兵士」となっていく過程をうかがつてみたいと思います。植垣さんの左翼運動の出発は民青（注：日本共産党の青年組織「民主青年同盟」の略称）ですよね。そこで、「民主青年同盟」の幹事長になります。幹事長になり、赤軍派の兵士になつた。でも、「貫して「クラスの代表」という意識は変わりませんでした。「左翼活動家」とか「職業革命家」という意識を持つたことも、持とどもしたこともあります。

民青に入つても、「クラスの代表」の意識のほうが強く、民青に違和感を感じましたね。自治会の代議員の会議があると、民青はこういうふうに発言しろといふ方針を出すわけです。でも僕は、クラスの代表に悩んでいたんです。だから、そういう問題に関わること自体、「あえて」するものではなく、「学生運動」をしているという意識もあまりありませんでした。

民青に入つても、「クラスの代表」の意識のほうが強く、民青に違和感を感じましたね。自治会の代議員の会議があると、民青はこういうふうに発言しろといふ方針を出すわけです。でも僕は、クラスの代表に悩んでいたんです。

までの意見のほうを優先させてしまった。

すると、「クラスの意見をこちら側にまとめる」と文句を言われる。選挙では、思想動向調査のようなものまでやる。クラスの仲間に誘われて、対立する全共闘系のデモに出たことがあるんですが、「なんでトロツキストのデモなんかに出たんだ」と言つて詰られる。そのときトロツキスト批判の文書を山のように渡されたんですが、読んでもみると、全共闘もいいことを言つているように思えた（笑）。

共産党の選挙路線とか、69年の東大全共闘潰しのゲバルト部隊に動員された友達の話を聞いたりしているうちに、どんどん嫌になつていつた。それこそ「查問」もされてしましね。

決定的だったのは、69年4月、全共闘の前身の集団が「入学式粉碎闘争」を起こすのですが、このとき、多數派だった民青系が彼らをボコボコにぶん殴つた。どちらが

い」社会主義觀をもつていたので、現実とのギャップに悩みながら、「共産主義化」の論理を受け入れていったのだと思います。

ですから、僕なんかは半分「清く・貧し

3 「兵士」植垣のつくれられ方

——このへんでも、植垣さんが「兵士」となっていく過程をうかがつてみたいと思います。植垣さんは、これをきつかけに民青を離れ、全共闘運動に関わっていくわけです。いろいろ資料を読んで、「一生懸命勉強しました」。それからは、クラス討論会や代議員大会、学生大会などで民青との論争を活発に行なつていきました。論争は、民青派の自治会執行部の基調報告をめぐつて行ない、僕らもそれに対抗する形で独自の基調報告を出したりしました。主な議題は、やはり大学のあり方や大学自治の役割で、そのなかで学生大会などで民青との論争を活発に行なつていきました。論争は、多くの学生の支持を得ることになりました。

そんなどもあって、僕らは学生の支持を得ることになりました。政府の政策、特に安保体制下でのベトナム戦争への加担に反対していく立場を確立すべきだと主張しました。しかも、政府が大学闘争を警察力によつて潰そうと、「大学臨時措置法案」を持ち出してきたこともあつて（69年8月→29頁）、僕らの主張は、多くの学生の支持を得ることになりました。

そんなどもあって、僕らは学生の支持を得ることになりました。政府の政策、特に安保体制下でのベトナム戦争への加担に反対していく立場を確立すべきだと主張しました。しかも、政府が大学闘争を警察力によつて潰そうと、「大学臨時措置法案」を持ち出してきたこともあつて（69年8月→29頁）、僕らの主張は、多くの学生の支持を得ることになりました。

そんなどもあって、僕らは学生の支持を得ることになりました。政府の政策、特に安保体制下でのベトナム戦争への加担に反対していく立場を確立すべきだと主張しました。しかも、政府が大学闘争を警察力によつて潰そうと、「大学臨時措置法案」を持ち出してきたこともあつて（69年8月→29頁）、僕らの主張は、多くの学生の支持を得ることになりました。

くなつてきました。というのは、機動隊の暴力に対しても対抗していくべきか、大学を封鎖したあと、大学闘争をどの方向にもつていつたらいいのか、わからなかつたからです。だが、赤軍派との接触があつたからといって、ただちに赤軍派に参加するということにはなりませんでした。そういうことにはなりませんでした。そうしているうちに僕は、69年10・21国際反戦デーの東京でのデモでパクられ、大学本部封鎖の件などもあって、1年2カ月ほど拘置所に入つていました。

【ゲリラ戦をやる「赤軍派内ノンセクト】

拘置所生活は、展望を見失つていた僕にとっては、新たなエネルギーを補給する場になりました。特に重要なことは、赤軍派との関係が深まつたことでしょうね。赤軍派に対しては、69年の11月5日に大菩薩峠の福ちゃん在で一斉逮捕されたことから(→33頁)、関心を失つっていました。ところ

が、70年3月の「よど号ハイジャック」(→36頁)で、赤軍派はなかなかやるじやないかと、赤軍派への関心を改めて持つようになつた。それで赤軍派の機関誌が手に入つたこともあって、軍事の勉強を始め、これからは武装闘争で機動隊を突破していくという方法もあるな、と思うようになつた。さつきも書いた「ゲリラ戦の役割」なんてことも考えるようになったのは、この時で、そういう意味では、獄中にいた時期がちょっととぞれていたら、赤軍派と関わることはなかつたかもしれないですね。

僕の場合、武装闘争に新たな方向を見出

そうとしていたので、70年の12月に保釈で

出獄した時には、赤軍派以外の党派にはほとんど関心がありませんでした。だから、再び赤軍派から爆弾を作つてくれと依頼された時、躊躇することなくそれに応じ、爆弾専門の部隊に入った。この爆弾は、ダイナマイトを使用したものですが、時限爆弾のようなテロを目指すものではなく、ゲリ

ラ戦をやろうと。どこかに拠点をつくらなかった時代ではなく、新しい動きが始まつた時代ですから寄せ場にとことんお話しした横浜寿町を拠点に定めた。これを、僕らの部隊がゲリラ戦を開拓する

ラ戦のためのもの、現場で使うものです。「MG5」(注・当時、流行った整髪料)の瓶に入るよくなちつちやい奴。

70年12月沖縄の「コザ暴動」(→40頁)も

大きかつたですね。これはもう学生を主力とした運動ではなく、新しい動きが始まつているのだと感じました。そこで、「ゲリ

ラ戦」をやろうと。どこかに拠点をつくらなかったとしても、山谷の暴動なんかもあつた時代ですから寄せ場にとことんお話しした横浜寿町を拠点に定めた。そこでもお話しした横浜寿町を拠点に定めた。

僕は一貫して「クラスの代表」という感覚を持ち続けていた。全共闘運動のときも党派の活動家はいっぱいいたわけですが、そういう連中は得てして肝心なときに引いたところがあった。「党派の活動家つては、案外だらしがねえな」という感覚があつて、「だったら僕らがやりましょ」というふうにやつてきた。感覚としてはノ

ンセクト。この感覚は全共闘運動で培つたものでした。

党派の連中はヘルメットの色にこだわつて、一生懸命ヘルメットに色を塗つてしまつたが、僕は何色でもよかった。僕のヘルメットには「理」としか書いていなかつたんだけど、パクられて出てきたとき、自治会室にそれが飾つてあつたんですよ。この前27年ぶりに婆婆に出てきて、弘前のクラスの仲間と会つたときも、彼らが「植垣は僕らのクラスの代表のまま『連赤』までいつたんだ」と言ってくれた。そういうのは嬉しかつたですね。

この寿町のときも、自分ら独自の運動をつくりつていこうとしていた。「赤軍派内ノンセクト」っていうかな。たとえば僕らの部隊でいえば、たしかに坂東さんは赤軍派の中央委員だけれども、僕にしても、進藤隆三郎さんにとっても、山崎順さんにとっても、別に赤軍派でない人間だった。森さんは進藤さんを「遊び人」、山崎さんを

「不良」と規定しましたが、「遊び人」の人間関係がかなり役に立つた。処刑されそうになつた人は芸者さんだしね。そこに、さ

つきも言つたような、指導部との軋轢が生まれていくわけですが……。

——「銀行強盗」をやるときに、躊躇みたいなものはなかつたのですか?

なつていていたかも知れないところもあります。

——東アジア反日武装戦線のようなテロに進む方向ではない、新しいゲリラ戦ができたかもしれないですね。しかし、植垣さんの「兵士」という自己規定は、理論面については捨象しているというか、ある種の「安全弁」のように働いていませんか?

いや、違います。赤軍派の理論をもつてわけだから。

それは、自分でレーニンのバルチザン戦なんかを勉強してそう考へるようになつたのであつて、誰かに感化されたわけではありません。だから、赤軍派の軍に入らなくてそれなりのことはやつていたと思う。自分でなんとかを勉強して考へるようになつたのであつて、誰かに感化されたわけではありません。だから、赤軍派の軍に入らなくてそれをやつていたのが大きいですね。内容

はどうあれ、赤軍派の論文には軍事用語がたくさん登場する。それまで、「軍事」について考えたことがなかったので、それがすごく新鮮な感じがしました。でも、赤軍派の文章を読んでもさっぱりわからないから（笑）、毛沢東の軍事論文を読んだりしました。しかし、ダイナマイトの使い方も知らない連中が武装闘争するというのだから、そこがおかしいと思わないといけない。たわけですが、「作れないなら、私が作つて上げましょ」となつちやつた（笑）。

森さんはそこに、自然発生的な「共産主義化」の萌芽を見出したわけですし、彼らとしても、評価されたとすることで喜んでいたところがある。それが「総括要求」に転化していった。

これは今まであまり強調してこなかつた

「一人一党」的組織というか、それが赤軍派の強みでもあった。組織としての赤軍派は潰れてしまつたけれど、赤軍派的な人間は各地に残つて、なんらかの運動をやつしている。今から思えば、そういう良さをもなかつた？ それは非公然の活動だったからで

じょうか？

いや、赤軍派自体がそういう組織ではなかつたんです。最終的には「共産主義化」で全部変わつてしまつたわけだけども。

僕は党員ではなかつたし、赤軍派の「細胞会議」のようなものに呼ばれたことは一度もなかつた。「よじ号」の人たちや日本赤軍との接点もほとんどなかつた。森さんと梅内恒夫さん（注：69年9月、弘前大に植垣氏を最初にオルグに来た人物）との関係がおかしくなるというような党内闘争はあつたりしたんですが、僕らはそんなことに關係なく動いていた。党員ではないけど、僕は一番赤軍派の闘争をやつてたんですけどね（笑）。

同じ「軍」といつても、中核、革マルの「革命軍」と赤軍派の軍とではずいぶん違う。なにしろ赤軍派の軍は、無党派の人間をかき集めてゲリラ戦をやつて、「生き残った」者が次の闘争をやるというものでしたからね。「独立恩連隊」みたいだけど（笑）。ちょっと違うのはそれぞれの部隊に一応中央委員が入つて統括しているという形になつてゐることくらいかな。

4 脱命左派について

山岳ベースの どうえ方

そういうふうに考えると、革命左派と僕らは理論上のこととはもとより、組織の体質面でもずいぶん違つていきました。彼らの前身である「警鐘」グループ（66年4月→23頁）は共同生活をしたりして、家族的、あるいは閉鎖的だと言われていました。新左翼とは異質な存在で、新興宗教の組織に近い感じでした。

森さんはそこに、自然発生的な「共産主義化」の萌芽を見出したわけですし、彼ら

とても、評価されたとすることで喜んでいたところがある。それが「総括要求」に転化していった。

それに對し赤軍派は全国組織だし、軍をとつてみてもいろいろな地域から、それぞれ多様な人間関係をもつた人が集まつてきていた。だから「赤軍派は支持しないけれど、植垣は支持する」という人が組織の周りにいっぱいいた。

革命左派は、そういう個人的な人間関係が狭い。だから、権力に包囲されるとその弱さがもろに露呈して、山に閉じこもつてしまつことになった。彼らの山岳ベースには、そこに行くしかなかつたという側面があると思う。そして、共同生活というの影響を受けているわけだから、その真似をしたのでしよう。彼らにとっては作戦上の基地なのだが、彼にとつては革命の根拠地になつてゐる（→48頁）。

赤軍派と革命左派の一番の違いは、革命左派は閉じられた——サークル——なんだよね。サークルがそのまま党派になり、その組織形態のまま武装闘争までやつた。はじめから閉じられた、狭い組織形態です。

——遠山美枝子さんは、「ピクニック気分」で

山に入つて来たという見解（高橋権「語られざる連合赤軍」80頁）がありますが？

遠山さんはそれまで、赤軍派の軍といつ

るものに接触がなかつたから、日々の合法活動（注：赤軍派の大衆組織「革命戦線」での活動）で質問されたりすると、詰まつてしまつことがあつた。彼女が山に入つたのは、軍の雰囲気や状況・信頼性などを自分で確かめて、それからのオルグ活動に生かそうとしたからです。ですから、彼女が「ピクニック氣分」だったというのは、「言葉の綾」としてちよつと違つんじゃないかと思ひます。

僕らとしては、彼女がイヤリングをしていようがどうでも良かったわけで、戦力としてもあまりあてにはしていなかつたし、使い物にならなくても構わないと思つていた。でも、その部分を革命左派は問題にしたんだね。

ここにも、山岳ベースに対する考え方の違いがあらわれています。僕らの部隊にとつて、ベースはあくまで作戦上の基地であつて、共同軍事訓練なんかをやる場所じやつたんだね。

言つてゐるのに、結局彼の判断で、群馬県に行くことになつてしまつた（→56頁）。最後に山越えしなければならなくなつたのも、山で私服警官に遭遇した時の彼の判断ミスだつた（→98頁）。山越え自体も、僕の足が凍傷でダメになつてしまつたので、彼に先頭を代わつてもらつたけれど、それが道を間違える原因となつた。彼はことごとく判断を間違つていくんだよね。

あさま山莊だつてそう。仮定の話をしてもしょうがないけど、管理人夫人をどうするか中でも議論になつたようだけど、僕たつたら当然そんな人は邪魔だから出でてもいい、突破する方法を考えたと思う。立て籠もつて沈黙を守り続けるつていうのは、まったくもつて坂口的な戦術だね。

ほかの本（『連合赤軍27年目の証言』）でも述べたけど、彼の一貫しない裁判闘争――審、上告審で方針が180度変わつている――も、そういう判断違ひだと思われるをえない。

ない。ましてや共同生活の場でもない。僕

らには、作戦の足手まいになる人は不要であつて、ついてこられなかつたら帰せばいいという考え方があつた。これは、共同軍事訓練なんてことを考えた森さんの発想とも、山岳ベースが革命の根拠地という革命左派の考え方ともずいぶん違つていたと思う。

僕からすれば、彼らのほうが「山」の使ひ方を間違えていると思っていた。「そろそろいっぱい入つて来やがつて、目立つじやねえか」という感じで。そのへんにつけ連合赤軍全体で意思一致もされてなかつたし、その違いが悲劇を増幅したかもしれません。

――一般的に「連合赤軍の山岳ベース」という

と、追いつめられ「最後の場所」を求めて山へ逃げ込んでいったという、ひとつの悲壮感に満ちたイメージになります。そういう物語を求めているのかもしませんが。

坂口と永田

一方「なぜ永田洋子さんを支援するのか」とよく言われます。彼女は、総括を含めて自分がどういうことをやつてきたのかを一人では表現しきれないんです。だからそれが支えなければならない。

表現できないのは、問題が大きすぎると書いていいことばかりを、ただ「がんばる、がんばる」だけやつてきたからです。裁判になつてからでも、彼女は革命左派や赤軍派の総括文書をそのまま引用しながら自分の文章を書いてきたけれど、総括論争などの過程で、それではやつていけなくなつてしまつた。党派の論理に依拠できなくなつなりました。

また、彼女の病気のこともあります。彼女が法廷で文字通り崩れてしまうのを、なんとかしたかった。そのためには、なんらかの刺激を与え続けようと、法廷で元気づけたり、会話を交わしたりしたわけです。

の責任を負わせるような批判が起つた。そのためには、なんらかの組織だったのかを追求することができた。これも総体として彼女を支えることに要だから、そのためにも彼女を支える必要

みんな、僕ら（の部隊）が余裕をもつて山に行つたとは考えたくないんだろうね。

革命左派が「赤軍派は樂をしている」と批判したけれど、そう見えたのは、僕らに全国を飛び回ることができる圧倒的な機動力があつたからだつた。それが全然理解されないなかつたわけです。南アルプスのベー

スは山小屋をちょっと「借用」したものだけれども、革命左派にはそれが「樂している」ように見え、自分たちのベースでは小屋を作つてある。それは僕らにすればまるでこしいわけ。そういう違いや誤解が重なつていつた。

そういうこともあってか、坂口弘さんとは実践での判断でことじとく見解が違つていた。たとえば「伽葉山はもう危ない。群馬県は危ないから、福島へ行こう」と僕が

があつたのです。

必要となる時代がくる」と思いましたが、

本当にそんな時代になりそうですね(笑)。

【出国拒否の理由】

ですから、77年に出国を拒否(→130頁)したのは、「みんなから批判され苦労している人を見捨てて、自分だけ出て行けます」ということありました。僕が出てしまつと、赤軍派で連赤問題を総括する人間がいなくなつてしまつということもあります。僕はずっと外の状況を獄中から見ていましたから、「いま外に出ても、できることは高が知れてる」と思ったのも事実です。それ以上に、裁判という重圧のなかで自分のやつてきたことをきつちり総括していくことのほうが重要だと考えました。ですから、すべてを永田さんの資質に押し付けてようとする論理に対抗して、僕は党派の論理・思想といふものを問うてきたわけです。そのとき、「いつか僕のような人間がまた

塙見さんと論争するようになつてからです。簡単に言えば、国家が死滅する論理があるのに、党が死滅する論理がないじゃありませんか、ということから考えはじめました。あくまで党は永遠に生き残るのか、すべてが党に統合された社会が「共産主義社会」かといえば、違うわけですから。党の死滅、

国家の死滅を含んだ社会を構想しなければ、仮に革命で体制を壊しても、ソ連や中国と同じことになつてしまつ、そう考えるようになりました。80年頃だから、30歳くらいのときですね。

あるいは、文章を書くときに「私は」と書けるようになつたときから、ということがあります。「我々」ではなく「私」。これでがらッと変わつた。すべてを自分の言葉で言い換える作業をするようになつた。マルクス主義者でもマルクスの言葉を使う必要はない、というのはそういう意味です。

結局、「革命とは何か」を自分の言葉で語ることができます。それがなかつたというのが、最大の問題だった。そこから「連赤」へ至る自分

の解体が始まつたのだと思ひます。

【解体の時代】

塙見さんが壇をうとした体制は、現在解体状況に入つてゐると考へています。当時の体制は、内部の腐敗なども表には出ず、かな

り安定期に見えた。それが現在、内部から自己解体しているように見えるといふことです。たとえば最近、本人も汚職をしていた検事が、調査費の不正使用を暴露しよとして潰された事件がありました。極左がほとんどなくなつちやつたから「調査費」が余るわけで、僕らがいなくなつたために権力の腐敗が始まつたともいえる。外務省でもなんでも、そういう「腐敗」が組織全体を虫食いしている。当時僕らが暴力的に打倒しようとした体制が、内部の腐敗によつて崩壊しつつあるといふことです。

また、当時の時代を牽引していたのは左翼的な思想や文化だったと思うんですが、それが「連赤」によつてトドメを刺され自壊してしまつた。すると、思想や文化自体が解体し、希薄なものになつてしまつた、ということもあります。権力側の使命感もなくなりつあるのではないか。だからこそ彼らは危機感を募らせ、「盗聴法」から始まつて、「住民基本台帳法」「個人情報保

護法」、そして「有事関連法」やらを出してきて、何とかしようとしているんだと思いますね。だから、現在の体制は僕らが当時考へていたほど「強く」なくなつてゐる。仮に当時のような規模の運動が起これば、権力は簡単に崩壊するだらうけれど、問題はなぜそういう運動が起こらないのかといふことです。これだけ腐敗が進んでゐるのに大衆は動かないのか。それは、「その後」の展望が見えていないからだと思うんです。日

本社会の「未来図」が見えてこない。当時は「社会主義」と言つておけばどりあえず良かつたものが、今はそれに代わるものがない。官僚制や資本主義に代わるものを見えていないといふことが、みんなの動きを鈍くさせてゐる最大の原因だと思います。

そこが、これから運動の難しさですね。と付き合つてゐるのも、その一環です。

今後のこととで言えば、いろいろな人との意見交換を通じて、あらゆる階層と協力関係をどんどんつくつていきたいと思つています。静岡で飲み屋をやつていろいろな人と付き合つてゐるのも、その一環です。

静岡に店を出したのは、生まれ故郷といふこともあるんですが、もうひとつ理由がありました。01年は6月に静岡の知事選挙

【組織に依存しない個性】

つてくる。どんどんオープンにやろうと。僕らが壇をうとした体制は、現在解体状況に入つてゐると考へています。当時の体制は、内部の腐敗なども表には出ず、かな

り、どんどんオーブンにやろうと。僕らが壇をうとしたときから、とにかく運営していく必要はない。官僚制や資本主義に代わるものを見えていないといふことが、みんなの動きを鈍くさせてゐる最大の原因だと思います。

そこが、これから運動の難しさですね。と付き合つてゐるのも、その一環です。

静岡に店を出したのは、生まれ故郷といふことがあるんですが、もうひとつ理由が

あります。当然、運動のスタイルも変わつてゐます。当時僕らが暴力的に打倒しようとした体制が、内部の腐敗によつて崩壊しつつあるといふことです。

また、当時の時代を牽引していたのは左翼的な思想や文化だったと思うんですが、それが「連赤」によつてトドメを刺され自壊してしまつた。すると、思想や文化自体が解体し、希薄なものになつてしまつた、

ということもあります。権力側の使命感もなくなりつあるのではないか。だからこそ彼らは危機感を募らせ、「盗聴法」から始まつて、「住民基本台帳法」「個人情報保

護法」、そして「有事関連法」やらを出してきて、何とかしようとしているんだと思いますね。だから、現在の体制は僕らが当時考へていたほど「強く」なくなつてゐる。仮に当時のような規模の運動が起これば、権力は簡単に崩壊するだらうけれど、問題はなぜそういう運動が起こらないのかといふことです。これだけ腐敗が進んでゐるのに大衆は動かないのか。それは、「その後」の展望が見えていないからだと思うんです。日本社会の「未来図」が見えてこない。当時は「社会主義」と言つておけばどりあえず良かつたものが、今はそれに代わるものがない。官僚制や資本主義に代わるものを見えていないといふことが、みんなの動きを鈍くさせてゐる最大の原因だと思います。

そこが、これから運動の難しさですね。と付き合つてゐるのも、その一環です。

静岡に店を出したのは、生まれ故郷といふことがあるんですが、もうひとつ理由が

があつて、そのためにもいろいろな人が集まることができる場所がほしいということもあつたんです。

知事選と一派

が誕生したように、静岡でも自民党系の知事を倒そうということで、元さきがけの木野誠」という人が立候補したのですが、そ

れに“勝手連”的ように関わったのです

「イだ」なんていうガセネタをインターネットに流しているくらいだから。そういう人たちの発想からははみ出しているんだろうね。

いたと思いますが、なぜか来ません。警察も不祥事が続いているますし、ずいぶん「弱く」なった感じです。警察は「私の更生」に協力すべきではないでしょうか。「調査費」でもなんでもいいから飲みに来い（笑）。

全然勝手じゃないけど、文字通り勝手に連
帶した。『裏選舉対策』事務所としての飲
み屋というところでしょうか。民主党も支

特に回らず、共産党は独自候補を立てたこともあつて、落選しましたが、選挙中も選挙後も、いろいろ興味深い人間模様があつた。

「ノロン」では、お客様の間でいふたな問題が語られ、それが外に出ていくという流れができるつります。単なるおしゃべりでなく、実際の運動に絡んでいく」とも多い。けつこう全国的なつながりもある

士とか、会社の社長とかが多い。倒産した会社の社長が、僕に人生相談を受けて来れたりもします（笑）。20代もいますよ。ひとつすると、将来「バロン」が役に立つたという人がいるとすれば、それはそういう若い人たちかもしれないと思っています。来ないといえど、警察の公安も来ませんかね。かつてだったら、彼らがぴたつと張り付いて店に出入りする人間をチェックして

こうした僕の結括——党派の、ひいては組織の論理に対抗する強烈な個性をもつ、あるいは自分なりのやり方を確立する、そして協力関係をあらゆるところで築いていく——は、いま苦労している僕と同じ世代の人たちにも、必ず役に立つと思つています。

参考文献

- 【十六の墓標】(上・下・続) 永田洋子(彩流社)

【あさま山荘1972】(上・下・続) 坂口弘(彩流社)

【兵士たちの連合赤軍】 植垣康博(彩流社)

【連合赤軍27年目の証言】 植垣康博(彩流社)

【永田洋子さんへの手紙】 坂東國男(彩流社)

【優しさをください】 大槻節子(彩流社)

【語られる連合赤軍】 高橋檀(彩流社)

【銃撃戦と肅清】 高沢皓司編(新泉社)

【りんごの木の下であなたを産もうと決めた】 重信房子(幻冬社)

【新左翼二十年史、叛乱の軌跡】 高沢皓司／高木正幸／藏田計成(新泉社)

【新左翼三十年史】 高木正幸(土曜美術社)

【ブントの連赤問題総括】 荒岱介編著(実践社)

【連合赤軍の軌跡 獄中書簡集】 情況編集委員会(情況出版)

【「あさま山荘」籠城 無期懲役囚吉野雅邦ノート】 大泉康雄(祥伝社文庫)

【浅間山荘事件の眞実】 久能靖(河出文庫)

【連合赤軍「あさま山荘」事件】 佐々淳行(文春文庫)

【シリーズ20世紀の記録】連合赤軍“狼”たちの時代(毎日新

(河出書房新社)

【全共闘三十一年 時代に反逆した者たちの証言】 荒岱介／藤本敏夫／鈴木正文他(実践社)

北西風が党を鍛える 戦旗・共産同闘いの軌跡・第1部(戦旗社)

【命燃ゆ青春 ザ・全共闘】 月刊近代麻雀増刊号(竹書房)

【ジャパン・クロニック 日本全史】 講談社

【クロニック 世界全史】 講談社

【月刊 新聞ダイジェスト】 新聞ダイジェスト社

【日本史年表(増補版)】 東京学芸大学日本史研究室編 東京堂出版

写真提供

毎日新聞社／共同通信社／戦旗社

写真提供

- 【赤軍 RED ARMY 1969-2001】 KAWADE夢ムック文藝別冊
（河出書房新社）

【全共闘三〇年 時代に反逆した者たちの記録】 菩岱介／
／藤本敏夫／鈴木正文他（実践社）

北西風が党を鍛える 戦旗・共産同闘いの軌跡・第1部（戦
旗社）

【命燃ゆ青春 ザ・全共闘】 月刊近代麻雀増刊号（竹書房）
【ジャパン・クロニクル 日本全史】 講談社

【クロニクル 世界全史】 講談社

【月刊 新聞ダイジェスト】 新聞ダイジェスト社

【日本史年表（増補版）】 東京学芸大学日本史研究室編 東京
堂出版

週刊YEAR BOOK 「日録20世紀」 講談社
朝日クロニクル【週刊20世紀】 朝日新聞社

彩流社<連合赤軍当事者の証言>ほか関連書

連合赤軍

27年目の証言

「処刑を含め〈総括〉を担ったから、僕には逃げ道がないわけです……」。日本中を震撼させた歴史的事件の当事者が、同志殺害の真相解明と裁判闘争に賭けた27年の獄中生活を出所後、初めて語る迫真の書。

植垣康博 著

四六判並製 1800円+税

兵士たちの連合赤軍

<新装版>

(01・02)

連合赤軍事件の渦中にいた当事者が、獄中で綴った壮絶な青春の記録の新装版！「50年後、この本は教科書に載るだろう。……若者たちが何故あそこまで思いつめ、突っ走り、自滅していったのか。その謎を解きあかしてくれる本として」(鈴木邦男)

植垣康博 著

四六版並製 1800円+税

あさま山荘 1972

(上・下・続)

(93/95)

戦後史で衝撃的な事件として記憶に新しいあさま山荘銃撃戦の当事者が、沈黙を破って20年ぶりに筆をとり、内側から当時の状況を克明に描く。著者は連合赤軍事件全体に係わっており、その詳細な証言は貴重な歴史的遺産となった。

坂口弘 著

四六判並製 各 1845円+税

十六の墓標

(上・下・続)

炎と死の青春

(82/83/90)

連合赤軍事件はなぜ起きたのか？女性リーダーが、自らの生い立ち、学生運動から革命運動への道、共産主義化と同志殺害、逮捕後の苛酷な取り調べ、長期間にわたる裁判、闘病生活等を獄中から描く長篇手記。

永田洋子 著／瀬戸内晴美 序

四六判並製 上 1500円／下・続 1800円+税

私生きてます

死刑判決と脳腫瘍を抱えて

(86・06)

東京拘置所で服役中の著者が、自らの脳外科の手術・入院、闘病のなかでの裁判、瀬戸内寂聴氏らとの交流……。鉄格子をはさんで繰り広げられる極限の世界を、自筆画30点を交えて描く迫真的ドキュメント。

永田洋子 著／瀬戸内寂聴 序

四六判並製 1500円+税

獄中からの手紙

(93・07)

連合赤軍事件を象徴・体現してきた著者が、独房の中で難病と闘いながら死刑確定直前まで書き続けた読者への“最後”的手紙。収録内容／坂東国男さんへの返信／獄中医療と尿療法／庄司宏弁護士の遺言／内ゲバ克服のために、ほか。

四六判並製 1748円+税

編者…………椎野礼仁（しいの・れいにん）

1949年生まれ。団塊の世代として、当たり前のように、新左翼になった。ブント系だったので、本書に登場する何人かとは、同じ場所の空気を吸ったことがある。「連赤」については、今まで考えるのが怖かった。まともに向き合うにはシンドサを予感していたからだと思う。「したこと、しなかったこと」の質・量の多寡こそあれ、「連赤」は、誰にも突きつけられる鋭利な刃だ。今回の作業で、彼らのその後の人生の様相がさまざまに驚いた。ごく狭い選択肢しかないはずのなかで、一人として同じ生き方をしていない。僕にとっては、また謎が増えた。現在、編集プロダクション（有）椎野企画主宰。手がけた本は「1000本ノックを超えて——バレンタイン監督の日米野球論」（永岡書店）『愛と欲望の日本史』（祥伝社）、『交渉力』（講談社・新現代新書）など。ちなみに礼仁は本名。

DTP制作…………椎野企画

ブックデザイン…………山田英春

編集担当…………杉山尚次

オフサイド・ブックス……22

連合赤軍事件を読む年表

発行日◆2002年8月15日 初版第1刷

編者

椎野礼仁

発行者

竹内淳夫

発行所

株式会社彩流社

東京都千代田区富士見2-2-2 TEL 03-3234-5931

FAX 03-3234-5932

<http://www.sairyuusha.co.jp>

印刷

（株）平河工業社

製本

（株）三森製本

©2002, Printed in Japan

ISBN4-88202-621-X C0336

(98・05)

優しさをください

<新装版>

連合赤軍女性兵士の日記

連合赤軍事件で悲劇的な死をとげた女子学生が、68～71年にかけて遺した日記。60年代後半から70年代初頭、激動の時代の重圧にあえぎながらも、人間らしい生き方を追求した真摯な魂の記録。

大槻節子 著／立松和平 序

四六判並製 1500円+税

永田洋子さんへの手紙

『十六の墓標』を読む

(84・11)

本書は、あさま山荘銃撃戦で逮捕され、75年の日本赤軍のクアラルンプール米国大使館占拠で人質との交換条件として出国した著者が、『十六の墓標』を読んだ返信として書いた。連合赤軍問題に対する、国境をこえた一兵士の貴重な証言。

坂東国男 著

四六版並製 1748円+税

語られざる連合赤軍

浅間山荘から30年

(02・02)

あなたは本当の『連合赤軍事件』を知っていますか？——「あさま」山荘事件の坂口弘の「母親を支える会」の世話人で、事件の当事者たちと身近に接してきた著者が、永田洋子、坂口弘、植垣康博らの歩みを通して綴るもう一つの事件史。

高橋櫻 著

四六判並製 1800円+税

釜ヶ崎赤軍兵士 若宮正則物語

(01・01)

アンデスで非業の死を遂げた新左翼運動の異端児の生涯。
第1章 赤軍派へ 第2章 警視庁第八・九機動隊舎事件
第3章 大菩薩峠軍事訓練 第4章 釜ヶ崎へ 第5章 大阪・
水崎町交番爆破 第6章 連合赤軍事件と党内闘争 第7
章 獄中者組合 第8章 ピース缶爆弾事件の眞犯人証言
第12章 アンデスに死す 四六判並製 1800円+税

連合赤軍と オウム真理教 日本社会を語る

(96・11)

『日本赤軍派』の著者で、アメリカにおける日本の社会運動の研究者と、あさま山荘、松本サリン事件を担当した気鋭の弁護士による白熱の対談。二つの事件の類似性と相違点を抽出し、事件と日本社会の問題点を明らかにする。

パトリシア・スタインホフ、伊藤義徳 著

四六判並製 1800円+税

叛乱論〔新版〕

(91・15)

技術とニヒリズムの近代のただなかで生起する都市叛乱大衆の存在様式を捉え、この国の共同体=共同主観的真理の歴史に消し難い空隙を穿った60年代ラディカリズムの名著、新版。保守-革新の対立図式崩壊後の“秩序派”を刺す。

長崎浩 著／小阪修平 解説

四六判上製 1748円+税



9784882026211

ISBN4-88202-621-X

C0336 ¥1400E



1920336014009

彩流社
定価(本体1400円+税)

暴力的総括、 銃撃戦に至るプロセスを 立体的に構成

第1章 連合赤軍前史

1945-1969／新左翼の誕生から69年「4・28」まで

第2章 革命左派と赤軍派の出現

1964-1971／両派の「武装闘争」

第3章 連合赤軍の成立と「総括」

1971.11.30-1972.2.18／死に至る総括の過程と森・永田らの逮捕

第4章 ~~連合赤軍の内部問題~~

1972.2

第5章

1972.2

解説に代えて

山川謙博ロング・インタビュー／当事者による連合赤軍「いまだから語れること」

